

ISSN 1342-2405

# D.H.ロレンス研究

第18号

2008

日本ロレンス協会

# 目 次

## 論文

- ロレンス「と」ドゥルーズにおける動物への生成変化——ロゴスに対しいかなる逃走線を引くか……………三宅美千代 3
- 科学と進化のイデオロギー——D・H・ロレンスと *The New Statesman* ……………巴山 岳人 18
- D・H・ロレンスが乗ったサウスウェストの馬——ロレンスと小雑誌 <sup>リトル・マガジン</sup> *Laughing Horse* ……………川田 伸道 33

## 特別寄稿

- Reading D. H. Lawrence's "Leadership" Novel *Kangaroo* from a Post-colonial Perspective ……………Eunyoung Oh 47

## 書評

- 倉持三郎『「チャタレー夫人の恋人」裁判——ロ米英の比較』……………羽矢 謙一 66
- 加藤洋介『D・H・ロレンスと退化論——世紀末からモダニズムへ』……………門口 弘枝 70
- 古我正和『二十一世紀からロレンスを読む』……………鎌田 明子 74
- 吉村治郎『ロレンスの文学と思想——太陽とともに』……………宇佐美康子 78
- Antonio Traficante, *D. H. Lawrence's Italian Travel Literature and Translations of Giovanni Verga: A Bakhtinian Reading* ……………近藤 康裕 82
- Carl Krockel, *D. H. Lawrence and Germany: The Politics of Influence* ……………大平 章 87

- 
- ロレンス研究文献……………94
- 事務局からのお願い……………99

大会報告	100
会計報告	109
会則	113
『D. H. ロレンス研究』第19号原稿募集要項	116
掲載論文講評	118
役員一覧	120
編集後記	122

# ロレンス「と」ドゥルーズにおける動物への生成変化 ——ロゴスに対しいかなる逃走線を引くか

三宅 美千代

## 1. 言語表象行為についての問い

「言葉と肉」についての従来の図式を転倒し、ロゴス偏重主義により貶められてきた本能や肉体の権威回復を呼びかけるロレンス (D. H. Lawrence) の創作行為が、本質的矛盾を孕むことについては既に多くの研究者が指摘している。<sup>1)</sup> 前言語的カオス “the first dark rays of our feeling, wordless, and utterly previous to words” (“The Novel and the Feelings” 759) を原初の響きのままに保つ必要性を繰り返し主張する一方で、本能や肉体を描くロレンスの執筆行為は、言語以前の叫びをロゴスに従属させる結果を招きよせる。肉体を描写する、あるいは肉体について語るロレンスの言葉は肉体の模倣物にすぎず、カオスを内包した肉体そのものには決してなりえないという自家撞着がある。

にもかかわらずロレンスの場合、言語の表象性をめぐる同じ問いを抱いたアルトー (Antonin Artaud) とは異なり、「言語そのものを決定的な強制や排除や閉塞」(宇野『アルトー』51) ととらえるほどには悲観視していなかったため、言語表象性に対する懐疑が創作にどう反映されているかが見えにくいという状況がある。ロレンスは「絵画集序論」のなかで、セザンヌの表象行為における闘いに言及し、セザンヌのキャンバスの塗り重ねや塗り残しは、事物の 아우ラが制度化された認識のコードやイメージに回収されるのに抗い、画家がクリシェと格闘しつづけたことの証であると述べている (“Introduction to These Paintings” 576)。ロレンスがセザンヌの画布に見出したような表象行為における闘いの痕跡は、彼自身のテキストのいかなる身振りにおいて見出すことができるのか。本論は、ロレンスが言語の表象性といかに闘い、前言語的カオスをどのように創作に引き入れたかを、思想のなかにはなく、作品のな

かに見つけることを目指す。

具体的な方法としては、動物表象、とくに登場人物が動物と交感する場面に注目する。2000年以降とくに活発化している動物をめぐる議論でも指摘されるように、動物は西欧の伝統であるロゴス中心主義において、理性に対する「他者」として劣位に置かれてきたものの筆頭である（Wolfe x）。人間と動物の交感、ロレンスの作品に頻出するモチーフのひとつであるが、動物＝非ロゴスを描写する筆致にみられるある特徴——先回りして言えば、動物「とともに」書くこと——が、表象するもの（言葉）／表象されるもの（前言語的カオス、動物の生）の分離を回避し、身体に根ざした言葉を作品において実体化するための策として、いかに機能しているかを検証する。その過程で、テキストを固着化させる意味作用や解釈を解体し、「知覚しえぬもの」を前景化するための戦略としてドゥルーズ＝ガタリ（Deleuze-Guattari）が提示する「動物への生成変化」という概念を参照する。<sup>21</sup>

ロレンスと動物の問題を扱う研究は、動物イメージや象徴を分析する初期のもの（Innis; Wright）から、エコクリティシズム、エコフェミニズムを視野に入れたもの（田部井）まで複数存在する。なかでもノリス（Margot Norris）やバトラ（Nandita Batra）による動物論と関連づけて論じる試みは、動物表象の解釈に徹することの多かった従来の研究とは別の角度から、ロレンスと動物の問題を論じる視座を与えてくれる。ノリスは動物中心主義の視点を先見的に導入した著作のなかで、反人間中心主義の立場から動物中心主義的ナラティブを創造した作家の系列にロレンスを位置づけ、『セント・モーア』（*St. Mawr*）を人間中心主義解体の物語として読み解く（170）。バトラは、『恋する女たち』（*Women in Love*）の動物象徴を分析して、人間／動物中心主義という両極の見方が、作品のポリフォニックな構成にどう影響しているかを分析する（91）。またベル（Michael Bell）も、動物を言語によって作品化する際に人間中心主義を回避するための手法として、とくに蛇の詩にみられる“bracketed personification”（101）を指摘し、動物表象の問題を視野に入れている。

動物についての議論は、動物権利に関するものから、芸術作品における動物描写に関するものまで多岐に及んでいるため決して一括りにはできないが、い

ずれの場合も哲学的考察の対象から外されてきた動物の存在を議論の中心に据えることで、人間中心主義、ロゴス中心主義を反省し、人間と動物の関係を問い直すという倫理的要請を共有する。例えばデリダ (Jacques Derrida) は、デカルト以降の西洋哲学における動物の記述を再読し、動物を無垢の存在とみなし、人間だけが表象行為の主体になりうると考えてきた西洋哲学の傲慢を告発している。また他者としての動物をいかに理解、表象するべきかという問いは、動物がアレゴリーや寓話のなかでステレオタイプ化され、意味内容伝達のための道具として固有の生を剥奪されてきたという主張や、動物表象行為における搾取の構造を指摘する議論に引き継がれている (Tyler)。<sup>3)</sup>

本論はこのような問題意識を継続しながら、動物表象の解釈、意味の探求を目的とはせず、作家が動物を描く行為において、どのような関係性を人間と動物のあいだに構築したかを考察する。ロレンスが何を描いたかではなく、いかにして描いたかというエクリチュールの様態を論の射程におさめることで、動物を描く筆致にみられる他者表象、非ロゴスを言語化することについての意識を問うことが可能になるはずだ。

## 2. 「動物への生成変化」の有効性

アメリカ大陸での経験について書かれたエッセイ『メキシコの朝』 (*Mornings in Mexico*) のネイティヴ・アメリカンの伝統儀礼について書かれた箇所は、表現行為に関するロレンスの考えを探るうえで貴重な手がかりを与えてくれる。なかでも鹿、バッファロー、熊といった野生動物に扮するダンサーたちが踊る鹿ダンス (deer dance) にまつわる記述は、表象行為に関するロレンス独自の思考を含んでいる。鹿ダンスのダンサーは、それぞれの役割に応じて、様々な動物の毛皮や角を身にまとして登場するのだが、彼らは動物を表象しているのでも、動物の役を演じているのでもなく、ただ動物になっているとロレンスは指摘している。

There is none of the hardness of representation. They are not representing something, not even playing. It is a soft, subtle *being* something. (58)

上述のタイラー (Tyler) も指摘するとおり、アレゴリーや寓話における動物は、擬人化、意味内容の押しつけにより、しばしば固有の生を奪われステレオタイプ化されてしまう (47)。その場合、動物は予め与えられた意味内容を具現化する役割を担い、ダンサーはその動物を演じることで支配的意味作用への従属を強いられる。見物人の眼前の身体は、大いなる意味の幻影、模倣物にすぎない。しかし上の引用は、ロレンスが鹿ダンスをそのような意味作用の場とはみなさず、むしろダンサーの動物に「なる」身振りのなかに、表象と被表象のギャップを回避し、意味に奉仕しない身体そのものを前景化する可能性を感じとっていることを示している。

ドゥルーズ=ガタリは、人間と動物のあいだに宙吊りになる状態を概念化した「動物への生成変化」というポスト・ヒューマニズムの着想によって、多様性に関かれたハイブリッドな存在の様式を示している。動物への同情、共感、動物性への回帰とは厳密な意味で区別される (『千のプラトー』297) この「動物への生成変化」の概念は、「説明すべき行為、解釈すべき夢や幻想、思い出すべき幼児記憶、意味する言葉」(186) といった「シニフィアンのシステムの限界」(137) を逃れるための方策とみなされ、そのおもな批判の対象として、精神分析による動物解釈を想定している。ドゥルーズ=ガタリの反精神分析の立場は知られているが、カフカ (Franz Kafka) の描く動物がマイナー文学を立ち上げるうえで果たす機能に言及するとき、上述の鹿ダンスを観察するロレンスと同様、イデア的同一性を希求することによる表象行為の停滞を打破する可能性を、動物に「なる」という身振りのなかに見出している。ドゥルーズ=ガタリが目にするのは、例えば『変身』のなかで、物語の途中から登場する3人の下宿人が「以前父親と母親とグレーゴルとがすわった場所」(76) に腰掛けるという描写である。主人公グレーゴル・ザムザが甲虫に「なる」ことと、父母子という精神分析におけるクリシェの図式が一時的に無効化することの関連を指摘し (『カフカ』24)、カフカの「動物への生成変化」は、解釈、意味作用といった言語における権力関係を回避し、脱領土化に至る「ひとつの出口の可能性」(20) を示すと論じている。

動物に変化するということは、(……) 境界を越えることであり、もはやそ

れ自体に対してしか有効でない強度の連続性に肉薄することであり、純粹な強度の世界を見出すことである。そのような世界においては、すべてのフォームがこわれ、また意味スルモノ・意味サレルモノというすべての意味作用もこわれて、そのかわりに、まだ形成されていないマチエール、非領域化した流れ、意味作用をしない記号が現れる。(20-21, 強調は引用者による)

人間と動物の境界を希薄化する生成変化は、表象における二項対立を解体し、意味作用から零れ落ちる無意味なものを擁護するための戦略になっている。従ってドゥルーズ＝ガタリの読解において、カフカの作品の動物たちは、解釈を必要とする一義的な意味をもたず、むしろ意味作用に貢献しない「強度」の領域を実現するための意匠であると理解される。このように、ロレンスとドゥルーズ＝ガタリはともに、人間と動物の領域の揺らぎを経ることで、意味作用の牢獄に閉じ込められている「知覚しえぬもの」の響きに耳を傾けようとする。このことはドゥルーズ＝ガタリがロレンスをその思想に取り込んでいることからすれば当然と言えるのかもしれないが、それでも両者の共通点として注目し値する。<sup>1)</sup>

### 3. 亀の詩における「動物への生成変化」

ドゥルーズ＝ガタリは英米文学の作家にもたびたび言及して、彼らの表現行為が生成変化と密接な関わりをもつことに驚嘆している。ロレンスの亀の詩にも繰り返し触れ、とくにはじめの2編“Baby Tortoise”と“Tortoise Shell”に「彼[ロレンス]一流の亀への生成変化」があると、とくに内容に立ち入ることなく指摘している(『千のプラトー』290)。彼らはいくまで肯定的に作家や作品を列挙するスタイルをとっているため、これら2編をそれ以外の亀の詩よりも優れているとする本当の理由は不明である。<sup>5)</sup> ただし彼らが言及する2編には、それ以外の作品にみられるような、背中に十字架紋様のある亀を性に苦悩する人間に比する記述がないことは特筆すべきだろう。“Tortoise Shell”には既に“The Cross”という語がでてくるが(1)、亀の甲羅や体形を凝視するような眼差しで描写するこの作品では、他の詩と比べて、語に与えられている十字架の含意が薄い。またドゥルーズ＝ガタリの観点からすると、十



十字架は過剰なキリスト教的含意を剥ぎ取られ、十字模様として立ち現れると考えられる。

一方、雌雄の亀の様子がユーモラスに描かれる“Lui et Elle”に出てくる“His adolescence saw him crucified into sex” (69) や、亀が交尾のときに漏らした“the inexpressive faint yell”を題材にした“Tortoise Shout”の“Why were we crucified into sex?” (9) という詩行は、亀に投影されている人間的主題を読み手に強く意識させる。チャウデュリ (Amit Chaudhuri) は、言語によってとらえられた動物の生はその模倣、再現にしかなりえないと述べ、ロレンスの動物詩の限界を指摘するが (69)、性の十字架を背負わされ、擬人化された亀は、とりわけ動物の生から遠ざかっているとと言えるだろう。ドゥルーズ＝ガタリの言及する 2 編は、人間的意味への還元をせまるこのような口調をもたないため、それ以外の作品と比べて、彼らの言う厳密な意味での「動物への生成変化」の持続のうちに書かれている。しかしロレンスの亀の詩は、動物の擬人化や持続的生成変化の特徴とはまた別に、主体の意識が動物の領域に侵され、その瞬間人間と動物が対等に接続するというロレンス独自の生成変化の身振りとも言うべきものを示している。

例えば“Tortoise Shout”には、語り手“I”が動物の領域に入り込む瞬間をとらえた箇所がある。詩の前半では、「表現しえない」と形容される亀の叫び声の不思議な本質に迫ろうとするかのように、あるいはどんな語をもってしても言い表すことのできない言語の不毛性を露呈するかのように、“A scream, / A yell, / A shout, / A pæan, / A death-agony, / A birth-cry, / A submission, / All tiny, tiny, far away, reptile under the first dawn” (16-23) と「叫び声」がさまざまな言葉で言い換えられ、語り手は言葉によって対象に対峙している。しかし、雄亀が叫び声をあげるクライマックスの場面の詩行では、自分の身体の「原形質までもが溶解」し、亀と同じ「原始の生の在りよう」に戻ったと感じる語り手自身の身体が突然前景化し、語り手と亀の領域浸透が知覚されている。

The inexpressive faint yell— / And so on, till *the last plasm of my body*  
was melted back / To the primeval rudiments of life, and the secret.

(46-48, 強調は引用者による)

ドゥルーズ＝ガタリは「動物への生成変化」を、人間の動物化でも、動物の擬人化でもなく、あくまで一方になりつつある他方という「差異化の運動」(宇野『D』62)として考えるが、亀に「なる」語り手の身体は動物界の貫入を受けて、まさに人間と動物の領域がせめぎあう場となり、その異種混成性において、表象行為の主体＝人間と、表象される対象＝動物のあいだの権力関係は無効化している。人間の似姿として亀を見つめる視点に含まれる人間の優位性は、主体に動物領域が侵入することにより一時的に解体する。

このような語り手と亀の領域浸透は、エッセイ「小説と感情」(“The Novel and the Feelings”)のなかで“darkness”を表現する最良のメディアとしてロレンスの信頼を勝ちとっている小説において、より一層意識的に描かれている。というのもロレンスの小説には、早い段階から人間と動物を含む自然との交感の挿話が多くみられ、しかもそのうちのある場面では、自己没入的に動物を愛する人物を登場させ、別の人物にそのことを批判させているからである(例えば『恋する女たち』で、ハーマイオニの動物への共感をバーキンが批判する場面)。ロレンスの小説には「他者としての動物」、「擬人化された動物」、「クリエイティヴな象徴としての動物」(Inniss 14)というように、様々な役割をもつ動物が登場する。勿論これらの動物表象をすべて同等に扱うことはできないが、小説作品のなかから、人間と動物の「あいだ」を問題化している場面を取り上げる。「あいだ」に生じる生成変化とそこでの力作用を考察することで、エクリチュールにおける人間と動物の権力関係を問うことができる。

#### 4. 「ロスト・ガール」と「セント・モーア」

『ロスト・ガール』(*The Lost Girl*)でアルヴァイナ(Alvina Houghton)が炭坑に出かけていき、石炭で真っ黒に汚れた炭坑夫に魅せられる場面は、動物がテキストにおいていかなる役割を果たしうるのかを示している。アルヴァイナは炭坑夫と話をし、その労働者訛りの声を聞くうちに、炭坑夫という未知の存在が自分の方に押し寄せてくる(“seemed to impinge on her” 47)感じを抱く。このとき炭坑夫はコウモリになぞらえられるが、そればかりでなく、

アルヴァイナ自身までもがコウモリになってしまいそうな気がしたと書かれている。

*[N]ot human: a creature of the subterranean world, melted like a bat, fluid. She felt herself melting out also, to become a mere vocal ghost, a presence in the thick atmosphere. Her lungs felt thick and slow, her mind dissolved, she felt she could cling like a bat in the long swoon of the crannied, underworld darkness. Cling like a bat and sway forever swooning in the draughts of the darkness— (47, 強調は引用者による)*

コウモリのイメージは、アルヴァイナが「コウモリみたいにぶら下がることができそうと感じ」るに至るとき、炭坑夫という指示対象をもつメタファーとしてのみならず、炭坑夫とアルヴァイナをつなぐ連結器としても機能する。このときコウモリのイメージは、連結を果たすために両者が目指すべきアイデアとして君臨するのではなく、アルヴァイナの身体を深く動物＝非知の領域に貫入させ、人間とも動物とも異なる細胞組成に組み換える働き（つまりドゥルーズの言う「アレンジメント」の働き）をするのである。アルヴァイナに生じる溶解、呼吸の変化、緩慢さは、その身体が新たな「アレンジメント」を獲得しつつあることの表れとして理解できる。

『セント・モーア』のなかで、ルウ (Lou Witt) が、「悪」の象徴、圧倒的な他者として描かれる馬のセント・モーアと交感する場面でも、人間と動物のあいだに可変性の連結が生じている。以下の引用は、ルウがはじめてセント・モーアをみにいき、畏怖に満ちた様子で立つ馬に感応するくだりである。

*It was as if she had had a vision, as if the walls of her own world had suddenly melted away, leaving her in a great darkness, in the midst of which the large, brilliant eyes of that horse looked at her with demonish question, while his naked ear stood up like daggers from the naked lines of his inhuman head, and his great body glowed red with power. (St. Mawr 30-31, 強調は引用者による)*

ルウは自分と世界を区切る壁が溶解するのを感じ、セント・モーアとのあいだに回路を得るが、重要なのは、やはり動物が人間を他者性の領域に招き入れる役割を果たしていること、そのときルウは、行為主体としての意志をもたず、受身の状態で投げ出されていることだ。またルウはリコ (Rico) が大怪我を負い、“vision of evil” (78) をみるという経験の後、セント・モーアと再び交感をもつ (“A strange animal atmosphere of sadness [...] made her feel as though she breathed grief. She breathed it into her breast [...]” 83)。この場面は、動物の感情を人間的意味へ還元する “sadness” “grief” という語を含むため、“crucifixion” の語をもつ上述の亀の詩と同様、厳密な意味での「動物への生成変化」の例とは必ずしも言えない。それでも、人間と動物の「あいだ」に通うものが、「胸」というほかならぬ身体において感受されている点は注目に値する。

また、「動物への生成変化」の主体であるアルヴァイナとルウが、どちらも特定の領域には属さず、外部を志向するアウトサイダー的人物として設定されていることは決して偶然ではないだろう。例えばアルヴァイナは中産階級出身でありながら、結婚せずに職を転々とし、階級的因習を逸脱していく人物として、ルウは未知の言語や環境に対して開かれた意見の持ち主でありながら、帰属先をもたない人物 (*St. Mawr* 21) として描かれている。このような人物が物語のなかで様々な他者と連結し、「あいだ」が生成されていくことで、テキストにおいて多様な領域間の連結が生じる。アルヴァイナは炭坑夫 (=労働者) の領域と連結し、中産階級の記号を書き込まれた身体とは異質の細胞組成を獲得する。ルウは物語の後半で、母親と異なる人種的背景をもつ使用人たちとともに、セント・モーアをつれてアメリカに向かう。このような筋書きもまた、階級や人種の違いを超えて様々な領域同士を結びつけ、テキストを多様な外部へと導く「逃走線」を引くための一助となりえている。

## 5. ロレンスのエクリチュールにおける強度

本論で考察してきた3つの「動物への生成変化」の場面について、共通して言えるのは動物に「なる」主体の理性が希薄になり、代わりにその「身体」が前景化すること、それに付随してテキストに身体の物質性が浮上することであ

る。アルヴァイナの描写には“her mind dissolved”という記述（既出の引用強調箇所）がみられ、ルウは馬との感応により涙を流す（30）。<sup>6）</sup> 詩人＝語り手は「自分の身体」、アルヴァイナは「肺」、ルウは「胸」で連結を受けとめたと書かれていることから、交感という出来事が、他者や外部の多様性との連結を「身体」において実現し、テキストに身体の物質性を実体化する機能をもつことは明らかである。

このような「動物への生成変化」の実践は、ロレンスのエクリチュールにおけるふたつの強度をあぶり出す。ひとつは、動物と連結しつつ語る、あるいは連結する状況を語ることで、表象される動物／表象する人間と言語の隔たりの問題が回避されることである。動物に身を寄せつつ書く、動物「とともに」書くことは、動物「について」書くこととは異なり、直線的意味作用の支配を免れうる。実現の度合いにはムラがあるものの、動物を人間的意味に還元しないかたちで、人間と動物の「あいだ」に生じる可変性の関係が描かれる。このような生成変化のエクリチュールは、非ロゴスをロゴスに従属させることなくいかに語りうるかという、冒頭で触れたようなロレンスの執筆の本質的矛盾に対する無意識の解答であるのではないか。またここにこそ、表象行為における同一性への憧憬を差異と反復のメカニズムによって否定したドゥルーズ（『差異と反復』）と、ロレンスとの「あいだ」に等しく賭けられているもの——「知覚しえぬもの」の一回性の輝きを、意味作用による固着化から救い出そうとすること——があるのかもしれない。

ふたつめは、上述したように、ロレンスの描く生成変化の場面では、人間と動物のあいだに表象行為をめぐる力関係が発動せず両者が対等に結びついているため、動物＝他者を人間が表象する行為に付随する人間中心主義を免れうるということである。ロレンスからの影響が知られている詩人テッド・ヒューズ（Ted Hughes）は、他者である動物の生命を詩の言葉によって捕らえることを躊躇わず、自作の詩にてでくる動物のほうが実際の動物よりもリアルであると断言する（20-21）が、ロレンスがエクリチュールにおいて動物との「あいだ」を目指す関係性は、ヒューズとは対照的だ。このことは上で触れた、人間がいかに動物を表象しうるのかという動物論の問いとも通底する。人間と動物の「あいだ」を問題化し、表象の優劣を回避するロレンスの筆致は、他者であ

る動物の物言わぬ声を必ずしも奪わずに語ることを可能にしている。<sup>7)</sup>

Notes

\* 本稿は、2007年日本ロレンス協会第38回大会での発表原稿を加筆修正したものである。

- 1) ロレンスと言語表象性の問題は、フーコーのロレンス批判以降、ロレンス研究の議論でもたびたび浮上している。例えば Anne Fernihough, *D. H. Lawrence: Aesthetics and Ideology* (Oxford: Clarendon Press, 1993); Daniel J. Schneider, "Alternatives to Logocentrism in D. H. Lawrence," *South Atlantic Review*, vol.51, No.2 (1986), pp. 35-47を参照。
- 2) ドゥルーズの思想は、論者にある特殊な注意力を要請するように思われてならない。もちろんその概念を代入法的に援用することによっても、十分刺激的な議論を得られることは、先行論文の証明するところである。とはいえ、ドゥルーズとロレンスが共有した脱一二元論的主題を考慮するとき、ドゥルーズのロレンス読解を鵜呑みにするのも、ドゥルーズの思考を作品分析の道具にするのでもないやり方を（実現の可能性は別として）目指す必要があるのではないか。つまり、ロレンスとドゥルーズのあいだに、支配従属関係をつくらず、「と」にすること。これが、本論の題名でロレンスとドゥルーズをつなぐ「と」の意味するところでもある。
- 3) 動物論は、ポストコロニアル批評やフェミニズム批評における他者表象の議論を引き継いでいる。詳しくは Wolfe, Steeves がそれぞれ編集した論文集を参照。
- 4) ドゥルーズのロレンス受容については、新井論文を参照。
- 5) ドゥルーズ＝ガタリがはじめの2編を偏愛する理由は、彼らが動物を意味作用に関与しない群れの「変則者」とみなし、「ありふれた、あるいは主体化された情動を含むこともなければ、特定の、あるいは意味深長な性格を含むこともない」（『千のプラトー』282-83）と定義することとおそらく関係している。
- 6) ひな鳥を見てコニーが涙する『チャタレー卿夫人の恋人』（*Lady Chatterley's Lover*）の有名な場面もここに含めることができる。

- 7) 本論では触れる余裕がないが、生成変化の主体が女性として描かれる場合が多いということは、マイナーなものに身を寄せて書こうとする作家の一貫した執筆態度を表しているようだ。このことは、ドゥルーズ＝ガタリが「動物への生成変化」と並列的に論じる「女性への生成変化」との関係において理解することが可能だろう。もうひとつ言及できなかった事柄として、ドゥルーズがロレンスの『黙示録』について書いた文章のなかで述べているロレンスと象徴の問題がある（『批評と臨床』）。ロレンスの象徴は直線的意味作用ではなく、不在の意味を中心点として、様々なイメージがその周囲を「ぐるぐる旋回」（101）する「回転式の思考」（100）であるとするドゥルーズの見解は、ロレンスの動物象徴についてのより深い理解を得る手がかりを与えてくれるだろうが、これらについては稿を改めることにしたい。

#### Works Cited

- Batra, Nandita. "‘The Only Animal to Fear’: Fables of Sexuality and Aggression in D. H. Lawrence’s *Women in Love*." *Bestia* IX (2002/2003) : 89-99.
- Bell, Michael. *Literature, Modernism and Myth*. Cambridge: Cambridge UP, 1997.
- Chaudhuri, Amit. *D.H. Lawrence and ‘Difference.’* Oxford: Clarendon P, 2003.
- Derrida, Jacques. "And Say the Animal Responded?" Wolfe 121-46.
- Hughes, Ted. *Poetry in the Making*. London: Faber and Faber, 1967.
- Inniss, Kenneth. *D. H. Lawrence’s Bestiary*. The Hague/Paris: Mouton, 1971.
- Lawrence, D. H. *The Complete Poems of D. H. Lawrence*. Ed. Vivian de Sola Pinto and Warren Roberts. Harmondsworth: Penguin, 1977.
- . "Introduction to These Paintings." *Phoenix: The Posthumous Papers of D. H. Lawrence*. Ed. Edward D. McDonald. New York: Viking, 1936. 551-84.

- . *Lady Chatterley's Lover*. Ed. Michael Squires. Cambridge: Cambridge UP, 1993.
- . *The Lost Girl*. Ed. John Worthen. Cambridge: Cambridge UP, 1981.
- . *Mornings in Mexico and Etruscan Places*. London: Heinemann, 1975.
- . "The Novel and the Feelings." *Phoenix: The Posthumous Papers of D. H. Lawrence*. Ed. Edward D. McDonald. New York: Viking, 1936. 755-60.
- . *Phoenix: The Posthumous Papers of D. H. Lawrence*. Ed. Edward D. McDonald. New York: Viking, 1936.
- . *St. Mawr and Other Stories*. Ed. Brian Finney. Cambridge: Cambridge UP, 1983.
- Norris, Margot. *Beasts of the Modern Imagination: Darwin, Nietzsche, Kafka, Ernst, and Lawrence*. Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1985.
- Steeves, H. Peter. *Animal Others: On Ethics, Ontology, and Animal Life*. New York: State U of New York P, 1999.
- Tyler, Tom. "Quia Ego Nominor Leo: Barthes, Stereotypes, and Aesop's Animals." *Mosaic* 40.1 (2007): 45-57.
- Wolfe, Cary, ed. *Zoontologies: The Question of the Animal*. Minneapolis: U of Minnesota P, 2003.
- Wright, Raymond. "Lawrence's Non-Human Analogues." *Modern Language Notes* 76.5 (1961): 426-32.
- 新井英永「《ドゥルーズとロレンス》脱領土化と再領土化——『千のプラトー』と『アロンの杖』』『D・H・ロレンスと新理論』荒木正純・倉持三郎・立石弘道編, 国書刊行会, 1999年, 112-29頁。
- 宇野邦一『D——死とイマージュ』青土社, 1996年。
- 『アルトー——思考と身体』白水社, 1997年。
- カフカ, フランツ『変身』高橋義孝訳, 新潮文庫, 1992年。
- 田部井世志子「エコフェミニストとしての D. H. Lawrence—*Birds, Beasts and Flowers* を中心に」『北九州市立大学文学部紀要』62 (2001): 49-88頁。
- ドゥルーズ, ジル『批評と臨床』守中高明, 谷昌親, 鈴木雅大訳, 河出書房新



社，2002年。

ドゥルーズ，ジル，フェリックス・ガタリ『カフカ——マイナー文学のために』

宇波彰，岩田行一訳，法政大学出版局，1978年。

——『千のプラトー』宇野邦一他訳，河出書房新社，1994年。

## Lawrence “and” Deleuze: Strategy of Becoming in Lawrence’s Writing of Animals

Michiyo MIYAKE

As critics have suggested, the aim of Lawrence’s writing to describe “darkness” intrinsically involves a contradiction. No matter how much he attempted to negate logos, his role as a writer could not allow him to abandon words in giving expression to the unknowable. Thus, as has often been recognized, his work was produced under the oscillation between optimism and despair over words.

The aim of my paper is to uncover one strategy that enabled him to write *beyond* this difficulty, by focusing on the representation of animals. In writing of animals, in such works as the tortoise poems, *The Lost Girl* and *St. Mawr*, a textual interzone is established between the human and the animal. Lawrence’s strategy in establishing this interzone will be explained with reference to the notion of “animal-becoming” by Gilles Deleuze (or Deleuze-Guattari), a conceptualisation of a territory in-between that yields to neither area.

This paper is also an attempt to place Lawrence’s animal representations within the context of current discussion on animality. The interzone that appears in Lawrence’s text annuls the dualism that ensures the supremacy of human as a narrator who speaks for the wordless animal. Such attempts in writing suggest an alternative way of dealing with the power relations between the narrator (human) and the narrated (animal) as well as the problem of how we can speak of unknown others.

# 科学と進化のイデオロギー

——D・H・ロレンスと *The New Statesman*

巴山 岳人

## 1. 序論

1913年にD・H・ロレンスは、その年の4月に創刊されたばかりの雑誌 *The New Statesman* (以下 *NS*) へいくつかの作品を投稿し、そして掲載された。<sup>1)</sup> 同誌は19世紀末に設立された社会主義団体であるフェビアン協会 (The Fabian Society) を母体とした週刊誌である。従来のロレンス研究においては、この作品掲載について関心が向けられることはなく、<sup>2)</sup> またロレンスとフェビアン協会を中心に取り上げた考察もみられない。ロレンス自身もこの時期にはすでに社会主義に対する興味を失っており (Worthen 184)、さらにある手紙の中では、創刊間もない頃の *NS* を読み、それに低い評価を与えている——“what a measly thing [George Bernard] Shaw's *New Statesman* was! God help him” (*Letters* 552)。

本論はロレンスと *NS* のテキストを相互に参照しながら、そこに共通してみられる思想傾向を明らかにすることを試みる。それは具体的には、生物学的進化論とそれに基づいた政治性である。そしてある言説空間を構築する一部としてこれらのテキストを読むことと、その際に雑誌メディアに注目することの必要性を指摘していきたい。

## 2. フェビアン協会, *The New Statesman*, 科学

はじめにフェビアン協会の特徴と *NS* 発刊の経緯について、簡単に触れておきたい。フェビアン協会が正式に発足したのは1884年であるが、社会主義団体として本格的に活動を開始したのは、後に加入した G・B・ショウ (George Bernard Shaw) や S・ウェッブ (Sidney Webb) らが執行部の中心となった

1880年代後半からである。活動の内容は貧困や格差を解消するための社会主義理論の研究や政策の立案であったが、それらの実践のために独自の政党を設立するというのではなく、自由党そして時には保守党へ自らの政策実現を働きかけていく浸透（permeation）策を行っていた。政策の方向性としては、政府の主導により行政の専門家としての官僚が社会改良を遂行する国家社会主義の立場をとっており、これは労働者による革命というマルクス主義の理想とは異なる。よって協会は知的中産階級に対する社会主義への教化を重視しており、会員の大部分もまたその階級の出身であった。<sup>3)</sup>

NSの創刊については、協会の内部対立が大きく関わっている。1910年前後にS・ウェップやその妻のB・ウェップ（Beatrice Webb）ら古くからの執行部に対して、より若い世代の会員の一部が浸透策や中央集権制といった主張、そして労働者階級の軽視といった点に反発し、労働組合による産業や政治の統治を目指すギルド社会主義を唱え始めた。1907年に創刊された週刊誌 *The New Age* がその主張を誌面で展開し、ウェップ夫妻らに執行部寄りの宣伝媒体の必要性を認識させることとなった。結果としてウェップ夫妻が主導しショウらが資金援助することにより、NSが創刊されたのである（Smith 10-33）。

ではNSにはどのような論調の記事が掲載されていたのであろうか。編集長となったC・シャープ（Clifford Sharp）がウェップ夫妻に近いフェビアン協会会員だったこともあり（Hyams 26）、同誌には中央集権的もしくは集産主義的な社会主義といった、執行部またはウェップ夫妻寄りのフェビアン主義に沿った主張の記事が多い。その中で目を引くのが、科学への言及である。例えば創刊号の“The New Statesman”と題された、同誌のマニフェストともいえる記事は、「科学者や生物学者が試験管や標本に向きあい検査する」ように社会問題を扱う必要性を説き、科学のもつ「公平さ」の精神の重要性を訴えている——“unless there can be applied to them [social problems] something at least of the detachment of the scientific spirit, they will never be satisfactorily solved”（5）。また当時の優生学者であるC・W・サリービィ（Caleb William Saleeby）は“Lens”という偽名を用いて、科学に関するエッセイを同誌に不定期に連載していた。<sup>4)</sup> さらに同誌は政府の各種統計報告書にコメントを加えた別冊を“Blue Book Supplement”として月に一度発行していたが、

それも社会を数値化して理解するという一種の科学的思考の表れだといえる。

フェビアン協会員、特にウェッブ夫妻が科学に関心をもっていったことは、広く知られている。彼らはヴィクトリア朝に発達した諸科学に影響を受け、そこに見出される法則を政治に適用することで、社会全体を効率的に機能させようとしていた（名古 109-11）。NSにおける科学に関する諸記事は、フェビアン協会におけるこうした傾向の表れであり、科学に基づいた政治という同協会の哲学を広める狙いがあったといえる（Hyams 12）。

### 3. 生物学的進化としての精神の発達

いわゆる機械論的な科学を敬遠する傾向のあった従来のロレンス批評においては、前節でみたような特徴をもつNSやフェビアン協会を取り上げることは、違和感があるかもしれない。しかし本論ではむしろ、NSにおける科学への言及にこそ、ロレンスとの関連性を論じる可能性を見出すことを試みたい。<sup>5)</sup>

NSの科学に言及した記事を見ると、そこで重視されているのは機械論的な観点ではなく、科学と精神性の発達との関連であることがわかる。例えば1913年6月に掲載された“Lens”による記事は、生物活動における精神性の存在を無視し生物を一種の機械とみなしているとして、19世紀の生物学者達を批判する——“our explanation or definition of life [...] must survey and include not only body, but also mind. That was what the last generation forgot. [...] Elated and impressed by such discoveries [of many laws of mechanics and chemistry], our predecessors declared that the living body is a physico-chemical machine” (“Nature” 266)。また1913年5月に掲載されたB・ラッセル (Bertrand Russell) のエッセイも、科学と精神発達との関連に注目している。ラッセルは教育の目的を「ある種の精神上の習慣や生や世界に対するある特定の見方の形成」だとし、文学教育と同様に科学もそこに貢献するという。“I believe that its [science’s] capacity of producing those habits of mind which constitute the highest mental excellence would be at least as great as that of literature” (“Science I” 203)。

このラッセルのエッセイにおける科学と精神に対する見方には、自然の状態からの発達という意味において、生物学的進化の概念の影響がみられる。彼は

教育を「自然を捻じ曲げたり根絶する」ことではなく、「本能の荒々しさを破壊し、そして知識を通じて、豊富で多様な個人の外界との触れ合いを増す」ことだとする（“Science I” 204）。つまり教育には、自然から派生したものとしての人間の精神性をより高次の段階へと発達させる機能があるというのだが、翌週に掲載されたエッセイの後半は、科学がそこで果たす役割を取り上げている。「人間は完全に人間性を超越することはできない」とした上で、「視野や見識の範囲や理解力などを増加させる」科学の効用を生物学的な進化と関連付けている——“Science thus represents [...] a higher stage of evolution than any pre-scientific thought or imagination”（“Science II” 236）。またウェブ夫妻が創刊当初から書いていた連載の第3回は、社会主義と科学との関係を論じながら、「科学の社会組織への適用」である社会主義こそが社会を改善しようという。なぜなら、科学も社会制度も「人間知能の産物」であり、ゆえに社会主義は、現在の社会秩序を「自然的」なものとする保守反動的な思想とは違って、社会改革において有効性を発揮するのである（“What III” 76）。ここでもまた、科学と精神の発達及び生物学的進化との関連が含意されているだろう。これらの記事からは、科学を人間の精神を自然の状態から進化させる手段もしくはその産物だとみなす、機械論的な見方とは異なった思想を読み取ることができるのである。

#### 4. ロレンスにおける精神の進化と個体への分化

人間精神の発達を生物学的な進化としてとらえる視点は、ロレンスのテキストにもまた見出される。1915年に書き直された *Twilight in Italy* では、従来から指摘されてきたように、イタリア人の表象が自然的なものに関連付けられている。<sup>9)</sup> 劇場にいる兵士達は「奇妙な肉体的なつながり」をもつ「半分野性の雄牛」であり、「原始的な」という言葉で形容されている（150-51）。そしてこの自然らしさという特徴は、彼らの精神の成長を阻害しているかのように描かれている。“But there is a pressure on these Italian soldiers, as if they were men caryatides, with a great weight on their heads, making their brain hard, asleep, stunned. They all look as if their real brain were stunned”（151）。この引用には兵士達に対する否定的な響きを読み取ること

ができるが、それはレモン園において語り手がイングランドとイタリアとを比較する場面において、より明確になる。“I thought of England [...]. It seemed horrible. And yet, it was better than the padrone, this old, monkey-like cunning of fatality. It is better to go forward into error than to stay fixed inextricably in the past” (132)。ここで語り手は工業化されたイングランドを嘆きながらも、「年老いて、サルのような」イタリアの紳士が「宿命 (fatality)」という過去を背負っている姿よりもそれはましだという。語り手は進歩の果てにある破壊だけでなく、過去から進化できずにいることもまた拒否しているのである。

1914年に書かれた“Study of Thomas Hardy”では、精神性の発達が人の進化において必然的なものとされている。ここでは労働に関する部分に注目したい。そこでは労働が人を「単なる生物」(31)にしてしまうさまが描かれているが、それは人が「食料と住まいの十分な供給を生み出す」(33)という、生命維持における最低限の必要性のために働かざるをえないということによる。その場合の労働は、過去の動きを繰り返すといういわば原初的な活動へと陥ることを意味する——“he [a man] becomes one with the old, habitual movement: he is the perfect machine, the perfect instrument: he works” (35)。しかしテキストは、労働の最終的な目的は自己保存ではなく「全ての生を人間意識へと目覚めさせること」もしくは「人間意識の拡張」だとし、これにより「生の進歩」、つまり人間の自然状態からの進化がなされるという。“[I]t is necessary that his [a man's] mind, his consciousness, should extend behind him. The mind itself is one of life's later developed habits. *To know* is a force, like any other force. [...] And this *knowing* is a now inevitable habit of life's developed late, it is a force active in the immediate rear of life” (41-42)。「知ること」という精神活動が生命の発達を促す力であり、それが同一行為の反復という原初的な状態から人間を進化させてきたのである。これらのロレンスのテキストにおける精神の発達と生物学的進化との関係は、NSにおける科学に関するテキストにおいてみられた傾向と重なり合うものであり、ここに両者の近似性を見出すことができるだろう。

さらに“Study of Thomas Hardy”においては、この精神の進化は個体へ

の分化という概念も伴っている。<sup>7)</sup> “Man’s consciousness, that is, his mind, his knowing, is his grosser manifestation of individuality” (42)。そしてこの個体への分化もまた、生物学的な進化を意味する。“So on and on till we get to naked jelly, and from naked jelly to enclosed and separated jelly, from homogeneous tissue to organic tissue, on and on, from invertebrates to mammals, from mammals to man, from man to tribesman, from tribesman to me: and on and on, till in the future, wonderful, distinct individuals” (42-43)。ここでは原形質の塊りから他の段階を経て、徐々に個人として人間へと分化してきた進化の過程が描かれている。さらにこの進化した個人は、同じ人間の種においても区別された存在だとされる。「私自身である」ものをもつ個人は、大衆から「選り出され」「自分自身が残されている」存在であり (43)、テキストはこの個人を「貴族」——“a man who, being beyond the average, chooses to rule his own life to his own completion” ——と呼び (49)、その者は「群衆から、共同体から離れ、自身の魂において孤立し、生きる」べきだという (39)。こうしてロレンスのテキストは、精神の生物学的進化の主題を、大衆と個人という概念にまで発展させているのである。

## 5. 大衆への不安

精神的発達と個体への分化を果たした「貴族」が生物学的に進化したものだとすれば、それに対立する大衆は原初的もしくは退化した状態にあると考えられないだろうか。“Study of Thomas Hardy”においては、具体的に大衆の状態について言及した部分のみあたらないが、例えば次のような箇所を参照してみたい。自分自身であること、すなわち個体への分化を軽視することに対し、テキストは以下のように述べる。“[I]n our filthy irreverence, it [our life] remains a disgusting slough, where each one of us goes so thoroughly disguised in dirt that we are all alike and indistinguishable” (122)。ここで「泥の中で」「皆そっくりで区別がつかない」状態にあるという姿は、先に触れた進化の初期段階にある原形質を思わせる。また1915年版の“The Crown”では、「自意識過剰で墮落した大衆」についての言及がみられる。<sup>8)</sup> そこでは「あまりにも強力で、あまりにも多く」存在している現代人は「内部が腐敗により



打ち続けられることに固執して」おり、ゆえに「還元」つまり退化への過程にあるとされる——“we lapse utterly back, through reduction, back to the Beginning. It is the triumph of death, of decomposition” (276-77)。J・ケアリー (John Carey) もロレンスが当時の知的中産階級による大衆嫌悪を共有していたこと、そしてその感情が大衆に対する生物学的退化及び優生学からの視点と容易に結び付くことを示唆しており (10-13)、ロレンスのテキストに大衆を自然的な状態と同一視する視点を読み取ることは不自然ではないだろう。<sup>9)</sup>

ケアリーの主張が示すように、当時の大衆の退化への関心は政治的な性格をはらむものであったが、NSにおいても労働者階級の生物学的退化を懸念する記事は多くみられる。先に触れたように、フェビアン協会の会員の多くは中産階級出身であり、自らを大衆としての労働者階級からは区別する傾向があったことも影響しているのだろう。例えば1914年3月の“Lens”による記事は、「伝染病で我々を汚染する」スラムの住人が社会全体に対する脅威となっている、と述べている——“the slums which injure certain of those persons lower the survival-value of the whole community by the process of infection” (“Façades” 683-84)。またウェップ夫妻による1913年8月の記事は『「より高次の」人種における出生率の急速な低下』が「大都市の能力もない不定期労働者」のような「儉約精神がなく、知的でなく、先見性のない人種もしくは階級」の増加へと至り、結果として「文明化された生活」が脅かされるという (“What XXI” 654)。ここでは生物学的退化にくわえて、大衆の精神的な未成熟さへの懸念もまた示されている。

さらに他の記事では、原始的な状態にとどまっている大衆に、無秩序さという特徴が付与されている。例えば1913年9月の記事においてウェップ夫妻は、100年前の賃金労働者の「極度にみじめであった」状態について触れている。彼らの生活は「人間的というよりもむしろ獣のよう」であり、集団で「暴動」を起こしていたという。“The mass of the wage-earners of that day were incapable even of revolt in any sense, though of spasmodic ‘hunger riots’ and incessant mob disorder – all of which intensified the sufferings and aggravated the demoralization – there was more than we should nowadays think

endurable” (“What XXII” 686)。また先に取り上げたラッセルによるエッセイにおいても、“nature is not, in the civilized man, the spasmodic, fragmentary, and yet violently set of impulses that it is in the savage” という箇所にもみられるように、突発的な暴力的衝動と野蛮性とが関連付けられている (“Science I” 204)。

NSにおいては、このような無秩序を引き起こす自然的衝動は、社会主義による改革に対する障害とされている。ウェップ夫妻の連載第1回は、社会主義が「反抗の感情だけ」をもつ者達をも引きつけてしまうことを指摘している。彼らは「いらだちの社会主義者」と呼ばれ、その知性の欠如に対する懸念が示される——“self-control, persistent purpose, good comradeship, patient industry, and no small degree of intelligence. These qualities are lacking in many who are magnetized into Socialism by the emotion of revolt” (“What I” 14)。このようにNSには、ロレンスのエッセイにみられたのと同様に、精神的に未発達な大衆を原初的なもしくは退化したものとみなす視点が存在している。さらに社会秩序を破壊する脅威としての、その者達に対する政治的な不安も読み取ることができるだろう。

## 6. “The Fly in the Ointment” と “A Sick Collier”

これまで生物学的な進化とそれに伴う大衆に対する見方について、ロレンスとNSの近似性を探ってきた。それでは両者の直接の接点であるNSに掲載されたロレンスの短編にも、同様の傾向を見出すことができないだろうか。

“The Fly in the Ointment” は、語り手の家に盗みに入った若者との遭遇をリアリズム的に描いたテキストである。まずそこには、労働者階級の若者の心身における不健全さが読み取れる。「薄汚い通り」に住む彼は「汚い服と不潔な肌」をもち、「くる病」にかかっていたようだと言われる (596-97)<sup>10)</sup>。また大した考えもないまま盗みに入ることに加えて、彼は “the momentary madness of such a slum-rat,” “a flash of rat-fury” という突発的衝動をみせる人物である (596)。さらにここで「ネズミ」に例えられているように、若者には動物的な属性が付与されている。例えば語り手に発見された時に彼は、以下のような様子で声をあげる—— “whining, snarling, with an incredibly

mongrel sound” (596)。語り手は若者について “he evidently came of a low breed” (596) というが、ここでの “breed” という語は、若者の出自の低さと共に彼の動物性をも含意しているだろう。<sup>11)</sup> 動物に例えて描かれていることは、より自然的な状態にあるという下層階級像を示すものであり、その不健全さとあわせて、この若者の表象は生物学的退化を想起させるものとなっている。そして彼が職につけずに犯罪をおかそうとする姿を描き、語り手に彼のことを「理解することができなかつた」と述べさせることで (597)、テキストは若者の属する階級を差異化し、社会に不安を与えるものとして提示しているといえる。

また “A Sick Collier” では、大衆の表象から暴力性と無秩序さという要素を読み取ることができる。テキストは、坑夫が炭鉱で負った怪我をきっかけに、彼とその妻との関係に潜在していた齟齬が露呈されるさまを描いている。そこで坑夫は、「美しい清潔さの化身」である妻と対照的に、「生で張り詰めて引き締まった肉体」をもっており (722)、その身体やしぐさは動物に例えられている。“He was so muscular; he seemed so intent on what he was doing, so intensely himself, like a vigorous animal” (723)。

この自然さという属性を帯びた坑夫の表象は、暴力性が付与されることで、大衆の無秩序さを示すものとなる。その伏線となっているのが、彼が負った怪我による消えない痛みである。怪我が完治した後も坑夫は痛みを訴え動くことができず、その原因は医者にもわからない (723)。S・L・ギルマン (Sander L. Gilman) は、病気の社会的構築性を論じる中で、病気とは無秩序を意味するがゆえに、社会はそれをコントロールできるよう健康と病との間に境界線を構築し、病気をカテゴリー化するという (17-18)。さらにその病というカテゴリーが、ジェンダーや階級といった他の差異のカテゴリーとも結びつくことも示唆している。「年をとったり貧しかったりする患者は、経験をつんだ医者からさえも『悪い』患者で、おそらく『問題を起こすであろう』患者と考えられて、健康も回復できないとみなされる。実際『下層階級』の患者が、他の階級の患者よりも病気が重いと診断され、予後も順調でないといみなされることはよくあること」なのである (18)。このギルマンの指摘に従えば、坑夫の直らない痛みは、秩序を乱すという労働者階級像を暗示するものであり、テキスト内

に存在するこの階級に対する不安感を示すシニフィアンだと解釈できる。

そしてこの痛みは、大衆の暴動を想起させる形で、精神的な不安定さと暴力とを引き起こす。消えない痛みは「彼の精神を弱め」、それゆえに「彼はほとんど自制心を認識していない」状態となる(723)。ある日、ストライキ中の仲間達がサッカー観戦へ行こうと呼びかける声を聞き、坑夫は自分もそこに加わろうとするが、それを妻に止められ、ついに突発的な怒りを爆発させる。“He seized hold of her. His little head was bristling with madness, and he was strong as a lion” (724)。ここで坑夫がみせる、仲間に加わろうとする衝動は、集団として存在する大衆の習性を示しているかのようである。そして「ライオン」という言葉及び暴力が示す彼の動物的な属性は、「狂気」となった彼の精神状態と接続され、坑夫が原始的な状態にある印象を与える。それゆえにこの坑夫の表象は、ストライキという反秩序的な行為と、自然的な衝動による暴力とのつながりにより、大衆の暴動を想起させるように機能しているのである。

このように“A Sick Collier”にも“The Fly in the Ointment”と同様に、社会秩序に対する脅威としての労働者階級像を読み取ることができる。それらはNSにおいてみられる、自然的な状態へと退化したかのような大衆という概念及びその者達への反感と共鳴するものであり、NSにおいて存在する言説空間とロレンスとの接点を示しているといえよう。

## 6. 結論

ロレンスとNSについては、作品掲載以外に直接のつながりを見出すことはできない。しかしNSにおける科学に関するテキストを検証すると、そこにはロレンスのテキストにも見出せる精神の生物学的進化の概念が存在していることがわかる。またその概念が大衆に対する不安感という政治的思想を生み出すことも、両者のテキストから読み取ることができる。よってNSへのロレンス作品の掲載は、両者の思想の類似性を示している、ということも可能である。しかしロレンスやフェビアン協会といった主体を想定し、そこへこうした思想性を帰すべきではないだろう。むしろロレンスやNSのテキストは、当時の大衆の生物学的退化に関する言説空間を構築する多様なテキスト群の一部であり、NSというメディアにおけるその言説の現前が、本論で検証したNSの記事で

ありロレンスの短編であるとみなすほうがより生産的である。そうすることで始めて、あるひとつの言説空間の存在を前提として、ロレンスとNSのテキスト、さらには他の様々なテキストとの関係を考察することが可能となる。<sup>12)</sup>このように、ロレンス研究においてNSをはじめとした雑誌メディアに注目することは、より幅広い研究への示唆を与えてくれるのである。

### Notes

\* 本論は日本ロレンス協会第38回大会 [2007年6月3日於神戸女学院大学] におけるワークショップ「ロレンスと雑誌メディア」での発表原稿に加筆・修正を加えたものである。

- 1) 2篇の短編 (“The Fly in the Ointment” [8月16日], “A Sick Collier” [9月13日]) と、1篇の詩 (“Service of All Dead” [11月15日]) である。
- 2) 例えばM・キンキド=ウィークス (Mark Kinkead-Weekes) はこの点について、当時イギリスに一時帰国していたロレンスが、再度イタリアへ渡航するための費用を得るためのものであった、と述べるにとどまっている (89)。
- 3) フェビアン協会の歴史については多くの文献が存在するが、ここでは特にA・M・マクブライア (A. M. McBriar), 名古忠行氏, そしてN&J・マッケンジーらの研究を参照した。
- 4) サリーヴィについては、富山太佳夫氏が当時の優生学の文脈において、その思想を論じている。
- 5) J・ウォレス (Jeff Wallace) もまた、当時の唯物論哲学の流れにロレンスを位置付けることで、ロレンス批評における「ヒューマニズム対科学」というパラダイムの脱構築を実践している。
- 6) 石原浩澄氏はテキストにおける「プリミティヴなもの対西洋文明」という二元論的認識を相対化し、そこに帝国主義的視線の存在を見出している (4-8)。
- 7) ロレンスにおける進化と個人化という主題に関して、R・エバットソン (Roger Ebbatson) はH・スペンサー (Herbert Spencer) の影響を指摘している (40)。またウェッブ夫妻などのフェビアン主義者も、スペンサー

の思想から影響を受けている（名古 28-30；McBriar 61-62）。

- 8) 以下“The Crown”からの引用は、ケンブリッジ版に収められた1925年のテキストによるものであり、1915年版からの変更箇所については、Appendix を元にして筆者が復元した。
- 9) 加藤洋介氏はその著書において、ロレンスのテキストを退化言説の文脈の中に位置付けながら、詳細に論じている。
- 10) ウェッブ夫妻もまた、その著書で人種退化及び優生学について論じる際に、くる病が心身の劣化を引き起こすことに注目している（*Prevention* 50-51）。
- 11) タイプされる前の原稿ではこの語は“class”であり、変更により動物性が強められたといえる（*LAH* 230）。またJ・ワーゼン（John Worthen）もこの作品の元となった“A Blot”について、若者に動物性が付与されていることに触れている（236）。
- 12) S・レイサム（Sean Latham）は、デジタル化された *The New Age* などの雑誌テキストを検証することが「新たな種類の言説的そして歴史的ネットワークを開示すること」を可能にすると指摘している（413）。

#### Works Cited

- Carey, John. *The Intellectuals and the Masses: Pride and Prejudice among the Literary Intelligentsia, 1880-1939*. London: Faber and Faber, 1992.
- Ebbatson, Roger. *Lawrence and the Nature Tradition: A Theme in English Fiction 1859-1914*. Brighton: Harvester, 1980.
- Hyams, Edward. *The New Statesman: The History of the First Fifty Years*. London : Longmans, 1963.
- Kinhead-Weekes, Mark. *D. H. Lawrence: Triumph to Exile, 1912-1922*. Cambridge: Cambridge UP, 1996.
- Latham, Sean. “New Age Scholarship: the Work of Criticism in the Age of Digital Reproduction.” *New Literary History* 35 (2004): 411-26.
- Lawrence, D. H. “The Crown.” *Reflections on the Death of a Porcupine and Other Essays*. Ed. Michael Herbert. Cambridge: Cambridge UP, 1988.

251-306.

- . “The Fly in the Ointment.” *New Statesman* 16 Aug. (1913): 595-97.
- . *The Letters of D. H. Lawrence*. Vol. 1. Ed. James T. Boulton. Cambridge: Cambridge UP, 1979.
- . *Love among the Haystacks and Other Stories*. Ed. John Worthen. Cambridge: Cambridge UP, 1987.
- . “A Sick Collier.” *New Statesman* 13 Sep. (1913): 722-24.
- . “Study of Thomas Hardy.” *Study of Thomas Hardy and Other Essays*. Ed. Bruce Steele. Cambridge: Cambridge UP, 1985. 7-128.
- . *Twilight in Italy and Other Essays*. Ed. Paul Eggert. Cambridge: Cambridge UP, 1994.
- Lens. “The Façades of Cities.” *New Statesman* 7 Mar. (1914): 683-84.
- . “The Nature of Life.” *New Statesman* 7 June (1913): 266-67.
- McBriar, A. M. *Fabian Socialism and English Politics 1884-1918*. Cambridge: Cambridge UP, 1962.
- “The New Statesman.” *New Statesman* 12 Apr. (1913): 5.
- Russell, Bertrand. “Science as an Element in Culture I.” *New Statesman* 24 May (1913): 202-04.
- . “Science as an Element in Culture II.” *New Statesman* 31 May (1913): 234-36.
- Smith, Adrian. *The New Statesman: Portrait of a Political Weekly*. London: Frank Cass, 1996.
- Wallace, Jeff. *D. H. Lawrence, Science and the Posthuman*. Basingstoke: Palgrave, 2005.
- Webb, Sidney, and Beatrice Webb. *The Prevention of Destitution*. 1911. London: Longmans, 1916.
- . “What is Socialism? I.” *New Statesman* 12 Apr. (1913): 13-15.
- . “What is Socialism? III.” *New Statesman* 26 Apr. (1913): 76-77.
- . “What is Socialism? XXI.” *New Statesman* 30 Aug. (1913): 653-54.
- . “What is Socialism? XXII.” *New Statesman* 6 Sep. (1913): 685-87.

Worthen, John. *D.H. Lawrence: The Early Years, 1885-1912*. Cambridge: Cambridge UP, 1992.

石原浩澄「ロレンスのトラベル・ライティング研究序説—イタリアの表象—」  
『D. H. ロレンス研究』第13号 (2003), pp. 3-16.

加藤洋介『D・H・ロレンスと退化論—世紀末からモダニズムへ』(北星堂, 2007)

ギルマン, サンダー・L『病氣と表象—狂気からエイズに至る病のイメージ』  
本橋哲也訳 (ありな書房, 1996)

富山太佳夫「ある優生学の運動家についてのメモ—ウィリアム・サリービィ」  
『ダーウィンの世紀末』(青土社, 1995), pp. 223-36.

名古忠行『ウェップ夫妻の生涯と思想—イギリス社会民主主義の源流』(法律文化社, 2005)

マッケンジー, N & J『フェビアン協会物語』土屋宏之他訳 (ありえす書房, 1984)



Ideology in Science and Evolution:  
D. H. Lawrence and *The New Statesman*

Gakuto HAYAMA

In 1913, some works of D. H. Lawrence appeared in *The New Statesman* (*NS*), a weekly review founded by members of the Fabian Society. Although critics have yet to give much attention to the fact, an examination of articles in *NS* reveals several characteristics in common with texts by Lawrence. *NS* articles on science show that scientific thought is concerned with the development of the human mind and intelligence. They also regard mental development as a sort of biological evolution. One can find this same idea of mental evolution in Lawrence's essays, which indicate that intellectual development is inevitable for human beings and stimulates their individuality. The texts furthermore contend that a fully evolved individual should be separate and independent from the masses because the masses are on their way to biological degeneration. Many articles in *NS* also express a certain amount of anxiety in regard to the degenerate working class as a cause of social disorder. The same fear can be found in Lawrence's short stories in *NS*, and it is possible to view them as a part of the discourse on biological degeneration that permeates articles in *NS*.

# D. H. ロレンスが乗ったサウスウェストの馬

—ロレンスと リトル・マガジン 小雑誌 *Laughing Horse*—

川田 伸道

アメリカがローリング・トゥエンティーズを謳歌していた時代、*Laughing Horse* という1つの小さな雑誌が発行された。この雑誌は、カリフォルニア大学バークレー校の学生ウィラード・ジョンソン (Willard Johnson) と彼の級友が編集したものである。D. H. ロレンスはこの小さな雑誌にエッセイ、詩など10編ほどを寄稿している。<sup>1)</sup> この雑誌が辛うじて現在その名を留めているのは、ロレンスが寄稿していることが大きいのかもしれない。この小論では、重要と思われる幾つかの号に焦点をあて、創刊号から最終号に至るまでの流れを概観し、作品をこの雑誌に載せることによって、ロレンスが雑誌にどのような影響を与えたのか、雑誌はなぜロレンスを必要としたのかについて明らかにしたい。

## I

*Laughing Horse* は1922年から1939年までの18年間 (1号~21号) に渡り発行された雑誌である。ジョンソン、ロイ・チャンスラー (Roy Chanslor), ヴァン・ランセラー・ジュニア (Van Rensselaer Jr.) の3名で共同編集され創刊された。当時大学内で配布されていた学生新聞や文学雑誌に面白さを感じていなかったため、自分たちで新たな雑誌を作ろうと意気投合した、とジョンソンは *New Mexico Quarterly* で述べている (161-162)。彼らの雑誌がねらうところは、創刊号の表紙に掲げられている標語、“Wherein the First Laughs are Awarded the University of California” (vol. 1) や、巻頭の “apologia” で “This magazine is designed as a healthful reaction to the whole timid, vacillating conservative spirit which now prevails over this land” (vol. 1, n.

p.) とあることから明らかである。この姿勢はブラックユーモアや、冗談半分の記事として誌面に現れる。例えば、2号にはモントゴメリー・クレイグ (Montgomery Craig) の “Threnody on the Acquisition of Facts” というエッセイがある。無駄な知識を詰め込まれ、試験を真面目に受けても不正をしてもその結果を両親に自慢する学生たちと、子どもたちの優秀な成績に終始満足する親のどちらも、教育制度の犠牲者であることを嘆くという内容である。当時の大学での教育や、学校に飼いならされた学生たちを喚起するようなクレイグのエッセイに呼応する形で、すぐ後に、“Suggestions to those Taking Examinations” という試験を受ける際の7カ条を掲載している。以下はその第1条である。

1. Never take Examinations seriously: if you flunk you can brag about it, laugh about it, and have the consolation that you had a good time during the term while the others boned. (On the other hand, it is not good form to brag about an A or about having made Phi Beta, so what's the use of working for them?) (vol.2, n. p.)

クレイグから7カ条へと至る一連の記事は、試験という制度に対して斜に構えた学生の戯言のような印象を与える。この7カ条は編集者の1人によって書かれているのだが、創刊当初は執筆者の名前が明示されることはなく、匿名で掲載されているか、イニシャルによって示されていた。実際は3名である編集者らは、Jane Cavendish, Noel Jason, Bill Murphy, L13という4つの筆名を使っていた。これら4つの筆名が実際には誰を指示するのか不明である。さらに雑誌には目次も頁数も印刷されていなかった。組織立った批判をするための雑誌というよりは、上に引用したクレイグのエッセイや7カ条に見られるような、大学についての疑問や不満を持った学生たちのシニカルでパラドクシカルな随想録と考えることができる。こうした演出が、*Laughing Horse* を謎めいた雑誌にしていた。大学に通いながら地方新聞社で記者として稼いだ50ドルを創刊の資本として、創刊号の500部を出版し、完売したと *New Mexico Quarterly* でジョンソンは述べている (161)。創刊号の成功について、2号では

“Victory” という巻頭エッセイで、“Well, we have done it. We have published a magazine, financed it ourselves and sold enough copies to pay the printer” (vol.2, n. p.) と誇らしげに語る。

大学や大学教育を茶化した冗談半分の文章を載せている一方、*Laughing Horse* は、大学当局を真正面から批判する文章も掲載していた。例えば、4号には小説家・批評家のアプトン・シンクレア (Upton Sinclair) による評論、*The Goose-step: A Study of American Education* (1923) からの抜粋がある。これは当時の大学教育がその資本主義的偏向によって、資本家養成機関のようになっていることを指摘・批判しているものである。シンクレアは *The Jungle* (1906) で資本の労働者抑圧と搾取を生々しく描いた作家である。4号ではカリフォルニア大学を扱った “The University of Black Hand,” “The Fortress of Medievalism” などが取り上げられた。

また同号には、映画脚本家・劇作家ベン・ヘクト (Ben Hecht) の小説 *Fantasius Mallare: A Mysterious Oath* (1922) についてのロレンスの書評が掲載されている。ロレンスがタオスに到着した日に泊まったのが、詩人ウィッター・ビナー (Witter Bynner) とジョンソンの家だった。これがきっかけとなり、ロレンスはこの4号から雑誌と関わるようになる。書評の中でロレンスは、「性の概念化」、あるいは「暗い神々」といった思想を用いて、狂気の芸術家が自殺を選ばず、自分を取り巻くものを破壊していくという内容の退廃的な小説を評する。まずウォレス・スミス (Wallace Smith) による挿絵をビアズレー (Aubrey V. Beardsley) の絵と比較し、スミスにはビアズレーにあるような機智や深みがなく、見る者を驚かせることだけを狙ったものだと酷評している (215)。<sup>2)</sup> 挿絵と同様、小説にも、“testicle,” “vagina” (215) といった言葉が煽情的に使われているが、ロレンスは何も響かないとしている。

It isn't the *name* of things that bother me: nor even ideas about them. I don't keep my passion, or reactions, or even sensations, *in my head*... And really, Fantasius, with his head full of copulation and committing *mental* fornication and sodomy every minute, is just as much a bore as any other tedious modern individual with a dominant idea. (215)

現代人の性の概念化をロレンスは“tragedy”とし、この“tragedy” (216) から脱するため、“dark gods” (216) の力を読者に説いている。

Why don't you become silent unto yourselves, and wait and be patient in silence... And then turn again to the dark gods, which are the dark promptings and passion-motions inside you, and have reverence again, and be grateful for life. (216-17)

既に *Psychoanalysis and the Unconscious* (1921) と *Fantasia of the Unconscious* (1922) を読んでいたジョンソンは、ヘクトの *Fantazius Mallare* を読んですぐに、この小説をロレンスに評してもらいたいと思っていた、とビナーは *Journey with Genius* で回想している (11)。このジョンソンの思いは実現したが、書評の中でロレンスが用いた“four-letter word”の多さと赤裸々な表現には当惑したようである。この件に関して、後日、 chansler がビナーに話したことを、ビナーは *Journey with Genius* で次のように記している。

... We [Chansleor and other editors] had no intention of publishing it, since we knew we'd be tossed in the can.... and D. H. sent us a frantic wire not to publish the review, ending with 'Heavens what a cause to be martyred for!' So, being annoyed by this, we decided to publish it. We craftily cut out every four letter word, leaving blanks, and then cut out a few innocent words, leaving blanks, and the whole thing, apparently, became more obscene than ever. (11)

ジョンソンら編集者は、書評のはじめに“Note”として“*We were advised... to leave out words in this letter which might be considered objectionable*” (vol. 4, n. p.) と注意書きをし、猥褻と思われる語を伏せ字にして掲載にしたことを読者に説明している。<sup>3)</sup> ビナーは前掲書で、次のように回想している。“It is possible that the letter about *Fantazius Mallare* was written rapidly

to let off steam, to amuse Johnson and me and with no thought that the editors would dare to publish it.” (14) さらにロレンスはジョンソン宛の手紙 (1922年10月30日付) で “As for the ‘Jeunesse’ letter, much best burn it now” (331) と語っている。<sup>4)</sup>

この2つの記事が含まれた4号を見たカリフォルニア大学は *Laughing Horse* の発売禁止処分を求め、またロイ・チャンスラーを退学処分をしている。<sup>5)</sup> ヘクトとスミスはシカゴで逮捕され、小説も挿絵も発禁処分を受けていたので、書評にこの本を取り上げること自体が大学には好ましくなかったのだろう。退学処分になったのは、ロレンスの批評が原因であるとチャンスラーが考えていることについて、デイヴィッド・エリス (David Ellis) は、*Dying Game* で、問題視されたのはロレンスの書評ではなく、スミスが描いた *Fantazius Mallare* の挿絵が4号にも使われたことだと指摘している (75)。チャンスラーに対する訴えは友人の助けがあり取り下げられ、雑誌の出版は継続が許可された。この件で、*Laughing Horse* が注目を集めるようになったと、ジョンソンは *New Mexico Quarterly* で述べている (164)。

## II

その後、雑誌は号を重ねるが、8号からはジョンソン1人が編集を担うようになった。共同編集者たちが結婚や就職によって出版に携われなくなったからであった。<sup>6)</sup> そのため出版のペースが遅れるようになった。当初は月刊誌として計画されたが、7号を出すまでに10ヶ月を要している。12号からは1年に1回の発行となっている。また、ジョンソンの住むところが出版地となった。それまでパークレーだったが、8号はメキシコ、9号以降はサンタ・フェ、さらにはタオスへと出版地は転々とした。

こうした出版に関わる様々な環境の変化は、雑誌の内容にも影響を与えている。7号までの大学当局に立ち向かおうとする姿勢は大きく変わる。8号は、ジョンソンがメキシコ旅行中の1923年にメキシコで出版されている。ロレンス夫妻に誘われ、ビナーを合わせた4人の旅行は、ジョンソンにより広い視野を与え、8号はアメリカとメキシコとを比較する内容になっている。ロレンスは “Au Revoir, U. S. A.” を寄せ、“U. S. A., you do put a strain on the nerves.

Mexico puts a strain on the temper. Choose which you prefer. Mine's the latter" (1) としている。他に、メキシコにおけるアメリカ人の傍若無人な振る舞いを嘆き、メキシコ人の苦渋に満ちた生活を描いたカールトン・ビールズ (Carleton Beals) のエッセイ "Americans in Mexico" や、メキシコ革命以後の国とキリスト教教会との激しい対立を記したメキシコ大統領アルバロ・オブregon (Alvaro Obregon) の "Fanaticisms" などが掲載されている。アメリカとメキシコとの関係を双方向で捉えていることがこの号の特徴である。さらにジョンソンは9号 (1923年12月) を "Southwest Number" と題し出版している。巻頭には雑誌名にかかわる神話を紹介した文章が掲載されている。

There is a legend in California to the effect that the fabulous animal, the Laughing Horse, is a brute which expends all of its energy emitting ribald horse-laugh at any and everything which it sees or hears about. And there is a legend among the Navajo tribes of Arizona and New Mexico about a turquoise horse on which the Sun-God travels across the sky on clear, happy days, making the journey from the turquoise house in the east where his wife lives, to the newer turquoise house in the west, where his mistress, She-Who-Changeth, lives. He travels, the Indians say, "making the sun-noise," which is a joyous neigh. For this beast, also, is a Laughing Horse. (vol. 9, n. p.)

"The Sun-Noise" と題されたこの文章は、「笑い馬」の伝説を紹介するものだが、これを掲載することにより、ジョンソン自身は、7号までの *Laughing Horse* とこれからの *Laughing Horse* との区切りをつけ、雑誌が進むべき新しい方向性を読者に宣言しているかのようだ。"Monthly Magazine of Satire from the Pacific Coast" というサブタイトルも9号以降は使われなくなった。8号から11号にはサブタイトルはなく、12号からは "A southwest magazine" と記されていた。また他の2人から編集権を譲渡されたが、ジョンソンは9号から11号まで "Owned and copyrighted by James T. Van Rensselaer, Roy Chanslor and Willard Johnson" とクレジットを入れていた。

ジョンソンは後年 *New Mexico Quarterly* で、サウスウェストという新しい環境に合った姿に自分の雑誌が変わったことを次のように述べている。

Unearthing a Navajo legend about the sun-god riding a turquoise horse with 'a joyous neigh,' it seemed a natural transition to keep the title (which had proved wonderfully rememberable) but to change its nature to suit the new environment. (165)

9号以降、メアリー・オースティン (Mary Austin) による ネイティブ・アメリカンの物語や伝説、ハイメ・デ・アンギュロ (Jaime de Angulo) やメイベル・ドッジ・ルーハン (Mabel Dodge Luhan) のエッセイやまたタオスの芸術村に集っていた芸術家たちの木版画や素描画などがほぼ毎号掲載される文芸・芸術総合雑誌に変貌した。

馬が陽気にならずに9号を受け取った時、ロレンスはイギリスに一時帰国していた。返事として“Dear Old Horse”という手紙をロンドンから返している。この手紙が10号冒頭に掲載されている。イギリスでは馬は固く冷たい“a hobby Horse” (n. p.) になってしまっており、“[D]ear old Horse, you'd never be azure or turquoise here in London” (n. p.) としている。さらにタオスの馬をケンタウルスと重ね “[G]ood old Horse, be patted and be persuaded to grin and to be a Centaur getting your own back” (n. p.) と馬の生命力に希望を見出し *Laughing Horse* の新しい出発をロレンスは喜んでいる。と同時に “Oh, London is awful: so dark, so damp, so yellow-grey, so mouldering piecemeal.... Horse, Horse, be as hobby as you like but let me get on your back and ride away again to New Mexico” (n. p.) と生命力を失ってしまったイギリスを嫌悪し、ニューメキシコへの郷愁の思いを痛切に語っている。

しかし、じゃじゃ馬ではなくなった *Laughing Horse* は、創刊当時の毛艶を全く失ったわけではなかった。第17号は“A symposium of criticism, comment and opinion on the subject of censorship”と題され、号全体で当局の出版管理体制に対する反対表明をしている。合衆国の関税法改正により、アメリカ国外で発禁処分を受けた本は輸入できなくなる。このため、*Lady Chatterley's*



*Lover* の輸入が不可能となる。*Laughing Horse* はこの動きに敏感に反対した。ジョンソンは29名の著名人から、検閲に関するコメント、意見を集めている。メイベルやビナーの他、シャーウッド・アングスン (Sherwood Anderson) やカール・サンドバーグ (Carl Sandburg) などが検閲制度に対する反対を表明した。

*Laughing Horse* の特徴として指摘しておきたいのが、執筆者への原稿料は存在せず、執筆者は無償で原稿を提供していたと思われることである。これは、ロレンスがジョンソンに送っている手紙の中で、原稿料について一度も触れていないからである。1922年9月19日付のマーティン・セッカー (Martin Secker) 宛の手紙には “I got \$1000 from Hearst for ‘Captains Doll’ — for the *International*” (298) とあったり、アメリカを去った後の1926年10月12日付のカーティス・ブラウン (Curtis Brown) への手紙では、 “And would you mind telling me when the Oxford Press made their last payment for *Movement in European History?*” (555) と、ロレンスは金銭に関して細記しているが、ジョンソンに対しては、一切そのようなことを求めたり、示唆することはない。また原稿料を優先し、*Laughing Horse* への掲載を断ったケースもある。“The Escaped Cock” 第1部 (Forum が1928年2月に出版) を、ロレンスは *Laughing Horse* に載せるつもりでいた (1928年3月15日付のカーティス・ブラウンへの手紙)。ところが、同年6月3日付のジョンソン宛の手紙では、多額の原稿料を支払ってくれそうな出版人が表れたため、*Laughing Horse* での “The Escaped Cock” の掲載を中止するように求めている。<sup>7)</sup>

### III

*Laughing Horse* 13号 (1926年4月発行) は “Lawrence Number” として出版された。ビナーやメアリー・オースティンなど有名な寄稿者が数多くいた中で、ロレンスは *Laughing Horse* で特集された唯一の作家あり、雑誌とは特別な関係にあったと言える。ロレンスは詩を2編、エッセイを3編書き下ろしている<sup>1)</sup>。その他メイベルによる *The Plumed Serpent* の書評、フレデリック・W・レイトン (Frederic W. Leighton) による “The Bite of Mr. Lawrence,” アメリカの詩人アイデラ・パーネル (Idella Purnell) の “Black Magic,” ウォ

ルター・ウィギントン (Walter Wigginton) の “Animals and Ideas” が掲載されていた。

特にレイトンとパーネルのエッセイに注目したい。レイトンは、メキシコシティの教育監察官ロベルト・ハーバーマン (Robert Haberman) の秘書を務めた人物であるが、チャパラ湖でロレンスと会っている。レイトンはまず *The Plumed Serpent* のモデルとなった4人を分析する。ロレンスは辛辣で、頑固で、洞察力に富み、夫人はにこやかで、辛抱強く、熱意があり、ビナーは心温かく、分析力があり、ジョンソンは控えめだがユーモアに富んでいる。この4人の人間関係を猫と鼠との睨み合いに喩え、彼らの対照が生む緊張感が、作中の人間関係を生み出しているとする。次にレイトンはロレンスの印象を述べている。レイトンによれば、ロレンスはいわゆる指導原理小説に見られるような “the doctrine of cosmic superiority” (17) を象徴する人物であり、

Sprinkled among the cretin mass ...was a selected fraternity of ruling spirits. These spirits, though inhabiting bodies not different from those encasing the rest of mankind, were of a different genera. In virtue of their greater intellect and spirit power they were destined to rule the world. (17)

という考えを持っていると感じたとしている。さらにレイトンは “To me this doctrine explains at once the radicalism and the conservatism of D. H. Lawrence” (18) とし、大衆の経済的、社会的、道徳的、文学的興味によって押しつけられた束縛や妨害に対して攻撃をするロレンスは急進的であるが、自分の作品を理解できるエリートだけがそれを読めばよいという彼の主張には、保守的な優越主義が見られると述べている。

パーネルは、ロレンスの *Birds, Beasts, and Flowers* を採り上げている。物を破壊することなく、内面から変化さるという “black magic” になぞらえて、ロレンスは果実、花、動物に彼自身の新たな意味と解釈を加え、当たり前のように受け止められている事物の根本的な意味を見出す契機をわれわれに与えてくれる、とその詩集を高く評価しているが “No poet, no god may ever

hope to escape completely from his false outer self, the individual consciousness....” (21) とし、ロレンスにも誤りがあると指摘する。それはロレンスの保守性や優越性であると言う。

We must quarrel with you [Lawrence] when you assert your superiority, when you proclaim that a hibiscus is more than a man merely because in your conscious, conservative British mind you think that man mistaken. We know your retort — that it is our conscious, false, swaggering, American democratic mind that disagrees with you, ... (21)

社会主義者や、アメリカの民主主義を偽りだと決め付けるロレンスの一面を非難するが、“the true inside meaning of that never changes, no matter what it may assume as an outward form” (21) と、*Birds, Beasts, and Flowers* にあるような植物や動物に対するロレンスの洞察力を賛美し、その洞察力で人間を受け入れてくれたらと結んでいる。

レイトンもパーネルも、ロレンスに対し両義な評価をしている。彼らが否としているロレンスの側面は、ビナーが *Journey with Genius* で綴っているロレンス像に通じるところがある。サウスウエストやメキシコでロレンスがどのように受容されていたのか、その一端を知ることできる興味深い資料と言えるだろう。

#### IV

結びとして、この雑誌にとって、ロレンスはどのような存在であったのかを考えたい。ユーダル (Sharyn Udall) は、*Laughing Horse* の役割を “he [Johnson] persuaded many writers to contribute their perspectives...on the rich cultural links between Mexico and the United States” (180) と述べている。さらに “[o]n the pages of *Laughing Horse* he established a lively, long-term cultural dialogue between the two areas” (180) と位置づけている。しかしレイトンに “the Imperial Englishman” (18) と称されるロレンスをこの雑誌の中においてみると、決してメキシコとアメリカとの橋渡

しをしていたとは言えない。ロレンスがこの雑誌の中にあつて然るべき理由のひとつは、ヨーロッパとタオス（ひいてはサウスウェスト）とをつないでいたことである。フランスや日本、中国と世界中を旅していたビナーはタオスに拠点を定めていたし、メイベルやメアリー・オースティンなど *Laughing Horse* の常連寄稿者たちも、タオスやサンタ・フェに永らく暮らしていた。ロレンスのようにアメリカとヨーロッパをつないでいる寄稿者は少なく、ジョンソンと *Laughing Horse* にとっては、有名な作家が投稿している雑誌であるという実績を作る以上に、ロレンスとの関係を維持する理由の1つは、*Laughing Horse* がアメリカ辺境の地とヨーロッパとのつながりを保つことに貢献することを、ロレンスの寄稿が助けたということではないだろうか。

#### Notes

\* 本稿は日本ロレンス協会第38会大会（2007年6月3日）ワークショップ「Lawrence と雑誌メディア」において口頭発表したものに、修正、加筆したものである。

- 1) ロレンスが *Laughing Horse* に載せたのは以下の10作品である。4号 *Fantazius Mallare* の書評, 8号 “Au Revoir U.S.A.” (エッセイ), 10号 “Dear Old Horse” (書簡), 11号 “Just Back from the Snake-Dance—Tired Out” (エッセイ), 13号 “A Little Moonshine with Lemon” (エッセイ), “Mediterranean in January” (詩), “Europe Versus America” (エッセイ), “Beyond the Rockies” (詩), “Paris Letter” (エッセイ), 15号 “Suzan, the Cow (From ‘...Love Was Once a Little Boy’)” (エッセイ, 抜粋), 20号 *Altitude* (戯曲, 未完)。ロレンスはこの他にスケッチ, 挿絵や表紙用のイラストをジョンソンに送っている (この表紙用の絵は実際には使われることはなかった)。
- 2) ロレンスの書評はリーヴェ (N. H. Reeve) とワーゼン (John Worthen) 共編によるケンブリッジ版 *Introductions and Review* に (伏せ字のない) 全文が掲載されている。本論ではケンブリッジ版を用い、ページ数も同版のものを記している。
- 3) この書評は *Laughing Horse* では以下のように伏せ字にされていた。伏せ

字部分は順に “penis,” “testicle” という語が入る。

“Really, Fantasius Mallare might mutilate himself, like a devotee of one of the early Christian sects, and hang his (——) on his nose-end and a (——) under each ear, definitely testify that was that he’d got such appendages, it wouldn’t affect me ....” (vol.4, n. p.)

- 4) “the ‘Jeunesse’ letter” はロレンスの書評が書簡体で, “Chère Junesse” (若者たちへ) と始まっている。
- 5) *New Mexico Quarterly* (Summer, 1915), p. 164.
- 6) *Ibid.*, pp. 164-65.
- 7) 1928年6月3日付のジョンソン宛の手紙では “First and foremost, *don’t* print *The Escaped Cock* as my agents say Crosby Gaige will put it in his privately-printed list and give me \$1000. If he will, so much the better, and I can give you something else, if you like” (416) とある。

#### BIBLIOGRAPHY

- Bachrach, Arthur J. D. H. *Lawrence in New Mexico: “The Time Is Different There.”* Albuquerque: U of New Mexico P, 2006.
- Bynner, Witter. *Journey with Genius: Recollections and Reflections Concerning the D. H. Lawrences.* New York: Peter Nevill, 1953.
- Cline, Lynn. *Literary Pilgrims: The Santa Fe and Taos Writers Colonies 1917-1950.* Albuquerque: U of New Mexico P, 2007.
- Cushman, Keith, and Earl G. Ingersoll, eds. *D. H. Lawrence: New Worlds.* Madison: Fairleigh Dickinson UP, 2003.
- Ellis, David. *D. H. Lawrence: Dying Game 1922-1930.* Cambridge: Cambridge UP, 1998.
- Johnson, Spud. “The Laughing Horse,” *New Mexico Quarterly* (Summer 1915).
- Laughing Horse: 1-21 and Supplements 1-2: 1921-39.* New York: Kraus Reprint Corporation, 1967.
- Lawrence, D. H. *The Letters of D. H. Lawrence 4: 1921-24.* Cambridge:

Cambridge UP, 1987.

——. *The Letters of D. H. Lawrence 5: 1924-27*. Cambridge: Cambridge UP, 1989.

——. *The Letters of D. H. Lawrence 6: 1927-28*. Cambridge: Cambridge UP, 1991.

——. *The Letters of D. H. Lawrence 7: 1928-30*. Cambridge: Cambridge UP, 1993.

Poplawski, Paul. *D. H. Lawrence: A Reference Companion*. Westport, CT: Greenwood P, 1996.

Reeve, N. H., and John Worthen, eds. *Introductions and Reviews*. Cambridge UP, 2005.

Rudnick, Lois Palken. *Utopian Vistas: The Mabel Dodge Luhan House and the American Counterculture*. Albuquerque: U of New Mexico P, 1996.

Udall, Sharyn. *Spud Johnson and Laughing Horse*. Albuquerque: U of New Mexico P, 1994.

Weigle, Marta, and Kyle Fiore. *Santa Fe and Taos: The Writer's Era 1916-1941*. Ancient City Press, 1982.

井上義夫. 『地霊の旅: 評伝D・H・ロレンスⅢ』. 小沢書店, 1994.

The Southwest *Horse* That Lawrence  
Had Ridden: D. H. Lawrence and the  
Little Magazine, *Laughing Horse*

Nobumichi KAWADA

In 1922, Willard Johnson, a student at Berkley, started publishing *Laughing Horse* with other students. This magazine's primary purpose was, at first, to criticize the conservative educational system of universities at that time, which was negatively influenced by the capitalism of the 1920s, and to awaken the college students as its victims to revolt against such a mundane system. Moreover, D. H. Lawrence's literary contribution to this regional magazine made its existence noteworthy: Lawrence's ten essays and poems included in this magazine demonstrate the close companionship between Johnson and Lawrence, which clarifies the writer's concern over the course this magazine would take. This paper especially focuses on D. H. Lawrence's review on Ben Hecht's *Fatazius Mallare*, and his short essay, "Dear Old Horse" among them. It also examines Frederic W. Leighton's "The Bite of Mr. Lawrence" and Idella Purnell's "Black Magic," both of which ambivalently evaluate Lawrence's works, pointing out his paradoxical mixture of radicalism and conservatism generated by his "British mind." Consequently, this paper aims to examine the relations among Lawrence, the artistic aim of *Laughing Horse*, and the cultural background of the Midwest in the 1920s.

# Reading D. H. Lawrence's "Leadership" Novel *Kangaroo* from a Postcolonial Perspective

Eunyoung OH

Critics have categorized *Kangaroo* (1923), D. H. Lawrence's Australian novel, as a "leadership" novel by focusing on his male leadership theme.<sup>11</sup> But *Kangaroo* does not reach the full bloom of the leadership politics, as anticipated at the end of the previous "leadership" novel *Aaron's Rod*. Richard Lovat Somers, the protagonist of *Kangaroo*, is rather attracted from start to finish to the new landscape of Australia, while recoiling away from the political reality of the colony at the later part of the novel. My reading of *Kangaroo* questions the nature of the novel as a "leadership" novel by foregrounding Somers's "self-reflective" narrative voice in dealing with the leadership theme and his futile relationship with Benjamin Cooley, nicknamed Kangaroo, a political leader of Australia. Once the relationship of *Kangaroo* to the "leadership" category is questioned, we can see that Lawrence's awakening sense of "otherness" governs the narrative development of the novel.

This paper explores how differently we can read *Kangaroo* by applying colonial/postcolonial perspectives to it. My postcolonial reading of *Kangaroo* will show that Lawrence's sense of place, developed through his belief in the "local" and "indigenous" spirit of place, deeply affects his presentation of Australia, a set of former white settler colonies of the British Empire. To explore Lawrence's relationship to the issue of colonialism, I will examine how Lawrence, as an English newcomer, understands and records the cultural hierarchies of metropolis and colony, and how he



captures the different spirit of Australia, represented by the “uncanny” bush.

Many critics have not considered *Kangaroo* as one of the works in which Lawrence’s literary talent fully bloomed. It is not unusual that, as with other works of Lawrence written during the “leadership” period, the critical reception of *Kangaroo* varies, and most of it has largely downgraded and ignored this novel.<sup>2)</sup> Nevertheless, it is worthwhile to see what native Australian critics have thought of Lawrence’s presentation of Australia. A. D. Hope in his essay points to Lawrence’s ignorance of Australia and his inevitable limits as a tourist who stayed in Australia just for a few months. Adding that the social and political life presented in this novel is “almost entirely factitious” (Hope 167) and thus has nothing to do with the reality of Australia, Hope concludes that Lawrence’s portrait of Australia is based on a superficial impression of the country.

It is understandable that, as a native Australian, Hope is not pleased with Lawrence’s presentation of Australia. According to Hope, Lawrence’s concern, even when he describes a foreign land and unfamiliar people, is still fixed on himself and his personal problems; that is, the new spirit of Australia does not change him a bit. What is worse, Lawrence’s anxiety and fantasy of himself and his ideas are presented in the novel at the cost of his misrepresentation of the former settler colonies. But Hope overlooks the fact that the authentic representation of Australia as a place, which was actually impossible for Lawrence, was not what Lawrence tried to do in this novel. Of course, he notices and thus points out that this novel is a “characteristically” Lawrentian version of Australia, but he criticizes Lawrence as if he at least tried to create an “authentic” portrait of the nation but failed to do it. Far from Hope’s critical expectation, Lawrence was never concerned with any “authentic” presentation of a place, including Australia, as instanced in his travel books. We need to acknowledge that the presentation of Australia is Lawrence’s personal version, which

consists of his fantasies, desires, and impressions of the place. Lawrence attempts to transplant his ideas of leadership politics into a different continent, Australia, which he believes is totally different from Europe. The nature and the landscape of Australia are indeed different, but Lawrence gradually comes to see that the social and political life is not much different from Europe. This recognition makes his protagonist, Somers, recoil from the relationship with Kangaroo. Yet if these social and political details depicted in *Kangaroo* are all made up by Lawrence, what was Lawrence then trying to do in this unfamiliar land through his fictitious presentation of Australia?

Although Hope is critical of Lawrence's presentation of Australia, his understanding of *Kangaroo* might help us see by contrast what Lawrence tried to do in this novel. Hope argues that Lawrence does not sympathize with his male protagonist in this novel as much as he had in his other works, and through this unusual distance between the author and the protagonist Lawrence aims to objectify himself and his personal problems: "In fact Lawrence treats him [Somers] with a good deal of almost hostile satire. It is as though for once he tried to record himself and his problems quite objectively so that he could play it back and see what it looked like from outside" (Hope 170). Lawrence certainly attempts to experiment with his leadership politics and even expose his fantasy of being a political leader in this "new" land. But this is not the whole story of what Lawrence tries to do through this novel. If the early half of the novel deals with Lawrence's experiment with his political ideas, his sense of locality, which brings light on the new land as a liberating space free from all sorts of ideas, shapes and controls the emotional flow of the narrative from start to finish. Although it cannot be denied that the root of Lawrence's anxiety lies within himself and his personal problems, the novel shows simultaneously how the new spirit of Australia affects him. As the novel develops, Lawrence comes to encounter the reality of the colonial "otherness" coming from different

lives beyond himself. Through that process, he confirms his belief in “the different spirit of a different place” in this Australian novel.

Lawrence’s recognition of otherness, of course, does not necessarily shape all the details of the novel. Most of the images and preconceptions about Australia that Lawrence employs in *Kangaroo* are made of both stereotypically colonialist tropes and his anti-colonial impulses. In the first part of the novel, for example, Somers’s response to Australia is not much different from a typical colonialist who is stuck in the dominant paradigm of seeing this former set of colonies as a periphery of the British metropolis: “It was all London without being London. Without any of the lovely old glamour that invests London. This London of the Southern hemisphere was all, as it were, made in five minutes, a substitute for the real thing. Just a substitute as margarine is a substitute for butter” (25-6). For Somers, these British Australians are just “barbarians” (26) without any civilized class distinction: “[e]ven the heart of Sydney itself an imitation of London and New York, without any core or pith of meaning” (35). That is to say, Lawrence shows, through Somers’s typical colonialist mentality, an example of how newcomers from the Mother Country would think of, and feel about, their former settler and penal colonies. And yet Somers is different from a typical colonialist in that the former is never interested in the glorious destiny of the British colonial project and is entirely disillusioned by the old life of Europe: “That horrible, horrible staleness of Europe, and all their trite consciousness, and their dreariness... Australia has got some real, positive indifference to ‘questions’, but Europe is one big wriggling question and nothing else” (171). Somers’s repudiation of European values makes possible his anti-colonialist approach to the former set of British colonies, though it does not wipe out all trace of his sense of superiority as an Englishman.

The novel starts with the scene in which Somers and his wife, Harriet, arrive in Sydney. Somers as a newcomer from the Old Country describes

the people, culture, and landscape of Australia as those of one of the former British settler colonies. But the first scene of the novel interestingly opens through the eyes of "a bunch of [Australian] workmen," and one of them catches the odd appearances of Harriet and Somers:

Perhaps it was one of these faintly wafted squeals that made a blue-overalled fellow look around, lifting his thick eyebrows vacantly. His eyes immediately rested on two figures approaching from the direction of the conservatorium, across the grass lawn. One was a mature, handsome, fresh-faced woman, who might have been Russian. Her companion was a smallish man, pale-faced, with a dark beard. Both were well-dressed, and quiet, with that quiet self-possession which is almost unnatural nowadays. They looked different from other people. (11)

This strange-looking English couple is objectified through the eyes of a colonized other. Given that most of colonial discourse depends on the description of the colony by a single European narrator, the first scene of *Kangaroo* in which the encounter between a British couple and colonized others is reciprocal, not one-sidedly dominated by a European, challenges the dominant paradigm of colonial discourse. If we imagine this opening page as the first scene of a film, the eyes of colonial others uncommonly set the first frame in which an English couple enter, not vice versa. This first scene, unsettling the self-other hierarchy between Europeans and colonial others, suggests that Lawrence's presentation of a formerly colonized British dominion will not follow the conventional narrative of colonial discourse.

It looks quite natural that Lawrence, who revolts against the cultural values of Britain including the ideology of colonial expansion, reveals conflicting and contradictory responses to this British dominion; as a British citizen, he seems to take for granted the hierarchical relationship between

the British and the Australian as exemplified in Somers and Harriet's relation with the Australian couple, Jack and Victoria Callcott; on the other hand, he is well aware of his personal limits as a newcomer from the Old Country: "Perhaps after all he was just a Pommy, prescribing things with over-much emphasis, and wanting to feel God-Almighty in the face of unborn events" (164).<sup>33</sup> Somers's perception of the different spirit of Australia enables him to see how limited his knowledge of this new land is and thus how absurd it could be to describe it with his social and philosophical ideas. In other words, Somers at least knows that it is impossible for him to present (or even understand) this nation as it is. Somers's recognition of "his Pommy stupidity and his pommigrant superiority" (166) serves to differentiate Somers's approach to, and appropriation of, Australia from those of typical colonialists.

In spite of occasional interventions of stereotypical understanding of this British dominion, it is worthwhile to take notice of how Somers sensitively perceives the cultural "difference" between himself and colonial people. Introducing a local colloquial expression that "immigrants are known in their first months, before their blood 'thins down', by their round and ruddy cheeks" (165), Somers interestingly evokes a Lawrentian aphorism that every place has a different blood consciousness:

Yet he [Somers] said to himself: 'Do I want my blood to thin down like theirs? that peculiar emptiness that is in them, because of the thinning that's gone out of them? Do I want this curious transparent blood of the antipodes, with its momentaneous feelings, and its sort of *absentness*? But of course till my blood has thinned down I shan't see with their eyes. And how in the name of heaven is this world-brotherhood mankind going to see with one eye, eye to eye, when the very blood is of different thickness on different continents, and with the difference in blood, the inevitable psychic difference? Different

According to Lawrence, the different spirit of a place means nothing less than a different blood consciousness, "unconsciously" and "collectively" formed by a certain culture, the land, the climate and so forth.

His sensitive awareness of different blood consciousnesses enables him to admit that his leadership politics, basically fermented in the European soil, could be inadequate to this new land. This chapter titled "The Battle of Tongues," which displays tedious tirades between Somers and Kangaroo, ends with Somers's recognition of the unavoidable difference between himself and white settlers. Furthermore, Somers feels keenly, even more than any settler people, the need of a new life-source and a new language to describe the mystery of life that he believes this new country still has. Lawrence believes that the Australian as well as the British are blind to what is going on in their lives, and thus he tries to show through *Kangaroo* that the inherited cultural values of England no longer fit the old country as well as this nation of former settler colonies.

Lawrence's diagnosis of what is wrong with Australia, although its main contents are in fact the conflict between himself and the world, starts with his adventure of encountering Australian political leaders. Most critical attention to *Kangaroo*, perhaps because of the label of the second "leadership" novel, tends to be fixed on Lawrence's presentation of his leadership ideas. However, as opposed to our expectation of seeing Lawrence's solid belief in male leadership in *Kangaroo*, we find instead a lot of disillusionment and distrust of politics. From the beginning, the possibility of political solidarity between Kangaroo and Somers is not great enough, especially due to the latter's post-war disillusionment, as the "Nightmare" chapter convincingly portrays. Even before Somers meets Kangaroo, the novel shows a sign that the solidarity between these two men would be impossible: "And now, when true and good friends offered, he [Somers] found he simply

could not commit himself, even to simple friendship. The whole trend of this affection, this mingling, this intimacy, this truly beautiful love, he found his soul just set against it" (119). For all harangues about a new society by Kangaroo, Somers's inability to intermingle with other men has not much improved as the novel develops. This means Lawrence, from the first, could not really sympathize with political leaders such as Kangaroo and Willie Struthers, a leader of the socialist party. Somers is rather mostly concerned with the integrity of his own individuality throughout the novel. As most critics have agreed, it would be fair to say that *Kangaroo* focuses instead on one man's (Somers's) consciousness, and his personal problems: "Poor Richard Lovat wearied himself to death struggling with the problem of himself, and calling it Australia" (33).

Since *Kangaroo* and *Aaron's Rod* are the results of the same "leadership" period, it is not surprising to see that a substantial part of Somers's political idea overlaps with Lilly's argument for the transition from the love-urge to the power-urge. But the difference in Lilly's and Somers's ways of presenting the same idea of male leadership is also quite striking: if Lawrence allows Lilly to keep his dominant voice throughout *Aaron's Rod*, the author in *Kangaroo* uses a form of self-parody to investigate the validity of his political ideas. Rather than taking the role of a spokesperson like Lilly, Somers consistently objectifies and sometimes mocks his self-image as a political leader — more exactly his desire to be — through Harriet's voice. Harriet is a major figure who constantly calls into question Somers's preoccupation with men's business:

Ha, the afterwards will make its own way, it won't wait for you. It's a kind of nervous obstinacy and self-importance in you. You *don't* like people. You always turn away from them and hate them. Yet like a dog to his vomit you always turn back. And it will be the same old game here again as everywhere else. What are these people after all? Quite

nice, but just common and — and not in your line at all. But there you are. You stick your head into a bush like an ostrich, and think you're doing wonders. (77)

Harriet's dissenting voice, along with Somers's self-mocking gestures, is perhaps the reason that Hope says, despite his numerous complaints of Lawrence's presentation of his country, "Somers is in a sense the most detached of all the many self-portraits in Lawrence's fiction" (Hope 170). Lawrence allows other characters like Kangaroo, Struthers, or Harriet, in addition to Somers, to share parts of whole arguments that Lawrence wants to present in this novel. In consequence, the narrative voice of *Kangaroo* is, compared with Lilly's dominant voice in *Aaron's Rod*, constantly unstable, often self-mocking, and self-reflective in presenting its male leadership theme.

Unlike Lilly's dominant narrative voice of *Aaron's Rod*, the "self-mocking" and "self-reflective" narrative voice of *Kangaroo* reflects that Lawrence begins to question his attempt to transplant the leadership idea into this formerly colonized nation. Lawrence's effort to objectify the idea gives birth to a different presentation of it in *Kangaroo*. Many critics have been in fact skeptical about the "political" character of the novel. The "leadership" category applied to *Kangaroo* makes critics as well as readers almost automatically see the novel as a political novel. But since Lawrence's idea of male leadership cannot be limited to political matters in a conventional sense, many critical attempts to define the nature of the novel entail confusions. For instance, Michael Wilding points out that although it is "not correct to style *Kangaroo* as anti-political novel," this novel "resists enlistment into any ideology" (Wilding 20). Wilding describes the nature of politics presented in this novel as "a politics totally outside the social world": "His [Lawrence's] theme is the commitment of one man to political action. But his emphasis results in a peculiar sense of the isolation, the



irrelevance, of what remains as 'political'" (Wilding 28-9). Wilding's paradoxical definition of *Kangaroo* as a political novel and simultaneously a novel "leaving outside politics" gives an idea of how, and to what extent, Lawrence uncommonly uses the conventional codes of politics in this novel. "Politics for Somers," Wilding says, "is not a matter of particular practical aims, but of some general emotional, religious commitment" (Wilding 29).

Not only does *Kangaroo* have paradoxical and confusing features as a political novel, but also it does not have an organic form as *The Rainbow* and *Women in Love* do. Many earlier critics have pointed to the formal looseness of *Kangaroo* as a fatal defect of the novel. The judgment of Eliseo Vivas — "*Kangaroo* is hardly a novel. It is at best an effort, to solve a problem" (Vivas 16) — summarizes a tendency prevailing in modernist readings of *Kangaroo*. But some critics show that we can approach this lack of organic wholeness of *Kangaroo* at a totally different angle. For example, U. R. Anatha Murthy asserts, "we are not irritated by the looseness of the form of the novel; rather the lively casualness of tone made possible by the apparently loose form holds together the various changing moods of the novel which range from apocalyptic vision to wry humour" (Murthy 44). The important thing is that this "loose" and "fragmented" narrative of the novel is intimately related to thematic elements such as Somers's sense of disorientation after the war, his distrust of language, or his desire for "meaninglessness" (367) against meaning, which is, Somers believes, "the most meaningless of illusions" (366). Only this humanly uncontrollable, primitive land can offer Somers the nonhuman and anti-European values that he seeks, and these characteristically Lawrentian values affect the form as well as the contents of the novel.

A famous digression of the novel, the twelfth chapter titled "The Nightmare," not only exemplifies the nature of the "carefree" plot of the novel but also marks a visible sign that Somers's concern is at this juncture transmitted from politics to the Australian landscape. At a glance, this

chapter looks like just a digression without any connection with other parts of the book, but it is thematically carefully calculated as an essential part of the plot of the novel. This digressional chapter effectively makes Kangaroo's and Struthers's political ideas non-sense, and in doing so, it supports the thematic significance of the following chapters in which Somers returns to his isolated world, while giving up any political attempts. The "Nightmare" chapter is, then, a turning point, shifting from Somers's obsessive concern with men's business to his desire to be alone in this vacant space of the new continent.

Somers's sense of emptiness and anti-humanism becomes reinforced by his encountering the vacant space of Australia, devoid of tensions and conflicts of human relations, towards the end of the novel. Not only this "careless" land but also the different way of colonial life supports his divorce from his expectation of a new political order and from spiritual residues of the old continent. His discovery of a different colonial life also signifies a beginning of his self-awakening to otherness, which becomes noticeable toward the end. For instance, the fourteenth chapter "Bits" describes how Somers's longing for an instant -- non-mental -- life meets with different local lives, indeed different from the spirit of old Europe. Somers comes to see a clue for a different way of living through the local newspaper, the *Sydney Bulletin* :

Bits, bits, bits. Yet Richard Lovat read on. It was not mere anecdotage. It was the sheer momentaneous life of the continent. There was no consecutive thread. Only the laconic courage of experience.

All the better. He could have kicked himself for wanting to help mankind, join in revolutions or reforms or any of that stuff. And he kicked himself still harder thinking of his frantic struggles with the 'soul' and the 'dark god' and the 'listener' and the 'answerer'. Blarney --- blarney --- blarney! He was a preacher and a blatherer, and he hated himself for

it. Damn the 'soul', damn the 'dark god', damn the 'listener' and the 'answerer', and above all, damn his own interfering, nosy self. (300)

Encountering the lives of local Australians, Somers realizes how he has been stuck in the self-sufficient frame of Western knowledge. Somers tries hard to distance himself from European epistemology, which has made everything, whether it is about the human or the nonhuman, the conscious or the unconscious, an object of science and philosophy. The different way of life Somers observes in Australia enables him to question even his personal struggles with religious and political ideas that he has solidly believed in.

Along with his discovery of the different way of colonial life, Lawrence's depiction of the "uncanny" Australian bush brings into relief his extraordinary sense of racial otherness and his ability to capture the different spirit of a different place, although his presentation of Australia cannot help being different from a native Australian's. *Kangaroo*, written by a British writer, also raises debatable questions about cultural hierarchies, and their accompanying conflicts, between the metropolis and the former settler colonies as many other colonial discourses have done. At the same time, unlike other colonial texts, the novel as a characteristically Lawrentian text focuses on what is wrong both in the metropolis and in the former colonies; through his encounter with Australian political leaders such as Jack, Kangaroo, and Struthers, Somers comes to see that the cultural and political reality of Australia is as cliched and repressive as that of Europe. What is left for Lawrence as a hope is the land itself, which retains the mystery of the aborigines, like Red Indians in the American continent, although this primitive land is something "uncanny" and thus "inaccessible" to him: "Only it's too far for me. I can't reach so awfully far. Further than Egypt. I feel I slither on the edge of a gulf, reaching to grasp its atmosphere and spirit. It eludes me, and always would" (*Letters IV* 272-73).

In relation to Lawrence's presentation of Australia, what most

fascinates readers of this novel is his overwhelmed response to the Australian landscape, especially the Australian bush. For Somers, the Australian bush is a sort of "heart of darkness," impenetrable and inaccessible by Europeans:

Therefore he [Somers] let himself feel all sorts of things about the bush. It was so phantom-like, so ghostly, with its tall pale trees and many dead trees, like corpses, partly charred by bush fires: ... And he could not penetrate into its secret. He couldn't get at it. Nobody could get at it. What was it waiting for?

... But the horrid thing in the bush! He schemed as to what it would be. It must be the spirit of the place... He felt it was watching, and waiting. Following with certainty, just behind his back. It might have reached a long black arm and gripped him. But no, it wanted to wait. It was not tired of watching its victim. An alien people a victim. It was biding its time with a terrible ageless watchfulness, waiting for a far-off end, watching the myriad intruding white men. (18-9)

Seen from the aborigines' point of view, any vestige or mark of actual aborigines does not exist in this novel except in Lawrence's metaphoric use of the Australian bush; the traces of the aborigines only exist as a "ghost-like" presence in the middle of the bush. Lawrence personifies the Australian bush as aborigines through the typical imagery of black savages and white men, which allegorizes the relationship between aborigines and white explorers. Only in the middle of the bush, the power relationship of reality is abruptly reversed; the aborigine/ the ghost watches for revenge and alien white people become victims. Importantly, this symbolic and psychological appropriation of the bush signifies Somers's projection of his own anxieties and personal conflicts into the landscape. When Lawrence faces the "phantom-like" bush at night, he in a sense confronts a

fearful existence of the unconscious that he, as one of the intruding white men, cannot otherwise encounter.

The significance that the Australian bush has in this novel definitely involves much more than its geographical status as the landscape of the nation. In opposition to the white colonial civilization, which has destroyed the mystery of the land, the bush, which symbolically keeps evoking the mystery of black aborigines, renders the spirit of Australia a primitive land, not a part of white civilization. When Somers says that “this land always gives me the feeling that it doesn’t *want* to be touched, it doesn’t *want* men to get hold of it” (306), he emotionally sympathizes with the “untouched” aboriginal mystery of the land, rather than the colonialist desire of the Europeans. The aboriginal and rebellious power of the bush, still “watching the myriad intruding white men” (19), permeates the novel. Lawrence’s description of the bush reveals thus also how he sees the British colonial penetration into this primitive land. Although Lawrence does not give any direct statements about the existence of the aborigines, he makes clear through his symbolic use of the bush that, before Europeans had begun to settle the land, original inhabitants already lived in this bush land. The Australian bush, still untouched by the European invasion, signifies a symbol of “unconquerable” primitiveness. In short, the absence of actual aborigines in Lawrence’s text ironically coexists with their metaphoric presence, which governs the moods of the novel as well as the spirit of Australia.

Lawrence’s depiction of this landscape gives us some hints of where we might locate this novel in relation to other colonial discourses. For instance, Ania Loomba shows how the *Oxford English Dictionary* ( *OED* ), an authoritative voice of colonial discourse, defines the word “colonialism” and thus avoids “any reference to people other than the colonizers”:

a settlement in a new country ... a body of people who settle in a new

locality, forming a community subject to or connected with their parent state; the community so formed, consisting of the original settlers and their descendants and successors, as long as the connection with the parent state is kept up. (Loomba 1)

As Loomba reveals, this definition is silent on the existence of native people who have lived long before European colonizers "discovered" the place. The only important thing for this white dictionary is the relation between the settler colony and its parent country. "There is no hint," Loomba poignantly points out, "that the 'new locality' may not be so 'new' and that the process of 'forming a community' might be somewhat unfair" (Loomba 2). Compared with the description of the *OED* about the settler colony, Lawrence's presentation of this former set of British colonies features a characteristic of anti-colonialist discourse. Though his text is sometimes mixed with stereotypical descriptions of Australia, Lawrence's novel at least keeps reminding us of an "implication of an encounter between peoples, or of conquest and domination" (Loomba 1-2) without entirely dismissing the history of conflicts between the original inhabitants and the newcomers. Lawrence's metaphoric use of the Australian bush places his portrait of Australia in a certain sense outside the conventions of colonial discourse.

Lawrence's presentation of the Australian bush, based on his belief in "the spirit of place," further reveals his self-consciousness as one of the white men who have invaded this impenetrable bush. As a sign of his challenge to the Western colonial project, his text gives us an opposite example of "the domineering colonial eyes," which used to govern other colonial narratives: that is, Lawrence's emphasis on the "invisibility" of the Australian bush shows how the reality of a colonial landscape and racial others, narrated by white intruders, could be a false description as well as a naive delusion. When he depicts the bush, he entirely excludes the existence of the

white settler society. For Lawrence, the undistorted spirit of Australia is always immediately associated with the aboriginal mystery and absence:

And all this hoary space of bush between. The strange, as it were, *invisible* beauty of Australia, which is undeniably there, but which seems to lurk just beyond the range of our white vision. You feel you can't see as if your eyes hadn't the vision in them to correspond with the outside landscape. For the landscape is so unimpressive, like a face with little or no features, a dark face. It is so aboriginal, out of our ken, and it hangs back so aloof. (87)

In contrast to the “colonizing gaze,” which appropriates racial others and the land of a colony according to colonialist desire, Somers confesses he cannot “see” the “uncanny” landscape of Australia, which is “beyond the range of our white vision.” In a letter sent to Australian writer Katharine Prichard, Lawrence also mentions how impossible it is for white people to see Australia as it is: “We went into the Art Galleries at Adelaide and Melbourne. But nobody has *seen* Australia yet: can't be done. It isn't visible” (*Letters* IV 273).

It is in the “new” land, represented by the Australian bush and the ocean, not his political ideas, that Somers at the end of *Kangaroo* finds a possible solution to his diagnosis of the wrong direction in which both Europe and Australia were headed. After the “Nightmare” chapter, Somers's desire to return to a “humanless” and “soulless” world, devoid of human connections, reaches a peak. Somers immerses himself in a characteristically Lawrentian solipsistic world, while calmly reflecting on his unsuccessful engagement with *Kangaroo*: “*Kangaroo* wants to be God Himself, and save everybody, which is just irritating, at last. *Kangaroo* as God Himself, with a kind of marsupial belly, is worse than Struthers' absolute of the People. Though it's a choice of evils, and I choose neither. I

choose the Lord Almighty" (334). What is interesting is that, although Somers criticizes Kangaroo's desire to be "God Himself," he is actually making fun of his own desire to be a savior for everybody since his involvement with Kangaroo was an attempt to "objectify" his fantasy of a natural-born leader in a country outside Europe. What has fascinated Somers in Australia, however, is not either the diggers' clubs or Kangaroo, but "the profound Australian indifference" (379), which is so different from the social atmosphere of Europe: "The indifference — the fern-dark indifference of this remote golden Australia. Not to care — from the bottom of one's soul, not to care" (203).

This indifference of the land psychologically dovetails with Somers's sense of disorientation after the war, as well as with his obsession with the individual self. It seems likely that, perhaps from the first, Somers is not ready to intermingle with other people. In other words, many pages of *Kangaroo* are filled with Lawrence's political and philosophical ideas, but his presentation of politics in this novel does not give readers the impression that he aims to privilege these ideas. Rather, this novel is better read as a book full of meditations about Lawrence himself, what Lawrence calls "unremitting inwardness" (172). Lawrence's ceaseless self-questioning about himself ends in his final reconciliation with himself, which also signifies a process of curing his feeling against the world: "When he [Somers] was truly himself he had a quiet stillness in his soul, an inward trust. Faith, undefined and undefinable. Then he was at peace with himself. Not content, but peace like a river, something flowing and full. A stillness at the very core" (172). It is the "uncanny" colonial landscape that enables Lawrence to feel free from the repressive European civilization and thus to encounter with his deepest whole self of his own. Even though *Kangaroo* has been categorized as a "leadership" novel, it seems unlikely that this categorization does serve neither to explain the meaning of Lawrence's journey to this new land nor to characterize his presentation of leadership



politics in this novel.

### Notes

- 1) Lawrence's "leadership" novels include *Aaron's Rod* (1922), *Kangaroo* (1923), and *The Plumed Serpent* (1926). These works are based on Lawrence's argument for male leadership for a future society. But there are a lot of controversy over this issue. Bertrand Russell, a contemporary of Lawrence, in his autobiography defines Lawrence as a representative fascist. On the contrary, a major Lawrence critic like L. D. Clark in the 1960s points out that many critics have misunderstood and simplified Lawrence's idea of male leadership.
- 2) In contrast to most harsh critical reviews of *Kangaroo*, Robert Darroch argues that Lawrence's portrait of Australia "has to be looked at in a different light" and this novel is "a much more remarkable book than has hitherto been recognized." Darroch also introduces J. D. Pringle's praise of this novel in the fifties and Anthony Burgess's in the eighties: "At this time it would be a particular pity, for it is only fairly recently that we started to more fully understand what J. D. Pringle in the mid-fifties called 'the most profound book written about Australia' and about which Anthony Burgess thirty years later wrote: 'No novel, not even by a native Australian, has caught so well the spirit of a place whose magic has been virtually denied by the inarticulate culture that has been dumped upon it'" (34-7).
- 3) Lawrence explains in *Kangaroo* the etymological origin of a word "Pommy": "A Pommy is a newcomer in Australia, from the Old Country... Pommy is supposed to be short for pomegranate. Pomegranate, pronounced invariably pommygranate, is a near enough rhyme to immigrant, in a naturally rhyming country" (164-65).

Works Cited

- Boehmer, Elleke. *Colonial and Postcolonial Literature*. New York: Oxford UP, 1995.
- Darroch, Robert. "D. H. Lawrence's Australia." *Overland*, 113 (December 1988), 34-8.
- Hope, A. D. "D. H. Lawrence's *Kangaroo*: How It Looks to an Australian." *The Australian Experience: Critical Essays on Australian Novels*. Ed. William S. Ramson. Canberra: Australian National UP, 1974. 157-73.
- Lawrence, D. H. *Kangaroo* (1923). New York: Penguin, 1980.
- . *The Letters of D. H. Lawrence*. 7 Vols. Eds. James T. Boulton, George J. Zytaruk, Andrew Robertson, Warren Roberts, Elizabeth Mansfield, David Farmer, Gerald M. Lacy, and Keith Sagar. Cambridge: Cambridge UP, 1979-1993.
- Murthy, U. R. Anantha. "D. H. Lawrence's *Kangaroo* as an Australian Novel." *Association for Commonwealth Literature and Language Studies Bulletin*, 4, No. 4 (1976), 43-9.
- Vivas, Eliseo. *D. H. Lawrence: The Failure and the Triumph of Art*. Evanston: Northwestern UP, 1960.
- Wilding, Michael. "'A New Show': The Politics of *Kangaroo*." *Southerly: A Review of Australian Literature*, 30 (1970), 20-40.

## 書 評

倉持三郎『「チャタレー夫人の恋人」裁判——日米英の比較』（彩流社、2007）

日本の「チャタレー裁判」で、裁判所のねらいは最初から伊藤整訳『チャタレー夫人の恋人』がわいせつ文書であることを証拠立てることにあった。東京地裁の第1審で、検察官によって作品中の12か所の露骨な性描写の部分が持ち出された。しかしその部分は第1審では訳書全体のわいせつ性を証明する決定的な根拠とはなりえなかった。何といたってもそれは作品全体の分量の中でほんのわずかな部分でしかなかった。そのわいせつ度はいわゆる春本にくらべれば低く、その性描写も春本のそれとは違った性格のものであることも認められた。したがって年少者におよぼす影響も有害なものとはいえなかった。原作者ロレンスの作者としての意図も「一般的な読者には理解できない」としながらも肯定的に認められた。こうして最終的にはこの訳書自体をわいせつ文書とすることはできないという裁判所の結論であった。

だが裁判所はこの訳書をどうしてもわいせつ文書と決めつけたかった。そこで、やむをえず、直接にこの訳書のわいせつ性を証明することを回避し、出版社の罪を問うという挙に出たのであった。それはこういう理屈だった。「かつて何人も試み得なかったほど大胆な愛欲描写」のため、「世界各国でその出版の可否をめぐる大きな論争の渦を巻き起こした」小説を発売しますというような「扇情的宣伝広告」を出版社が出したとき、まさにそのときからこの作品はわいせつ文書となったという判断であった。そして「わいせつ文書」を出版したというかどで、出版社を有罪としたのである。（訳者の伊藤はこの第1審では無罪だったが、第2審で、訳者が翻訳しなかったら出版という行為も起こらなかったという理由で有罪とされた。）

こうして第1審では、作品の性描写の部分が作品全体の主題や原作者の意図を圧倒することができなかったが、第2審の判決では、裁判所はこの性描写の問題を高飛車に前面に押し出したのである。とにかく何としてでも性描写の部分を春本同様のわいせつ性を持つものとして認めさせようというわけだ。作品の中にたとえわずかでもわいせつな部分があれば、作品の主題や原作者の意図がどうであろうとも、もうそれだけで作品全体もわいせつであるという考え方だ。この第2審の判決によって、訳書のわいせつ性は決定的なものとなったのである。

だがわいせつ論争というものは結局検察側証人と弁護側証人との水掛け論に終わるものであることは目に見えている。性描写の部分について一方はわいせつであると言い、もう一方は「きれい」だとか「神聖」だとか言う。ほうっておけば論争は果てしなく続くばかりだろう。おたがいに相手側からそんなものはそちらの「主観」だよと言われてしまうだろう。「チャタレー裁判」は最高裁の上告までいったが、第1審、第2審ともに棄却された。ただ最高裁はわいせつな性描写の部分が作品自体のわいせつ性を決定する論拠としては不十分であることを感じ取ったのか、その判決要旨第4で、「性行為非公然性の原則」というものを「超ゆべからざる原則」として伝家の宝刀よろしく持ち出してさいごのダメ押しとしたのだ。最高裁は現実の中で公開するのが論外な行為だからといって、それを作品の中で描いて人に見せることも論外だと本気で考えているのだろうか。これは「原則」というのにはあまりにもばかっている。

それにしても裁判所がこうまでして躍起になって『チャタレー夫人の恋人』を社会から排除しようとしなければならなかった本当の理由はどこにあるのだろうか。それは単にこの作品がわいせつであるので、人びとの精神を墮落と退廃から守らねばならぬというだけのことではあるまい。

彼らが本当に恐れているものは実は彼らが原作者の主題として認めているものにほかならないのである。それは最高裁の判決理由の要旨第4の中で、原作者のロレンスの意図として述べられているものである。最高裁は、「貴族階級の雰囲気に対する批判、工業化による美しい自然の破壊、農村の民衆の生活に及ぼす影響、鉱業労働者の悲惨な境遇、人心の荒廃、非人間化」などの事実に対するロレンスの「指摘」が、彼の作品である『チャタレー夫人の恋人』の中

で「肉付け」されていることを認めている。だがそのように作者の意図を正当に取り上げていながら、最高裁は最終的な判断ではこの作者の意図を引き下ろし、「わずかでもわいせつな部分があれば、それだけで作品全体もわいせつである」というあのわいせつ性の判断基準の方に決定権をあたえ、上告棄却としたのである。

だがこれは果たして正当な取り扱いだろうか。原作者の意図が十分に表現されているこの小説の大部分と、問題になった性描写の部分は決して別々なものとして遊離してはいない。第1審の検察側証人の渡邊鎮蔵が証言しているように、12か所以外は猥本でよくあるように、ごまかすための「つけ足し」であるなどということは決してない。

国家権力は自分たちが支配する民衆が社会の現実に対して批判的な目を向けることを恐れる。だから『チャタレイ夫人の恋人』が「いわゆる春本とは類を異にする芸術作品である」と言いながら、その肝心の主題である作者の意図が国と社会に対して批判的であることを読み取った裁判所は、作品中の性描写の部分を取り上げて作品全体をわいせつと決めつけ、この作品を排除しようとしたのである。たとえ芸術作品であってもそれがわいせつ作品であれば、法を守るものとして断固取り締まらねばならないというわけである。彼らの理屈としては、春本でない作品が必ずしもわいせつ作品でないということにはならないのである。

『チャタレイ夫人の恋人』という作品によってロレンスがめざしたものは、性のタブーからの解放の訴えである。性は「わいせつ」の同意語として、過去の時代から国家権力を初め、あらゆる支配者によって、社会や集団の秩序を乱すという理由で危険視され、締めつけられてきた。そして心理的には性は汚いもの、嫌悪すべきもの、恥ずべきものとして、身近なところから暗い秘密の場所に遠ざけられてきた。それに対してロレンスは『チャタレイ夫人の恋人』で性を公然のものとして描いたのだった。性は愛し合う男女にとっては公然のいとなみであり、人間の生きることの喜びそのものであった。『チャタレイ夫人の恋人』はそのことを多くの人びとに訴える作品だった。そしてそれは人間の存在と精神の解放の叫びだった。

性の解放は人間の生活の中でのあらゆる束縛からの解放につながる。そして

それを作品化してうたいあげること、それは表現の自由と、言論、出版の自由と思想の自由に直結する。そこから社会の不正や矛盾に対して民衆の意識が強まってゆく。国家はまさにこのことを恐れるのだ。そして国家が抱く危惧はそのまま司法の危惧となる。

最高裁は法が芸術作品を裁くのは筋違いであり、法が裁くのは道徳や政治であり、芸術作品ではないとして、最終的には、道徳や政治に正面から立ち向かうことは避けて、作品のわいせつ性の問題にこだわった。だがこのばあい、わいせつ性の問題によって覆い隠されていたのは、実は「表現の自由」の問題だった。そしてその「表現の自由」こそ道徳や政治にかかわる問題である。法は「表現の自由」をこそ守らねばならないのであり、そのために戦うべきであった。わいせつ論議で検察側に妥協することなく、「表現の自由」の方向に議論を向けるように努力しなければならなかった。

1956年のアメリカで、わいせつな案内、広告、本を郵送販売したことで出版業者サミュエル・ロスが告訴された。判決は第1審も控訴審もわいせつ文書取り締まり法で有罪となり、被告は合衆国最高裁判所に上告したが、翌年の判決も有罪だった。ただブレナン判事が、判示をした。「性とわいせつは同意語ではない」と始まるその判示の一節は芸術、文学、科学の作品においては性の描写があるというだけでは有罪にならないというものであった。続いて社会的重要性を持つ作品にかぎり、言論と出版の自由を1791年の合衆国憲法修正1条が保障しているという判断が示されたのだった。倉持氏はこの判示を引用しながら「表現の自由」についてその所信を述べている。

〔ブレナン判事は〕「言論と出版の基本的自由はわが自由社会の発展と福祉（well-being）に大いに貢献してきたし、これからの成長を続けるためにも絶対に必要である」と述べている。「一般の風潮からすれば嫌悪すべき思想」であっても保障すると述べている。……これに比べると日本の最高裁には表現の自由を保障しようとする姿勢がアメリカより弱い。米英の裁判を見ても分かる通り、訳書はまじめな作品であり、いくら検察側が告発しても表現の自由の保護を与えるべきであった（270-1）。

1950年の4月と5月、2度に分けて『チャタレイ夫人の恋人』の訳書が出た。1946年に日本国憲法（新憲法）が公布され、第21条に表現の自由がうたわれ、検閲制度が廃止されたばかりだった。この時期、街には何となく生き生きした気分が躍動しているのを実感できたのだった。戦後の思想の混乱期とはいいながら、解放の気分の中で人びとは新しい考え方を自由に模索することができた。それなのにその後あっというまに保守と反動の風が吹いてきた。米ソの冷戦、朝鮮戦争に備えての日本国民の言論を統制する力も働いたのかもしれない。政府が国民の躍動の気分には危惧を感じたのかもしれない。そして今もなおこの保守反動の風は執拗に急速に吹き渡っている。倉持氏が本書の序文で述べているように憲法改正の声が火っぴらに叫ばれている。「表現の自由」もいつまた押さえつけられるかもしれない。本書はそれを憂えて倉持氏が鳴らす警鐘である。

（羽矢 謙一）

加藤洋介『D・H・ロレンスと退化論——世紀末からモダニズムへ——』（北星堂書店、2007年）

本書は、ダーウィンの進化論を出発点として出現した「退化」という概念に注目し、マックス・ノルダウの『退化』を基盤に同時代の生物学や芸術、社会との関わりの中でロレンスの作品を読み解くものである。

まず序章で、退化の概念が誕生した経緯が詳しく述べられる。退化を表すディジェネレート語は、シェイクスピアの時代には「墮落した」という意味で使用されていた。この言葉に「退化」の概念が与えられるのは、19世紀生物学の発展以降といわれている。進化論の出現により、あらゆる種が「変化する」という科学的な事実が解明されると、生物や人間の存在が進化をめぐる歴史的な時間の中でとらえられるようになり、一方で、種が「退化」する、という考え方も発生した。進化論（＝種の変化）が存在しなかった時代には、「退化」という概念もあり得なかった、と著者は言う。また、進化論は生存競争の事実を

明らかにしたが、これにより、同一種の生物のあいだに勝者と敗者という分類が発生した。著者が注目するのは、進化論が生存競争の結果として勝者・敗者の分類を生み出したのに対して、退化の概念は、新しい環境に適合し進化できるもの（＝適者）と、できないもの（＝不適者）という分類に強調を置き、その結果、あらゆる社会コンテキストにおいて、適者、不適者という分類が行われるようになった、という点である。それは、不適者を総称的に「退化した者」として分類する考え方を広め、「退化」という語が機能するようになった、というのである。この19世紀生物学の大きな転換の中で発生した犯罪学やヒステリーの研究などの「新しい科学」も、テキストとしての身体に見られる退化の現われを論じ、退化論と連動し発展した。このような時代背景の中で社会に広まりつつあった「退化」の概念を、当時の新しい科学的論証法を取り込み、体系化させたのが、ノルダウの『退化』である、と著者は述べる。主として科学的論証の中で展開し、下層社会にその対象が向けられていた退化論であったが、世紀末の時代に広まった頹廢芸術の影響を受け、やがて知識階層の文化人たちもその対象範囲に含まれるようになる。このようにして、広い社会階層に「退化」という概念が浸透していったが、ノルダウの『退化』が重点を置いたのは、白熱灯や電話、映画などの発明を生み出した技術革新と、この文明の進歩に歩調を合わせることでできない人間との間に生じた、進歩の速度の差であった。著しい進歩を遂げた科学技術がもたらした生活環境の変化に適応できない人間は、進歩の機会を得ることができない不適格者とみなされる。ノルダウは、文明の進歩という新しい事実が関与した近代の進化に注目し、これに適応できない人間の状態を「退化」と呼んだのである。

ロレンスがノルダウの『退化』を読んだという証拠はないが、「退化」の概念が社会に溢れていた時代に生きた彼はその影響を受けていた、と見る著者は、ロレンスや彼の同時代の芸術家たちのテキストを、この時代の文化的創造の場とみなす。そして、ロレンスのテキストと、退化をめぐる文化史との関連性を検証することによって、「文学と歴史のダイナミックな関係」を浮上させることを本書のねらいとしている。論考は、大きく二部に分けられており、前半の四章から成る第一部では、世紀末の文化とロレンス文学の関係について、後半の四章となる第二部では、第一次世界大戦以降の時代のアヴァンギャルド作家



ロレンスの発展を扱っている。

第一章では、英国留学中にノルダウの『退化』を読み、神経衰弱について理解を深めた漱石と退化論との関連について論じられている。退化論をめぐる両者の考えは分かれる。ノルダウの退化論は進化を前提条件とし、退化の行く末には、新しい環境に適応できないものは淘汰され、進化して適応したもの、ここでは具体的には神経衰弱を克服したものだけが残る、という仕組みである。これに対し、留学地英国の環境に馴染むことのできなかつた漱石は、文明や適応に対して懐疑的であり、ノルダウのように進化としての適応を受け入れることはできなかつた、というのである。むしろ、漱石が目指したのは、『虞美人草』の結末で、退化の徴候とされるヒステリー症状を持つ登場人物、藤尾を倒す宗近を通して描かれる「退化と神経衰弱を克服する道徳と意思の力」である、と著者は述べる。

第二章では、ノルダウの言語論の逆説性に挑むロレンスの詩学について論じられている。ノルダウによると、言語は「伝達の媒体」という社会的機能にすぎないもので、言語の造り上げる世界は、実体のないものである。そして、この実体のない言語の世界である読書と思索を行って多くの時間を過ごす知識人は、実世界である新しい環境に適応する機会を失い、退化に至るといふ。著者はここで、ノルダウの言語論に見られる逆説性を指摘している。言語能力は知的進化の現われであるのに、最高の言語力を持つ詩人や小説家が退化の過程にあると位置づけられる点である。この逆説に挑むロレンスは、表象の世界を構築するだけでなく、それを破壊することによって「生の流れ」を表現するような言語の可能性を目指した、と述べられている。

第三章では、世紀末の時代に流行したテニソンの詩「シャロットの姫」とロレンスの小説『息子と恋人』の関連性が取り上げられている。女性を家庭の内に位置づける時代であったヴィクトリア朝の画家たちは、外界とのつながりを遮断された生活を送るシャロット姫のように、閉ざされた空間の内に存在する女性を好んで描いた。そして、この空間に従順に収まらず、外界との接触を求める女性たちを墮落した者とみなした。これとは対照的にロレンスは、ヴィクトリア朝の女性像にあてはまるミリアムを、愛の感情を抑え、彼女の精神世界から飛躍することができない女性と見ている。彼によれば、ミリアムがとどまっ

ているのは現代人の不毛な観念の世界である。

第四章は、生物学的観点から『虹』を読む試みである。19世紀の生物学には、その比重を種に置く方法と、各個体を重視するものという二つの大きな流れがあったが、著者によると、ロレンスは進化論を通して、個体の存在に重きを置き、同種間に見られる「生の多様性」に注目したダーウィンに近い生物学的観点を持っていた。『虹』に登場するフランクストン博士の主張は、これに反するもので、生命を一抽象概念に集約してしまう近代科学の方法を象徴するものであるという。この方法では説明のつかない、個人の意思や感情の問題を含む個人主義の立場から生を捉えることが芸術家の仕事である、とロレンスが考えていたことが、述べられている。

第五章では、イタリア未来派美学がロレンスに与えた影響について『恋する女たち』を題材に論じられている。動的で破壊的なイメージを通して物の運動を表現する未来派の美学は、常に流れを続け、静止することのない生の表現を目指したロレンスの言語にも見られるものであり、とりわけ、『恋する女たち』に描かれる暴力的で破壊的な場面に明らかであることが述べられている。

第六章では、ポスト印象派の芸術家らによる原始美術の評価が、当時の英国に与えた衝撃について、退化の観点から論じられる。原始美術が評価されることは、文明から未開の世界への退化をイメージさせた点が指摘されている。

第七章は、第一次世界大戦に向けて国民の愛国心を高揚させ、文明人の戦いとしてスポーツを奨励することによって、戦闘に備えて健康な青年の育成を目指した英国であったが、大戦開始後、母国に送還される兵士の負傷の凄惨さや、シェルショック患者の発生といった戦争の現実を日にし、「戦争の大義」に対する幻滅が国民のあいだに広まった時代を扱っている。この大戦前後の国民意識の変化を描いているとして、著者はロレンスの「イギリスよ、わがイギリスよ」を挙げ、1915年版と1922年版とを比較検討する。15年版では、怠惰な生活を送る主人公が戦争に参加し、闘争心に目覚めて活力ある人物に変身する。ところが、22年版では、入隊するものの愛国心はなく、闘争に何の関心も示さない主人公に書き換えられている点に注目し、大戦を境にロレンスの戦争批判がより強くなった点を指摘している。

結論部第八章では、文明によってもたらされた「仮想現実」の世界に生きる

人間の退化について、自然との接触を通して「生の現実」を認識することの重要性を唱えた、ジョン・ハーグレイヴの『キボ・キフトの告白』と、ロレンスの『チャタレイ夫人の愛人』とを題材に論じられる。実体のない観念の世界に生きるクリフォドから逃れて、コニーが出かけて行くメラーズの住む森は、彼女を「生の現実」に引き戻し、退化を克服させる場所である、と述べられている。

ダーウィンによる生物学研究が、科学のみならず、その後の文化史にも与えた影響の大きさを示し、科学と文化の両方を視野に入れたダイナミックな論考であった。なかでも、ダーウィンが示した生物の個体の問題を、芸術における個人の問題につなげて論じている点は大変興味深い。また、文化史とロレンス文学との関連についての多角的で綿密な研究は、自らが生きた時代の文化の流れを敏感にとらえ、それに真摯に向き合ったロレンスの姿を浮き彫りにし、ロレンス文学の魅力を示してくれるものであった。

(門口 弘枝)

古我正和『二十一世紀からロレンスを読む』(大阪教育図書, 2007年)

著者は1996年に『ロレンス研究——西洋文明を越えて』を出版していて、岩田昇氏による書評が『D. H. ロレンス研究』第8号に掲載されている。20世紀の終わりになってやっと人類はかつて経験したこともないような諸情況や、地球破壊を実感し始めたようだが、D. H. ロレンスは20世紀初頭にすでに、近代ヨーロッパが何処へ行こうとしているのかを見抜いていて、人類を不幸へと導くようなことから予測し、憂慮していた。ロレンスの先見性にみちた鋭い叡智について古我氏はずっとこのように考えてきて、ロレンスの著作研究やロレンスの思索や生きかたなどを論じている。本書は新たにロレンスの詩やエッセイをさらに深く論じることにより、「21世紀からの視点」というベクトルを加

えようという試みである。

第1章「ロレンスの近代認識 未来の永遠を探る」 1「認識の発端 ロレンスの歴史感覚」：ロレンスは「独特の歴史感覚によってヴィクトリア時代から20世紀への変わり目であることを認識していた〈周辺人＝異質な領域の狭間であって、両方の領域を垣間見ることのできる人間〉の立場にあった」という利点をもっていた。ロレンス文学の源流であるとみなせる『白孔雀』の登場人物像を見れば、故郷を喪失して世界中をさまざつたロレンスの姿が重なっていて、ここに〈周辺人的資質〉を見出せる、と論じている。古我氏のロレンス観の根底には、「ロレンスが狭いイギリス人ではなく巨大な世界市民、文字通りのコスモポリタンだった」という認識がある。2「ルネッサンスの光と影——ロレンスと近代」：ロレンスは近代人の生き方の根底をなすものをルネッサンスにさかのぼって考えた、と解釈。「ルネッサンスの負の遺産」としての知的意識、知的精神が原因で人間にもたらされた変化などを、『逃げた雄鶏』や『黙示録』を分析検討し、また、そこからながめてみれば「ルネッサンスから始まり、現代に至る自由や民主主義の問題点」への糸口を見出せるのではないかと論じている。3「ルネッサンスの結果への批判」：ロレンスの詩集『鳥・獣・花』の「ブドウ」「イチジク」などを論評。4「聖なる動物たちの栄光と墮落」：「獅子、雄牛、鷲などの動物本来の血、官能や肉欲について検討。5「詩にみる近代認識『夕暮れの地』と6『山ライオン』」：ルネッサンスによって起こされた近代の帰結——「近代によって汚染・墮落したアメリカ」へのロレンスの嘆きと「それ以前の原アメリカへの憧れ」の気持ちについて記述。7「20世紀の神の死滅と『不条理』」：『メキシコの朝』についての論評。8「21世紀とキリスト教民主主義 ロレンスの未来認識」：ロレンスが予言していたキリスト教民主主義の行き詰まりは、21世紀のNY同時多発テロやいくつかの戦争などの世界情勢に見出せる、と論評。

第2章「過去の永遠の模索 ユートピアを求めて」では、ロレンスはその鋭い預言者感覚によって「近代のもつ本質に探りを入れた」結果、ヨーロッパの「キリスト教を背景とした未来の永遠に、人間としての希望を託することができなくなった」ので、それとは逆の、ヨーロッパの人びとが辿ってきた過去の中に生きるべき道を探ろうとしたとして、この章では、その考えがどのように

出てきたかを古我氏は探ろうとしている。1「無意識の模索 闇の追放と再発見」2「ロレンスの自然観」：「ルネッサンスから起った人間中心主義の犠牲にさせられた自然を、循環する時間や生の復活によってもう一度よみがえらせようとしたロレンスの考え」を『チャタレー夫人の恋人』などに探っている。(以下、紙面の都合により見出しのみを列挙する。) 3「アニミズムについて」：「ロレンスの生きもの観・アニミズム」についての論。 4「原初の模索」：(1)「バラ」と「ブドウ」(2)「変革者」(3)「夕暮れの地」の原アメリカについて検討。 5「地下の地獄の世界」：(1)「西洋カリンとナナカマド」——秋の排泄物、熟成された酒(2)「平穩」の奥にある地獄。

第3章「ロレンスが探った世界——21世紀に向けて——」1「擬人化より擬物化へ 新しいロマン主義」2「『馬で去った女』に見る擬物化より宇宙への方向」3「ロレンスの季節感 四季の巡り、円環する時間」4「Impersonality について I」5「Impersonality について II」6「ケルト体験と中世への憧憬」7「21世紀に向けて」

第4章「ユートピアより新桃源郷へ」1「天空を通う旅人、マタイ——ロレンスの宇宙観」2「進化論を越えて 生命共同体の担い手たち(1)アーモンドの花(2)ロレンスと動植物(3)大地の燃えるマグマ 蛇への畏敬の念 弱者への共感」3「Doing より Being へ——ロレンスのポスト近代認識」4「過去の永遠の受け入れ(1)ロレンスの時間感覚 薄明の世界と中世(2)ロレンスのスポーツ観(3)ケルトの循環文化(4)ポスト近代への提言『メキシコの朝』より近代市民へ(5)神話的時間(6)森の文化論の新らしさ 近代の反省(7)ロレンスと教育(8)Impersonality 新しい宇宙観(9)「新ロマン主義」5「新しい進化論 棲み分け理論」6「太陽信仰より暗い太陽へ」7「新しい救世主の地上への帰還」8「新しい生き方 狂牛病と近代農業を超えて」

以上紙面の都合により、第3章から第4章の論旨を概括することができず見出しのみを記述したが、これを見るだけでも古我氏のロレンス研究への関心の広さを知ることができるだろう。また、書名となっている「二十一世紀からロレンスを読む」という問題設定の姿勢が感じ取れるかもしれない。特に第4章「ユートピアより新桃源郷へ」では、ロレンスが20世紀の初頭に、「迫りくる近

代の波を前にして悩み模索して、なんとかそこから抜け出そうと努力した」という軌跡がまとめられている。他のユートピア作家とは違い、「ロレンスが求めた方向は基督教の向かう未来の永遠ではなく、過去の異教的な方向だった」と古我氏は考え、中国の「桃源郷」にも言及し、さらに「ケルトの森の方向」、ロレンスの「ニューメキシコにおけるアメリカ先住民の発芽の踊り」に「アニミズム」を見、これらのなかに「ロレンスが考える理想郷はユートピアではなく桃源郷であった」と論じている。

古我氏が21世紀に入った現代の世界が直面している難問題を直視し、真剣に憂慮しているようすが随所にみられるが、「あとがき」で、ロレンスの目指した「新桃源郷」観を「常に心に持ち、折りにふれてたち返るようにすれば、必ずや人類にも展望が開けてくると思う」と述べている。人類が必要とする希望へとつながる思考、思想をロレンスの文学のなかに見出せるのだという著者の声を聞くことができる。

この著書は古我氏のライフワークの総まとめとして、20世紀に聳え立つ文学者、思想家である D. H. ロレンスのおびただしい量の作品を論じたものである。したがって氏が本論中で詳述すべきだと考えられた作品は数多く、また問題意識の広がりテーマの多さと、多岐にわたる論考に、書評者の理解が不十分に終わったことは残念である。しかし対象とされた作品からの引用箇所が多く、それに関する具体的な解釈がしてあるので、氏の論を支える根拠を知ることができて理解しやすい。だからこそたとえば、『鳥と獣と花』の「イチジク」に関する解釈で、書評者との見解の相違がリアルに感じられる箇所があり、それについて最後に記しておこう。

ロレンスが「イチジク」の詩文で「女性は常に秘密であるべき」としているのは、その秘密性を女性の理想の在り方になぞらえているとして、「これは慎ましい女性を好むロレンスの心情を示している」と記されているところ。またロレンスが、イチジクが熟れて地に落ち「自分をさらけ出す」と描写しているところに「ロレンスの考える悲しい女性の宿命が見られる」と説明される場所である。さてこのような解釈でいいのか。日頃から書評者は、ロレンスは、女性とは…だ、というようなステレオタイプの思考を真っ向から突き崩そうと苦悶し、その内容を数々の作品に表現し続けた作家であると考えているので、

この詩句のロレンスの真意やいかに、と考え込んでしまった。また、ロレンスはいろいろの作品で、当時の「現代女性たち」に苦言を呈しているのは確かである。だが古我氏が、彼女らの「自己主張」は「ルネッサンス以来、男性と共に人間として成長してきた女性が行き着いた一つの帰結、民主主義や自由と共に獲得してきたもの」であり、これこそが「人間的成長と共に出てきた欠点だと（ロレンスが）考えていた」ととらえて、「女性の権利のいき過ぎた主張を戒めているのであろう」という解釈をしているところでは、この見解はさまざまな異論、反論を起こすに違いないと思った。

このように、ロレンスという作家は百年近くも世界中で、四方八方から寄ってたかって論じられ、もう論じ尽くされたのではないかともいえるが、「ロレンスの現代女性批判」というテーマ一つをとっても、さまざまな解釈が今なお確かに存在し続けていて、なお論戦が果てることはないようだ。古我氏の「二十一世紀からロレンスを読む」という視点によっても、これから先もさまざまな研究が行なわれるであろう。

(鎌田 明子)

吉村治郎『ロレンスの文学と思想——太陽とともに——』（開文社出版、2006年）

具体的な議論に先立って、序章「解体の文学」で著者は、ロレンス文学の基本的特徴を確認している。第一の特徴として、「二元論」を指摘する。ロレンスは物事を、男対女、精神対肉体、科学対自然、文明対原始、現代対古代、キリスト教対異教、知性対直感、観念対実相、などの二元論的見方で捉えていたと言う。大戦により決定的になるヨーロッパ近代文明の崩壊という時代があって、この二元論が、「旧来の観念の解体と新たな世界の構築」という形をとる、と著者は見る。第二の特徴として「関係の重視」を挙げる。ロレンスにとってこの「関係の重視」は、人間関係の重視のみを意味するのではなく、人間と自

然との関係が重要な意味を持つことを著者は強調している。関係重視の理由として、旧来の関係が機能を失い混乱しているという危機感が彼にあったこと、人間は他者との関わりの中でしか人間たりえないという認識を持っていたこと、そして、周囲との新たな関係の樹立によって主人公が新たな自己認識へ到達するという教養小説の伝統をロレンスも継承していたこと、の三点を指摘している。

第一章「ロゴスの解体」は、『息子と恋人』に見られた「従来の伝統的手法」による登場人物の性格造形が、『虹』では放棄されていることにまず言及する。前者では、母と子、父と子、男と女といった固定した社会的人間関係や、知性、教養、階級、宗教など、伝統的に継承された社会的価値観をもとに人物が創造されている。後者では、例えば女性を「女性の生命体としての側面」から描いている。これは、教養、知識、倫理観など後天的価値観によって決定される、いわゆる個性、人格と無関係であるばかりでなく、当人の意志とも無縁な「非人間的」な性質を持つ。ロレンスが着目する人間のこのような存在の相は、官能性や肉体性と深く関わるが、彼が「肉体」と「血」に固執するのは、それらが教えるものこそ真実であり信用するに値するものと彼が確信していたからだ、と著者は言う。「意思」と「意識」の人である『恋する女たち』のハーマイオニを、「肉体」と「血」を否定した例として挙げている。ロレンスは、彼女とバーキンとの関係を「知性の声」と「血肉の声」という両面から描くと同時に、「観念」と「実相」という両面からも描き、愛や平等という観念を徹底的に解体しているが、それは新しい関係を結ぶための解体である、と著者は考える。

「文明の闇」と題された第二章では、現代人がコスモスや自然界との生きた関係を喪失したことの元凶が、「科学的精神」を本質とする「現代文明」であるとロレンスは見ている、という論が展開される。彼がそのように見ているのは、物を原因と結果で説明する科学が断片的知識であるからで、さらに、知るということは対象をコントロールする力を持つことであり、それにより、観察する人間と観察される自然との関係が、支配被支配の関係であると誤認されてしまうからである、と著者は考える。そして科学的精神が支配する文明社会の犠牲者として、ジェラルドとグドランを論じている。特にジェラルドを、意志と精神力と知性を主体とし、知性の成果としての機械文明の象徴として創造さ



れ、何に対しても支配的態度で臨み、征服することはできるが本質的關係を結べない人物としている。彼が本質的な關係を築くのに失敗するのは、人間が知的存在であると同時に、肉体的、官能的存在でもあることを、彼が抑圧するからであると著者は言う。

第三章は「ロレンスとキリスト教」という題で、まずキリスト教と人間の關係を論じる。権力意識を免れない常人は、キリスト教の徳である「愛」や「慈善」や「寛容」を、相手に対し優位になるため、あるいは自分の保身のために利用する。『恋する女たち』におけるトマスの妻への態度はその一例である。キリスト教は愛の宗教であるが、多数を占める常人には高貴すぎ、そのために形骸化する、という考えに立つロレンスは、相手に憎しみを感じたならば直接それをぶつけることを選んだ、と著者は考える。また、ロレンスにおける、キリスト教と自然の關係も論じている。キリスト教は人間を靈と肉という二元論的視点で捉え、靈すなわち精神の、肉に対する優位性を主張している。ロレンスの自然觀はキリスト教が扱うことを回避した肉体的意識の世界において成立している自然觀であり、キリスト教の自然觀とは対極をなす、と結論している。

第四章は「ロレンスの自然觀」に当てられる。ロレンスの最大のテーマは人間關係の追求であるが、自然と人間の關係も重大な関心事であった。『恋する女たち』のパーキンがジェラルドの死に直面して言う、「人間は万物の尺度ではない」、「自分自身と闘うのはよしとしても宇宙と闘うのはよくない」という言葉は、ジェラルドの死が、「本来の故郷である自然から離脱して、不敬な敵対者となった」ことに起因することを暗示している。このようにロレンスは、自然を登場人物の人生やその生死も左右する決定要因となり得る実体として把握している。そこで著者はロレンスの自然觀の特徴を探っていく。まず一つの特徴は、この世を、人間の社会活動が営まれている日常世界と、その日常世界での地位身分、個性や人格などが用を成さない「非人間的」、「没個人的」、「他者」としての自然界との二つで捉えていることである。つまり彼の中では、自然が人間世界の対極として定立されている。もう一つの特徴は、「人間と自然との執拗な対峙を通して『他者』としての自然界において人間がどう位置づけられているかを問う一途な態度」である。人間をも含めた森羅万象を背後で統率している神秘的力をロレンスは「創造的神秘」と呼んでいるが、その身近な

例である動植物に彼は特に関心を示している。詩「蛇」は、黄金色の蛇が突然見知らぬ「何者」かに変貌する、すなわち未知の「他者」として立ち現れた瞬間を捉えており、そこでは知性とは別の意識、つまり「血の意識」の働きが示されていると著者は述べている。

続く第五章「二つの『闇』」で著者は、理性や知性を人間の持つ明るい面とすれば、本能や直感の支配する非理性的面は「闇」と言えるとした上で、ロレンスの「闇」とゴールディングの「闇」を比較することで、前者の特徴を浮き彫りにする。ロレンスの「闇」は「病める現代人が今一度回帰すべき再生と復活の場」であるのに対し、ゴールディングのそれは「人間存在の汚点ともいうべき原罪の巢食う暗黒の領域」であると言う。詩「愛より深く」によるとロレンスは人間の内部を四層に分けて考えている。最上層は意識、精神の領域である。その下の無意識の、いわば生理的、肉体的意識領域を彼は三層に分けていて、上から、まず生物としての「矜持の岩床」、次に「原始の生命の炎」、そして最深部に「古き、太古の究極的生命真理」があり、根源的生命が支配するこの最深部こそ、ロレンスの言う「他者」であり「闇」である、と著者は解釈している。この根源的生命は、人間にのみ固有な生命ではなく、自然界の動植物の生命と共通した普遍生命であると言う。一方ゴールディングの「闇」は人間にのみ固有の悪を志向する衝動である。ロレンスの「闇」すなわち根源的生命は「原初の連関意識を秘めている」、つまり人間の深部は絶えず外部の世界と神秘的呼応をしているということを著者は強調している。

最終章である第六章「詩と技法」では、詩集『鳥、獣、そして花』を取り上げて、ロレンス独特の人間観、自然観を抽出する。ロレンスは本質を直感で捉える。直感で捉えられた動植物は、常識的知識で捉えられたものとは次元が異なる。彼が「他者」と呼ぶその本質は、言葉による表現が難しい。この直感の世界を彼がどのように言葉で表現しているかについて、著者はまず、この詩集の九つのセクションの各々に付けられたプロローグを例にとり、人間中心の視点を放棄し、より広大な森羅万象の視点を導入していることを指摘する。次に詩の特徴を挙げてゆく。一つは、対象を細部にわたって凝視し詳細に描写する「一点凝視」の方法である。ロレンスは各々の動物が持つ固有の形態を造化の神の刻印と捉えており、対象の詳述には自然界において対象が持つ神秘的存

在様式を明らかにする機能があると著者は見る。もう一つは「問いかけ」の 패턴の導入である。問いかけを契機にして、詩に登場する「私」の対象に対する見方が変わる。それは、例えば「青カケス」の生命の神秘、すなわち「他者」に出会うことである、と著者は述べている。

本書では、新しい関係を結ぶための「ロゴスの解体」という議論を皮切りに、関係構築を阻害するものとしての現代文明、人間とのそして自然との良き関係のためのキリスト教否定、「他者」としての自然、「原初の連関意識を秘めている」根源的生命であるロレンスの「闇」、「一点凝視」と「問いかけ」の技法による「他者」なる自然との遭遇、と各章ごとに興味深いテーマが取り上げられている。序章に挙げられた「二元論」と「関係の重視」という特徴は各章の理解に役立ち、特に自然との関係の重視は、副題「太陽とともに」が示唆する人間と自然界との関わりというロレンス特有の世界観として、全体を繋げている。「あとがき」で著者が指摘するように、「心の荒廃」、「人間関係の希薄化」、「自然の蹂躪」など「個人を超えた文明そのものの否定面」を感じさせられる現在にあって、現代が抱える矛盾を問い直すきっかけを与えてくれそうなロレンス文学への期待は大きい。ロレンスのその特質を自然との関係重視を基調として丁寧に分かり易く論じている本書は、研究者を啓発する書であると同時に、広く一般読者にロレンス文学を知ってもらうための格好の書でもある。

(宇佐美 康子)

*Antonio Traficante, D. H. Lawrence's Italian Travel Literature and Translations of Giovanni Verga: A Bakhtinian Reading*  
(Peter Lang, 2007)

ロレンス再評価の試みとして、或いはロレンスを批判的にとらえ直す試みとして、同時代のテキストだけでなく、のちの時代のテキストとの関係からもロレンスの作品を読み直すことが有効であるのは、この本の著者が議論の拠り処にしているミハイル・バフチンの「対話」という概念からも確認されることで

あり、テキスト間の「対話」、すなわち間テキスト性という概念は、テキストを時代のディスコースとの関係で読むことによって歴史化し、その政治的、イデオロギー的な意味を再検討する読みの根柢をなすものである。バフチンの仕事の重要性は、それが構造主義、さらにはポスト構造主義の文学理論に与えた多大な影響から明らかであるのみならず、例えば、文化史の分野において、ミシェル・フーコーやフェルナン・ブローデル、ピエール・ブルデューらの理論と並んで、バフチンの議論が文化表象や歴史記述に重要な理論的土台を提供しているというピーター・バークによる評価<sup>1)</sup>を考えれば、バフチンの議論をロレンスの読解に援用したとき、ロレンスの作品が、単に文学(史)的にというにとどまらず、広く文化的、歴史的にどう再評価されるのか、このような点について *Traficante* が刺激的な議論を展開してくれることを期待するのは、ロレンスとバフチンというスケールの大きな思想家を併置することが予期させる可能性を前提すれば殊更奇とするに当たらないはずである。

*Twilight in Italy, Sea and Sardinia*, そして *Etruscan Places* が持つ重要性は、*Twilight in Italy* が書かれたのはロレンスが 'The Crown' 等の哲学的著作において独特の二元論を確立した時期であり、*Sea and Sardinia* は、第一次世界大戦を経験して西洋近代の抱える本質的な問題に直面したのち、ファシズムの萌芽を戦後のイタリアにおいて敏感に感じ取った作者の手になるものであり、*Etruscan Places* は *Lady Chatterley's Lover*, 'The Escaped Cock', 'The Ship of Death' 等の晩年の代表作と密接な関係にあるという点にある。これらの点が重要だというのは、'The Crown' に明らかであるような少なからず思弁的なロレンスの哲学的思考が、旅行という実際の経験の記述にどのように展開されているのか、ロレンスの政治的な認識が現実の旅行をとおしてどのように形成され、またその認識がどのように紀行文の記述に影響を及ぼしているのかなど、抽象的思考と経験との関係や、経験或いは実践とその(創造的/想像的)記述の関係という、文学的にも文化史的にも意義深い問題を考察するための好個のテキストとして、ロレンスの紀行文の持つ価値が高いからである。表象に係る最も根本的な問題である主体と対象の関係について、主体の認識の対象の中にも主体性を見出し、それらの間の「対話」をとおして「主体」のラディカルな再考を促すバフチンの議論を、ロレンスの作品におけるイタリ

アの他者 (Italian Other) の表象を検討することに援用するという Traficante の試みは、前述のごとく大きな可能性を有したものであると言える。しかし、上記の紀行文3作と、ロレンスによるジョヴァンニ・ヴェルガの翻訳について、それぞれ1章ずつをあてた本論4章と終章において、この試みの首尾が果たされているかと問えば、それには否定的な答えを返さざるを得ない。散漫な論の構成と、誤植に加え、明らかに文法を誤った文章が散見されることのために、ロレンスの作品とバフチンの著作とが「対話」に到る可能性が殺がれている憾みを、最後の頁まで拭えなかった。

第1章の *Twilight in Italy* 論で用いられる図式は、ロレンスの 'Two Infinities' と 'Holy Ghost' の概念を、バフチンの 'addresser', 'addressee', 'superaddressee' という「対話」概念の構成要素と対応させ、対立する二項と第三項との間に調和と均衡の関係をみるという図式であり、これらの各項は謂わば不即不離の関係にあるのでけっして融合するものではない。これはふたつの異文化間の交渉についても応用され、バフチンの 'Such a dialogic encounter of two cultures does not result in merging or mixing. Each retains its own unity and Open totality, but they are mutually enriched' という文章を引用することによって (pp. 18-19) 裏書きされる。この図式は第1章だけでなく残りの章においても議論の軸として使われるのであるが、ロレンスの文章に容易く見出すことのできる 'spirit' と 'flesh', 'England' と 'Italy', 'North' と 'South' 等の対立関係にこの図式を当てはめた読解を繰り返しているため、バフチンの 'dialogic encounter' という概念が持つ「主体」と「客体」の関係の批判と脱構築への糸口を掴むことのないまま、Traficante の議論は *Twilight in Italy* の細かな分析から逸脱し、創作年次を無視してとりあげたロレンスの他の作品への安易な図式の応用に終始する。'Il Duro' の章における 'Italian Other' の表象に他者の 'numen' 化を読み、性に対するロレンスの「両義的」態度と他者性に喚起された 'a sort of panic' を指摘している点 (pp. 28-29) は興味深い。主体をめぐる (ポスト) コロニアリズムの理論をふまれば有効なロレンス批判として展開できるはずのこの指摘を、ロレンスの 'Englishness' 或いは 'Puritanism' と 'Italy' との対立の図式に還元してしまうため、セクシュアリティの問題や (ポスト) コロニアリズムに係る政治的

な読解に到らぬまま議論が硬直化している。ロレンスの旅行記における文化的差異の問題、そして他者をめぐる問題は、すでに Neil Roberts が2004年の出版になる *D. H. Lawrence, Travel and Cultural Difference* で扱っており、ここではバフチンに加え、サルトルやホミ・バーバの理論を使ったロレンスのテキストの読解がなされているのだから、Roberts の著作への言及を欠いたまま、単純化した図式の当てはめに終始する *Traficante* の議論の欠陥は明らかである。

第2章における *Sea and Sardinia* の読解にもロレンスの 'English heritage' と 'Italian Other' を 'Two Infinities' と見做した図式が用いられ、そこにバフチンの 'authoritative discourse' という概念が導入される。この概念は、エトナ山が齶す不思議な力から逃れようとするところから始まるロレンスの旅と関連付けられるのであるが、エトナ山を 'Devouring Woman' に喩え、聞く者を恐怖で満たすその 'horrible female voice' を音声との繋がりから 'authoritative discourse' に接続し、ロレンスが *Sons and Lovers* に書いた母親の 'authoritative discourse' からの逃走という主題に関連付けて論じようとする手捌き (pp. 70-71) には鮮やかさが感じられる。しかし、これもまた図式的な議論の繰り返しと *Sons and Lovers* への長すぎる言及のために、結果的に奇妙に焦点の合わない論になってしまっている感が否めない。この章においては、'English heritage' と 'Italian Other' とが両立不可能であることを認識しながら、いずれにも満足できないロレンスの就いた第三の途として、短編 'The Princess' に出てくる 'green demon' がとりあげられ、詳しい説明が施されている。聊か常軌を逸した父親が「他者などはいない」、人間の裡には「誰のことにもしさい構わぬ」魔物が棲んでいるのだ、と説いて聞かせたその 'green demon' に言い及ぶことによって *Traficante* は、ロレンスが 'a barrier to dialogue' (p. 83) に衝き当たり、母親からの逃走が他者からの逃走 [ 'escape from the M (Other)'] になっていることを指摘して (p. 84), *Sea and Sardinia* が 'monologicistic enterprise' に終わっていると結論付ける (p. 90)。

この 'green demon' を喩えに使った指摘は巧みである。これは、続く第3章の翻訳についての議論にも、第4章の *Etruscan Places* 論にも応用され、著

者のロレンス批判の要をなしている。翻訳とは、異なった言語間の 'dialogic encounter' であるから、ヴェルガの作品の翻訳をとおしてロレンスがどのように 'Italian Other' と関係したのかがバフチンからの引用を交えながら論じられる。正確さを欠くことはあってもイタリアの作家の作品に光を当てることに寄与したロレンスの翻訳には一定の評価が与えられる一方で、ヴェルガの作品は芸術という 'the alter to serve to Lawrence's chief god' のために 'sacrificial lamb' として供されたのであり、英国性からも 'Italian Other' からも距離をとりつつ自身の 'individual identity' を再強化することに他ならなかった翻訳の背後には、ロレンスの 'green demon' への忠誠があったのだと論じられている (pp. 118-19)。第4章では、エトルリア人への時空を超えた共感を綴った *Etruscan Places* の読みに、バフチンの有名な 'Chronotope' の概念が援用される。歴史を超越した「対話」によって 'blood' と 'spirit' という 'Two Infinities' を統合するものをエトルリア人の中に見出したロレンスは、しかし却ってそのことのために、現実の 'Italian Other' との真の「対話」を逸しており、ロレンスの裡には終生 'green demon' が居据り続けたのだと結論付けられる。終章では、第3章の結論が繰り返され、他者は畢竟ロレンスにとって二次的な重要性しか持たなかったと述べられている。

この本は、バフチンとロレンスを結びつけることによって、セクシュアリティ、主体、他者性、翻訳といった現代の批評理論において中心的な主題を前景化しえてはいても、それらを掘り下げないまま図式的読解を繰り返すため、その結びつきが有する可能性の大きさに比して矮小な議論に終始しているという印象が否めない。例えば翻訳の章において、ジャック・デリダの 'Des tours de Babel' から一節を引用している (p. 104) にもかかわらず、『フィネガンズ・ウェイク』の例を手がかりに翻訳の「複数性 (pluralité)」を論じた同論文中の有名な議論へと接続しないのは、そうしていれば広がったであろう可能性を思うと残念なことである。'Bakhtinian Reading' と銘打ちつつ、バフチンからの引用が特定のものの繰り返しであるのも議論が深まらない要因であるが、浩瀚なバフチンの著作から偏りなく引用し、'Artistic creation cannot be analyzed outside of a theory of alterity: which means also that to produce is to understand'; 'Understanding is not considered then only as an

interpersonal process but also as a relation between two cultures. [...] <sup>12)</sup>とその要諦を正確に示したバフチン論の古典ともいうべきツヴェタン・トドロフの名著への一切の言及を欠いていることも、Traficanteの本が厚みのある議論をなしえなかったことに与っている。この本の著者にとっては皮肉なことだが、彼が前景化した課題は多く手付かずのまま我々の前に残されていると言ってよいであろう。

## 註

- 1) Peter Burke, *History and Social Theory*, 2nd ed. (Cambridge: Polity, 2005) の第1章並びに第4章を参照。
- 2) Tzvetan Todorov, *Mikhail Bakhtin: The Dialogical Principle*, trans. Wlad Godzich (Minneapolis: U of Minnesota P, 1984), p. 107; p. 109.  
(近藤 康裕)

Carl Krockel, *D. H. Lawrence and Germany: The Politics of Influence* (Rodopi, 2007)

本書の著者はまずロレンスがイングランドの作家であると同時に、ヨーロッパの作家でもあるというその固有の二重性から本題の意義を説明する。周知のごとく前者は、「伝統」という言葉に代表されるF・R・リーヴィスのロレンス評価につながるものであり、後者はロレンスの文学的方向性を同時代におけるヨーロッパ文学の動向との関係で、換言すれば、彼の作家としての意義をより広いコンテキストで捉えようとするものである。これは、どちらが有効であり、どちらが有効でないかという二分法的な問題ではない。むしろ、力点の置き方しだいでは両方のアプローチが可能になり、この事実でロレンス研究のむつかしさと豊かさが共存している。20世紀初期にロレンスが直面したヨーロッパの政治的、文化的な分裂は、彼をして西洋文明への全面的な懐疑もしくは否



定へと向かわせ、結果的にはイングランド固有の価値観への回帰——たとえそれが個人的な空想の域を出ず、実現されなかったとはいえ——を助長したとも言える。逆にヨーロッパとの邂逅は、彼を常に異端視し、部外者扱いをしたイングランドの文化的偏狭性を越え、より広い文学的土壌との接触を通して彼の文学が発展する契機になったとも言える。

著者は後者の観点からロレンスの文学の成立過程と変化をたどろうとするが、こうした比較文化的土壌は、ドイツとの関係に限って言えば、ロレンスのみによって培われたわけではない。それ以前にもコールリッジやカーライルはゲーテやシラーに代表される疾風怒涛時代のドイツの文学、およびカントやヘーゲルの観念哲学に魅了されていた。実際、ロレンスの場合、同じヨーロッパでもイタリアの方が彼の芸術的開眼という点ではインパクトが大きかったし、ニューメキシコやメキシコにおける彼の体験すらも、ドイツのそれよりは世界観の転換という点では重要視された。もちろん、フロイトやニーチェのロレンスへの影響は特定の作品、たとえば、『息子と恋人』や『アーロンの杖』において色濃く現れていたし、多くの批評家がすでにたびたびそれに言及していた。とはいえ、それはロレンスと同時代のドイツの文学・音楽・哲学・社会理論総体との関連で位置づけられたわけではなかった。何人かのドイツの批評家もかつてそうした研究に関心を示したことは事実であるが、本書の著者ほどそれを有機的、相互関連的に示そうとした人はまれであろう。豊富な経験的資料に基づき、それを一つのテーマに統合する手法には目を見張るものがある。ラッセルやケイト・ミレットが使った「ファシスト」、「男性優位主義者」などのロレンスに対する固定観念が間違いであるというよりも、どうしてそのような否定的な評価として現れたのかを、著者は、ロレンスとドイツとの関係性を新たな次元から見ることで検証しようとする。端的に言えば、ロレンスは当時のドイツが抱えていた「社会」と「個人」の相克を、またその歴史的な由来を同じような形で——たとえそれを完全に解決できなかったとはいえ——自身の「文学的課題」と見なしていたということである。

浩瀚な本書のあらましを述べるのは容易ではないが、その中心的な主張を要約してみたい。それはまずドイツのファシズムとは何かという問題提起と重なる。なぜなら、そこには「偉大な作家ロレンス」というリーヴィスの肯定的な

評価と、ラッセルやミレットの上記のようなロレンスへの否定的なイメージが微妙な認識のずれを生み出す温床があるからである。著者によるとロレンスはドイツ語に通曉していたわけではないが、F・マドックス・フォードに書評を依頼されるほど翻訳を通してドイツの文学や哲学を知っていたらしい。これはフリーダとの結婚を機に彼のドイツ文化全体への意識を高め、やがてドイツ・ロマン派や表現主義に固有の表現形式を自らの文学に導入することにつながる。ところが、ドイツのロマン主義文学や理想主義哲学は当時のイギリスでは、ラッセルのロレンス批判に代表されるように、ファシズムの源泉と見なされた。著者はラッセルやミレットのロレンス批判の根底にあるファシズムの構造分析をルカーチやG・L・モッセに求める。前者は封建主義がユンカー支配層に長く残存した事実をファシズムの原因とし、後者はファシズムを産業主義がもたらした経済的・政治的・文化的激変への反動として捉える。また著者はファシズムの分析にアドルノやホルクハイマーの見解（彼らはファシズムを単なる合理主義の反動としてではなく、啓蒙主義以来の、合理主義と技術的進歩主義による弁証法的帰結と見なす）を加える。

かくして著者は、フリーダのかつての恋人であったオットー・グロスが、産業主義を生み出したプロシア的父権主義を批判し、フロイト左派的な立場から性的自由を称揚したことを、またそれがロレンスに与えた影響を重要視する。それは同時にラッセルのロレンス批判が見極められなかったある種の盲点となる。自我中心の啓蒙主義の誤りは自然を合成することであり、音楽こそが自然と理性の対話を保つ芸術であると説くアドルノの音楽論は、またロレンスの文学的発展を知る上で重要な鍵になると著者は見る。さらにベートーベンの音楽が初期資本主義精神の中心であり、かつ個人に対する理性の暴政という19世紀のリアリズムに貢献したのに対して、ゲーテの小説の主人公（『親和力』のオットー、あるいはウィルヘルム・マイスター）が社会全体のために自分の欲望を放棄したというアドルノの見解から、著者はロレンスとゲーテの間に何かの親近性を感得する。アドルノの音楽論はロレンスとドイツ社会との関連、およびそれに依拠するロレンスの文学技法の発展を解明する上でさらに重要な手がかりとなる。次にアドルノがベートーベンの批判者として、ワグナーのロマン主義的音楽を評価するように、著者はその繰り返される神話的モチーフと

豊かな象徴的言語の使用を、産業社会を批判し、主人公の主観性に声を与えるロレンス固有の手段と見なす。ところが、逆にドイツ・ロマン主義の危険性と、大衆を惹きつけるヒトラーの演説の魅力をワグナーの音楽に見出したアドルノの認識が、『白孔雀』以降のロレンスの文学の危険性にも重ねられる。アドルノにとってシェーンベルクの無調性音楽がワグナーの罫からの脱出となるように、ロレンスの小説では、ロマン主義とリアリズムの調和という形で、『虹』、『恋する女たち』、『アーロンの杖』にその可能性が模索されると著者は捉える。それはまた異なった文学的ディスコースの間で展開されるロレンスの闘争が惹起する歴史的、個人的プロセスに焦点を当てることになる。こうして、ロレンスに向けられたさまざまな評価を対置することによって著者は複雑でダイナミックなロレンスの理解に接近しようとする。

まず『白孔雀』と『侵入者』ではショーペンハウエルの「愛の形而上学」やワグナーの音楽的效果が力説される。前者では、愛の分裂の悲劇という構造的繰り返しを「中心思想」(Leitmotiv)としてワグナーのオペラに対置される。後者ではとりわけ、哲学的・論理的思考の言語とは異質の、主観的な「音調言語」(Tonsprache)というワグナーの原理をロレンスが応用していると著者は言う。またそこにはニーチェの影響もすでに現れ、現実を超克するためにディオニソスの生命力が主人公によって表明され、ショーペンハウエルの無益な「意志」(Wille)ではなく、「永劫回帰」(ewige Wiederkehr)のうちに瞬間を把握することが許されると解釈される。

『息子と恋人』はトマス・マンの『ブデンブローク家の人々』に対置され、そこでもショーペンハウエルの反リアリストの哲学やワグナーのオペラが重要視される。が、ここではやがてロレンスはフリーダとの結婚を契機として、また彼女の元恋人であるオットー・グロスのフロイト的、ニーチェ的な世界に開眼することで、新たな脱出口を模索する。『虹』ではショーペンハウエルの「意志」の他にゲーテの「光を求めて発展、進歩する人生」(Morphologie)という概念が使われ、男性と女性の主人公にそれぞれ「闇」と「光」が対象化される。とりわけスクレベンスキーとアーシュラの関係においては、著者は、前者をM・ウェーバーの自由主義的な帝国主義者のイメージ、およびニーチェの国家的「権力への意志」の体現と見なし、後者を、逆にニーチェの哲学に独

特のエロティシズムを読み取ることで、スクレブンスキーに反抗する対立像として位置づける。ドイツ現代芸術との関連で特筆に価するのは著者が、アーシュラが馬の群れの幻覚に襲われたり、虹の象徴を見たりする場面に、カンディンスキーやマルコの表現主義的絵画とロレンスとの密接な係わりを指摘していることである。

著者の指摘する『恋する女たち』とドイツ思想の関係もユニークである。ジェラルドはウェーバーが分析した資本主義社会のピューリタン精神の権化となり、その強迫観念的ノイローゼは現代資本家の心的状況、とりわけ現代ドイツの歴史状況の反映とされる。一方、パーキンとアーシュラは逆にワグナー的ロマン主義によってそれを越えようとするが、この世界も小説の結末では成就しない。さらにジェラルドと対比されるレールケにもドイツ的な状況が付与される。彼は労働と芸術を融合させようとする当時の美術工芸協会の思想（バウハウスの思想とも類似している）の代弁者とされ、ロレンスはそれをフリーダの姉妹やウェーバー兄弟から聞いたとされる。『ロスト・ガール』はゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』と対比される。そこではヴィルヘルムの放浪がアルヴァイナのそれに符合する。つまり、両者とも旅芸人の一座と生活を共にするが、最後には医者になったり、看護婦になったりして社会に奉仕するからである。しかし、国家や社会への奉仕に人生の意義を認めなかったロレンスは、ゲーテやウェーバーの思想に反対し、ノバリースのロマン主義に活路を見出すという形で、アルヴァイナとチチオの情熱的關係に夢を託すが、戦争の始まりによって結局それも危機に瀕する、と著者は解釈する。『ミスター・ヌーン』ではゲーテの『ファウスト』がモデルとなる。あるいはそれがパロディの対象となる。著者はここでロレンスがフリーダとグロスのエロティシズムをワグナーのロマン主義との関係で明らかにすると考える。つまり、ゲーテの「諦念」が否定され、エロティシズムの世界が肯定されるのである。さらに、彼は、この小説ではロレンスの戦いがゲーテ、ショーペンハウエル、ニーチェ、グロスからの影響によって展開されていると見る。が、軍隊に支配されるドイツの光景が示すように、未完の小説は危機意識をさらに助長する。

『アーロンの杖』、『カンガルー』、『翼ある蛇』のいわゆる「指導小説三部作」では、ロレンスとドイツ文化との関連性が、著者のかなり大胆な仮説によって、

いっそうその強度を増しているように感じられる。『アーロンの杖』はヘッセの『デミアン』と比べられる。そして、著者はこの小説が戦後のドイツにおけるリベラリズムと社会主義の失敗を示唆していると解釈する。その影響は『カンガルー』における右翼的郷軍人会「ディガーズ」の運動や主人公サマーズの隣人ジャックの暴力的な権威主義にも連なる。著者はさらにこの小説の政治的状况を、バイエルンの挫折した革命運動である独立社会主義（E・ヤッフェやA・ウェーバーの非階級的な理想主義に基づく大衆運動）、および当時ドイツで台頭していたシオニズムとの関係で捉えようとする。とりわけ後者は人類愛による国民救済を唱えるユダヤ人弁護士ベンジャミン・クーリー（カンガルー）を劣勢させる。ロレンスも一時、シオニズムの熱心な支持者である友人に影響され、パレスティナへの移住を夢見たこともあった。著者はこのドイツのシオニズムに、ハシディズムの復活を主張するM・ブーバーの影響を見る。さらに著者は、『翼ある蛇』では『カンガルー』で提示された国民主義的思想を、ロレンスの「古代アステカの宗教の復活」に重ね合わせ、これがファシズムやシオニズムに代表される当時のドイツの思想状況の反映であるかどうかを探求する。そこでは、ケツァルコアトルの宗教運動が、個人を支配する父権的権威主義の傾向を示しているとはいえ、「血の意識」や「民族の意識」の点で個人の犠牲を強いるドイツのファシズムよりもリベラルであると結論づけられる。『チャタレー夫人の恋人』ではシュペングラーの『西洋の没落』が対置される。またコニーの夫クリフォードの生活史（彼は新式の鉱山学や石炭化学をドイツの大学で学び、ハウプトマンやリルケを読み、また同時にカントに代表される古典的な合理主義的ドイツ文化を肯定する）にはドイツの社会背景が含まれる。

以上、ロレンスの長編小説を中心に、ドイツの社会や歴史を土台にした著者独特のロレンス解釈を紹介した。これらの小説では大きな社会変動にさらされた20世紀初期のドイツ固有の問題が、「肉体」と「精神」、「個人」と「社会」、「意識」と「無意識」の間で展開されるロレンス自身のディレンマと重なっており、それは今もなお現代社会の構造的特徴になっているというのが本書における著者の最終的な主張である。限られた紙面では綿密な実証的データに依拠した著者独自の理論化作業の所産をすべて紹介することは無理であるが、本書が今後のロレンス研究の重要な道標になることは間違いない。こうした研究は

ドイツ語圏の研究者にのみ可能なことではあろうが、それが比較文学の新たな境地を示唆している点でも意義深い。しかし、それはあくまでもロレンスに接近する一つの可能性であり、絶対的な基準ではない。本書ではリーヴィスの熱烈なロレンス評価、およびファシズムを軸にしたラッセルやケイト・ミレットのネガティブなロレンス評価を超えて、ドイツの状況をヨーロッパの（あるいはイングランドの）全体的悲劇として捉えることで、ロレンスの実像を解明しようとする方向が明確に示されている。それは「偉大な作家ロレンス」というリーヴィスの一次元的な解釈への挑戦の一つではあろうが、逆に、数多くの迂回路を経て、くしくもリーヴィスの批評家的原点にもどっているとも言えよう。

（大平 章）

# ロレンス研究文献

(2006年9月～2007年8月)

(\*印は協会に寄贈のあった文献)

(日本在住の研究者あるいは国内出版の英語文献)

- Asai, Masashi, (論文) “Cult of Spontaneity: Lawrence and the Occalt” *D. H. Lawrence Studies*, Vol.15 No.2 (The D. H. Lawrence Society of Korea), August 2007.
- Doi, Kimiko, (論文) “The Gargoyle in *The Rainbow*”, 『千里山文学論集』第76号 (関西大学大学院文学研究科), 2006年9月.
- Inami, Hiroaki, (論文) “Pagan Frontier and Resurrections: D. H. Lawrence’s ‘The Escaped Cock’ and Shinobu Orikuchi’s *The Book of the Dead*”, 『女子美術大学研究紀要』第37号 (女子美術大学), 2007年.
- Kamiishida, Reiko, (論文) “The Paradox in Lawrence’s Speculative Writings”, 『D. H. ロレンス研究』第17号 (日本ロレンス協会), 2007年3月.

(日本語文献)

- 浅井雅志, (論文) 「深淵への漂流—ロレンスとイエイツの神秘主義—」, 『京都橘大学研究紀要』第33号 (京都橘大学研究紀要編集委員会), 2007年1月.
- 飯田武郎, (論文) 「コンラッドの『闇の奥』とロレンスの『翼ある蛇』——異文化接触と河——植民地主義と再生」, 『比較文化研究』第38号 (久留米大学比較文化研究所), 2006年12月.
- 飯田武郎, (書評) 「Doo-Sun Ryu, *D. H. Lawrence’s The Rainbow and Women in Love: A Critical Study*」, 『D. H. ロレンス研究』第17号 (日本ロレンス協会), 2007年3月.
- 石原浩澄, (論文) 「「ロレンス研究」の研究——初期受容史をめぐって」, 『D. H. ロレンス研究』第17号 (日本ロレンス協会), 2007年3月.
- 井出あかね, (論文) 「後期ロレンス文学における踊りの二つの傾向とその影響」, 『金城学院大学大学院文学研究科論集』第13号 (金城学院大学大学院文学

研究科), 2007年3月.

宇佐美康子, (論文)「攻撃性と対人関係——『恋する女たち』の二組の恋人」,  
『D. H. ロレンス研究』第17号 (日本ロレンス協会), 2007年3月.

大熊昭信, (論文)「ロレンスの『侵入者』——自己抹消のための小説作法」,  
『成蹊大学一般研究報告』第38号 (成蹊大学), 2007年2月.

岡野圭壹, (論文)「D.H.ロレンスと E.マーシュ——ロレンスのマーシュ宛の  
手紙を読んで」,『京都学園大学経営学部論集』第16巻第2号 (京都学園大  
学経営学部学会), 2006年12月.

小野綾子, (論文)「女性の視点から「私という物語」を読みかえる——ロレン  
ス、オースティン、ソーロを手がかりにして」,『地域政策研究』第9巻第  
4号 (高崎経済大学地域政策学会), 2007年3月.

加藤英治, (論文)「D. H. ロレンスの「イングランドよ、イングランドよ」を  
読む」, 伊藤廣里教授傘寿記念論集編集委員会編『伊藤廣里教授傘寿記念  
論集』(伊藤廣里教授傘寿記念論集刊行会), 2007年8月.

加藤洋介, (論文)「D・H・ロレンスの『虹』と進化論」,『西南学院大学英語  
英文学論集』第47巻第1・2・3号 (西南学院大学学術研究所), 2007年  
2月.

加藤洋介, (単著)『D.H.ロレンスと退化論：世紀末からモダニズムへ』(北星  
堂書店), 2007年6月.

川邊武芳, (論文)「教育とは何か? D. H. ロレンスの教育観」,『筑紫女学園  
大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』第2号 (筑紫女学園大学・筑紫女  
学園大学短期大学部), 2007年.

倉田雅美, (書評)「清水一嘉・鈴木俊次編『第一次大戦とイギリス文学——ヒ  
ロイズムの喪失』」,『D. H. ロレンス研究』第17号 (日本ロレンス協会),  
2007年3月.

\* 倉持三郎, (単著)『『チャタレー夫人の恋人』裁判 日米欧の比較』(彩流社),  
2007年3月

古我正和, (論文)「ロレンスにおける冬枯れと地下の世界」,『文学部論集』第  
91号 (佛教大学文学部), 2007年3月.

古我正和, (単著)『二十一世紀からロレンスを読む』(大阪教育図書), 2007年



4月.

- 近藤恭子, (書評)「David Ellis, ed., *D. H. Lawrence's Women in Love: A Casebook*」, 『D. H. ロレンス研究』第17号 (日本ロレンス協会), 2007年3月.
- 近藤康裕, (論文)「ジョン・ファウルズとD. H. ロレンス——*Daniel Martin* (1977)におけるロレンス的主題」, 『D. H. ロレンス研究』第17号 (日本ロレンス協会), 2007年3月.
- 佐藤治夫, 須田理恵, (論文)「D.H.ロレンスにとっての「お金」——Pansiesからうかがえる経済状態」, 『英米文化』第37号 (英米文化学会), 2007年3月.
- 杉山泰, (論文)「イギリス留学発見の旅—D・H・ロレンス, アラン・シリトー, バイロン, パット・マクグラス—」『京都橘大学研究紀要』第33号 (京都橘大学研究紀要編集委員会), 2007年1月.
- 杉山泰, (論文)「D・H・ロレンスが描き出した故郷——イギリス留学で発見したこと」, 『立命館英米文学』第16号 (立命館大学英米文学会), 2007年1月.
- 鈴木悟史, (論文)「ロレンスの生物観——動物世界の見直し」, 『仏教大学大学院紀要』第35号 (仏教大学大学院), 2007年3月.
- 角谷由美子, (論文)「「赤子」のイメージに読み解く進化論の影響——テニスン『イン・メモリアム』とロレンス作品の比較」, 『文芸学研究』第11号 (文芸学研究会), 2007年.
- 角谷由美子, (論文)「『虹』における『魂の行方』——詩人テニスンへの言及の意味」, 『D. H. ロレンス研究』第17号 (日本ロレンス協会), 2007年3月.
- \* 田形みどり, (論文)「D.H.ローレンス思想と老荘思想との共鳴点に関する一試論 (その2)」, 『海—自然と文化』第4巻第3号 (東海大学海洋学部), 2007年3月.
- \* 田形みどり, (論文)「D.H.ローレンス思想と老荘思想との共鳴点に関する一試論 (その3)」, 『海—自然と文化』第5巻第1号 (東海大学海洋学部), 2007年7月.
- 田部井世志子, (論文)「個人と集団の狭間で——『アポカリプス』(by D. H.

Lawrence) の現代的意義, 『北九州市立大学文学部紀要』第72号 (北九州市立大学文学部), 2006年10月.

\* 土井喜美子, (論文)「ロレンスと自然」, (関西大学博士論文), 2007年3月  
鳥飼真人, (書評)「John Worthen and Andrew Harrison, eds., *D. H. Lawrence's Sons and Lovers: A Casebook*」, 『D. H. ロレンス研究』第17号 (日本ロレンス協会), 2007年3月.

西村道信, (論文)「美学的文体論とコーパスの問題点——D.H. Lawrence の文体的特徴とイメージ構築」, 『英語コーパス研究』第14号 (英語コーパス学会), 2007年.

野上良子, (論文)「『恋する女たち』に表現された知識人の破壊願望」, 『サイコアナリティカル英文学論叢』第27号 (サイコアナリティカル英文学会), 2007年3月.

半田恵美, (論文)「『虹』における女性」, 『武蔵野大学文学部紀要』第8号 (武蔵野大学文学部), 2007年.

藤原弘一, (単著)『D. H. ロレンス: 実証的研究』(大阪教育図書), 2007年3月.

武藤浩史, (書評)「Charles Burack, *D. H. Lawrence's Language of Sacred Experience: The Transfiguration of the Reader*」, 『D. H. ロレンス研究』第17号 (日本ロレンス協会), 2007年3月.

山田晶子, (論文)「『アルヴァイナの墮落』論——「墮落」の意味 (1)」, 『愛知大学文学論叢』第135号 (愛知大学文学会), 2007年2月.

山田晶子, (論文)「『チャタレー夫人の恋人』と現代——ロレンスの描く不倫の特異性について——」, 『IVY』第39巻 (名古屋大学英文学会), 2007年3月.

山田晶子, (論文)「『アルヴァイナの墮落』論——「墮落」の意味 (2)」, 『愛知大学文学論叢』第136号 (愛知大学文学会), 2007年7月.

山田晶子, (論文)「『羽鱗の蛇』論考——「二道」の神について」, 『言語と文化』第44号 (愛知大学語学教育研究室), 2007年7月.

山本智弘, (論文)「ロレンスとカナダ——仮の理想郷」, 『千里山文学論集』第76号 (関西大学大学院文学研究科), 2006年9月.

吉村治郎, (単著)『ロレンスの文学と思想 : 太陽とともに』(開文社出版), 2006年12月.

吉村治郎, (論文)「ロレンスとフリーダ」, 『英語英文学論叢』第57号 (九州大学英語英文学研究会), 2007年.

## 日本ロレンス協会第38回大会報告

2007年度の日本ロレンス協会第38回大会は、神戸女学院大学にて、6月2日（土）、3日（日）の両日開催された。初日午前中は3名の若手研究者による研究発表に続き、韓国ロレンス協会招待講師 Eunyoung Oh 氏による特別講演（“Reading D. H. Lawrence’s ‘Leadership’ Novel *Kangaroo* from a Postcolonial Perspective”）があった。大学図書館本館における特別展示会見学「日本と『チャタレイ夫人の恋人』：稀覯本・発禁本等展示会」をはさみ、午後にはシンポジウム「チャタレー裁判と表現の自由」が一般公開で行われた。その後、総会が開かれ、懇親会が催された。2日日はワークショップ「ロレンスと雑誌メディア」があり、盛況のうちに幕を閉じた。盛りだくさんの内容で、濃密な時が流れた2日間であった。なお、役員会は大会前日1日（金）に開かれた。

第1日 6月2日(土)

### 【第1部 研究発表】

“The Nameless” : *The Plumed Serpent* における否定神学

上田女子短期大学専任講師 上石田 麗子

*The Plumed Serpent* (1926) は「現代人に宗教は可能か」という問題にロレンスが真正面から取り組んだ物語であると同時に、彼の否定神学者としての側面が色濃く反映された小説である。この小説では神が、「その名が一度も発されたことの無い者」と否定の言葉によって表現される。神はすべての理解を超越する者、神秘そのものと考えられている。そのような神は名付けられず、ただ暗示によってしか語ることができないうために、顕現として、蛇と鷲のシンボルが用いられる。本論では、ロレンスの否定神学者的神観念を考察したのち、「言葉では表現できない神」の顕現としてロレンスが用いた蛇と鷲というシンボルの、ヨーロッパ文明、ゾロアスター教、ニーチェ、アステカ文明における歴史的な文脈を概観した。

## ロレンス「と」ドゥルーズ

——ロゴスという権力に対していかに逃走線をひくか

早稲田大学大学院博士後期課程 三宅 美千代

ロレンスのロゴス中心主義批判，肉体の復権をめざす訴えが，ほかならぬ言語によって為されたという事実は，多くの研究者の指摘するところである。作家が言語表象性に懐疑を抱くことは決して珍しいことではないが，例えばアルトーと比べた場合，ロレンスがこのようなパラドックスに対し，いかなる解決策を自らの執筆行為において与えているかは見えにくい。

本発表は，ロレンスがセザンヌの画布に見出したような表象行為における闘いの痕跡が，ロレンス自身のテキストのいかなる身振りにおいて見出されるのかを明らかにする試みとして，動物と感応する登場人物の身体描写に注目し，「動物への生成変化」をシニフィアンとシニフィエの二項対立を解体するための戦略とみなすドゥルーズ＝ガタリの考えに示唆を得ながら，ロレンスが自身の創作に付随するロゴスという権力装置に対して，エクリチュールのレベルで，どのような逃走線を用意したのかを考察した。

## Reptiles 論——「対立するものの均衡状態」について

仏教大学大学院博士後期課程 鈴木 悟史

本発表では，ロレンスの詩集『鳥・獣・花』のうち，Reptiles に収められている詩を，「蛇」の詩と「亀詩篇」と大別して読むことで，ロレンスの爬虫類観を考察した。ロレンスは爬虫類の覚書きの中で，「全てのものは対立するものの均衡状態に存在している」と記している。覚書きによれば，蛇は単に湿っていて冷たいだけでなく，中に太陽を保有しているという。また，亀は，土の部分を築き上げ立ち上がった最初の生き物であるが，甲羅に天球を配してもいる生き物である。このように，蛇と亀は互いに対立関係にあるものを二つとも具有している点で共通している。さらに，「蛇」と「亀詩篇」には本能に基づく行為が多く描写されている。このことから，我々はいかに爬虫類の脳が本能のみを司っているかを客観的に窺い知ることができる。

ロレンスはこれらの詩で，そうしたことだけではなく，我々哺乳類の遺伝子には爬虫類を恐れる記憶が刻みこまれているということについても，我々に提

示している。ロレンスは爬虫類をこのように特別な存在として描写することによって、爬虫類が有する神秘性を最大限に引き出しているのである。

【Guest Speaker's Lecture】

Reading D. H. Lawrence's "Leadership" Novel *Kangaroo* from a Postcolonial Perspective

Professor Eunyoung Oh, Hankuk University of Foreign Studies

This paper focused on how Lawrence's male leadership theme conflicts with his sense of locality in his Australian novel *Kangaroo*. This focalization allowed me to demonstrate the way in which Lawrence's presentation of the leadership idea undermines its categorization as a "leadership" novel, as exposed in Somers's "self-reflective" narrative voice and his futile relationship with Australian political leaders such as Kangaroo, Jack, and Struthers. As the novel unfolds, Somers's increasing apathy about the social reality of the former set of colonies contrasts with his "uncanny" attraction to the Australian landscape, which from start to finish governs the atmosphere of the novel.

Once we question *Kangaroo*'s status as a "leadership" novel, the main focus shifts from the leadership politics to the issues of colonialism: how Lawrence with a keen sense of "place" and "difference" approaches and appropriates the landscape and culture of Australia, a white settler nation under British dominion. Lawrence's presentation of Australia provides a good chance to look into the sources of cultural conflict that Lawrence as an Englishman felt in presenting this British dominion. In *Kangaroo*, Lawrence objectifies his conflicting feelings about Australia and records his awakening sense of "otherness" especially through his appropriation of the Australian bush.

## 【第2部 シンポジウム】チャタレー裁判と表現の自由

なぜ『チャタレイ夫人の恋人』は有罪なのか

司会 東京学芸大学名誉教授 倉持 三郎

2007年の3月13日で、伊藤整訳、小山書店刊行の『チャタレイ夫人の恋人』の有罪が確定してから半世紀になった。訳書は、刑法175条のわいせつ文書頒布販売禁止に触れるという理由で1950年9月、起訴され、1951年に37回にわたって公判が開かれ、1952年1月18日に第一審の判決があった。伊藤は無罪、小山は扇情的広告をしたという罪で有罪であった。第二審の判決は1952年12月で、両名とも有罪であった。一部に性器、性行為の描写があるという理由であった。1957年3月13日の最高裁判決は上告を棄却し、両名とも有罪が確定した。伊藤は10万円、小山は25万の罰金を課せられた。

ところが無削除版の刊行は、アメリカ合衆国では1960年3月、イギリスでは1960年11月、無罪が確定した。日本で有罪なのに米英では何故無罪か。この違いはどこから来るのか。日本の最高裁は表現の自由を不当に制限したのではないだろうか。

チャタレー裁判は、その第21条で表現の自由を保障する新憲法下における文学作品の裁判としてきわめて重要であった。この裁判は過去のものではない。表現の自由の問題がかかわっているからである。有罪確定50周年を機会に文学作品の表現の自由を考えてみた。

増口充先生には、旧憲法時代の出版法によって規制された翻訳、出版状況と日本のチャタレー裁判について、杉山泰先生にはイギリスにおけるチャタレー裁判について、憲法学者で一橋大学大学院法学研究科教授の阪口先生には憲法学者の立場から、性表現と表現の自由について発表していただいた。

翻訳『チャタレイ夫人の恋人』と表現の自由——検閲をめぐる

講師 長崎県立小浜高等学校教諭 増口 充

1930年6月号の『英語研究』において初紹介された『チャタレイ』は、その後、雑誌等で華々しいまでに紹介が続き、1934、5年ごろには翻訳が出るのに機は熟し、渴望もされるようになっていた。2ヶ月で翻訳を終えた伊藤整は、

1935年12月に健文社より出版する。これは、「出版法」(第十九条「風俗壊乱罪」, 1949年廃止)や「新聞紙法」が存在した厳しい言論統制下での画期的な出版であった。セッカー削除版を更に削除(80頁に亘り150箇所以上)し, kiss や sex, assignation, 戦争批判の英語も伏字か英語表記とし, 検閲にかからぬように, 伊藤は細心の注意を払っている。健文社版は, 1年間で10版を重ねた。

ロレンスブームの波に乗り(1936年だけで翻訳書16冊と研究書1冊が出版), 1年後の1936年12月, 三笠書房から出版される。三笠版はシリーズ名を様々に変え, 戦前少なくとも1万1千部が発行され, 健文社版よりも伏字が大幅に減り, 「穏当な」訳語で埋めてある。それは, 「いくら露骨な箇所を伏字としても, 前後の文脈から削除部分が推測できる場合には実際にその表現を用いたのと同じと見做す」とした1934年6月の大審院の判例があったからと思われる。だが, 当時は刑法183条に「姦通罪」(1947年削除)も存在し, 『チャタレイ』中の幾つかの場面が姦通を誘発する恐れがあるとの廉で発禁処分に遭わぬように, 伊藤は三笠版でも慎重な姿勢をとった。

戦後の1950年, 裁判で物議を醸した小山完訳版出版。GHQの事前検閲を受けぬまま出版された本書は, 発売後2ヶ月で15万500部という驚異的な売れ行きを示した。

後半では, 上記3種の訳文を比較する上での留意すべき点を述べ, 裁判中(1951, 5月~1957, 3月)の6年間で翻訳出版された8種の『チャタレイ』や全15種の訳文の特徴に言及。

最高裁での敗訴から9ヵ月後の12月, 小山書店新社より『チャタレイ』出版。この翻訳は全20章で, 表面的にはセッカー削除版に依拠した訳に見えるが, 実はこれにはオデッセイ完全版にしかない英文の訳も数多く盛り込まれ, 何とも奇妙な我が国独特の訳文に仕上がっている。ここに, 伊藤, 小山の, 検察当局に対するささやかな「抵抗」を見る思いがする。これがそのまま, 新潮文庫旧版に引き継がれ, 1996年まで68刷を重ねた。

イギリスにおける「チャタレイ裁判」——ヴィクトリア時代の性の検閲

講師 京都橘大学教授 杉山 泰

Obscene Publications Act が1857年に制定されたが, この年イギリス議会



でグラッドストーンは「売買春のはなはだしい害悪」という有名な発言をしていた。1867年にこの法律で、有罪とされたヘンリー・スコットの裁判で「ヒックリン判定基準」なる「猥褻文書判定基準」が成立し、これ以後の裁判に大きな影響を与えた（坂本昌成「わいせつ物規制に関する日米の比較的考察」と倉持三郎『「チャタレー夫人の恋人」裁判』の紹介）。1869年のアメリカでは、ハーバード大学エリオット学長が「ハーバード大学には女性を入学させることはない」と就任演説をしていたし、同じ年にイギリスではようやくケンブリッジ大学がガートン・コレッジを開設し女子学生を入学させた。進化論を支持する科学者は女性の身体論を議論し、女子人がイギリス、アメリカで生まれたのもこの時期であった。マリー・ストープスの母、シャーロットがエディンバラの学外講座で学んだのが1867年であったことも「ヒックリン判定基準」なるものが生まれた時代背景として象徴的とも言えるだろう。

1911年のロレンスの手紙には、恋人ルーザ・パロウズにフランス語でないと語れなかった「猥褻語」があるし、1911年11月に発刊された *The Freewoman* も出版業界からボイコットされている。イギリスやアメリカでどんな本が発禁処分になってきたのかを眺めるだけで「猥褻基準」が見えてくる（Anne Lyon Haight, *Banned Books*）。イギリスでは1952年から1956年にかけて、特に1954年に猥褻文書として摘発された件数、罰金刑の金額も跳ね上がる（C.H. Rolph, *Books in the Dock*）。こうした時代背景の中で、言論出版の自由の危機を感じた人びとが立ち上がり、1959年に新たな「猥褻文書取締法」が成立し、「作品は全体として考慮されなくてはならない」という新基準が生まれたのである。

### 性表現と表現の自由——チャタレー事件を考える

講師 一橋大学大学院法学研究科教授（憲法学） 阪口 正二郎

『チャタレー夫人の恋人』の翻訳者と出版社の社長が刑法175条違反で起訴された、いわゆるチャタレー事件は、戦後わが国において、憲法が保障する表現の自由との関係で刑法175条の合憲性がはじめて本格的に争われた事件である。最高裁は、「わいせつ文書」の定義については戦前の大審院の定義をそのまま踏襲し、刑法175条は性的秩序を守り、最小限度の性道徳を維持するための規

制であるから合憲であると判断した。この裁判を契機に憲法学の世界においてもわいせつ規制の合憲性に疑いがもたれるようになった。その意味でこの事件の意義は大きい。この事件以降、最高裁は、仮にわいせつ表現を規制できるとしても、規制可能なわいせつ表現とはどのようなものか、それを裁判所はどのような方法で判断するのかという点について検討し、規制できるわいせつ表現の範囲を限定する努力を重ねてきた。しかし、わいせつ表現に関する社会の受け止め方の変化にもなって現在では『チャタレイ夫人の恋人』のような表現が刑事的に規制されることは考えられなくなってはいるものの、性的秩序を守り、最小限度の性道徳を維持するためにわいせつ表現の規制は必要であるという裁判所の立場は現在まで変わってはいない。今日、わいせつ表現の規制の正当化根拠となりうるのは子どもの保護や見たくない人が無理やり見せられることからの保護くらいであり、そうであれば販売や頒布の方法を規制すれば十分であり、刑法175条による現在の規制は広汎すぎて違憲である疑いが濃い。チャタレー事件の開始した「権利のための闘争」はいまだ続いている。それは、われわれが自由で自律的な存在でありうるための闘争である。

第2日 6月3日(日)

【ワークショップ】ロレンスと雑誌メディア

司会 東京学芸大学准教授 大田 信良

本ワークショップは、ロレンス研究を従来の文学研究の枠組を超えて社会・文化的コンテクストに開いていく方向性を具体的に提示するために、同時代の雑誌メディアに注目してロレンスとモダニズム文化を再考した。

従来の文学史的枠組、すなわち、ロレンスカジョイスか、リーヴィスカエリオットか、といった二項対立をどのように脱構築し、歴史的条件としてのモダニティとそれに対する文化的・象徴的反応をあらたに読み直すことができるのか、たとえば、このように問いを設定してみるとことからはじめ、各講師の先生方により、それぞれ、*The Freewoman*, *The New Statesman*, *The Adelphi*, *Laughing Horse* が取り上げられ、あらたな文化史研究の可能性が探られた。

と同時に、このワークショップという場でそれぞれの発表およびフロアからの質問・議論を通じて、あらためてロレンス文学をどのように捉えなおすのか、

文学と文化あるいは英文学研究と歴史研究の係り性をどのように生産的に問題設定するべきか、さらにあらたな議論の可能性を開くことができた、と思っている。

#### フェミニズム雑誌 *The Freewoman* とロレンス研究

講師 大阪大谷大学短期大学部教授 出水 純子

ロレンスは「時代の落とし子」であり、「文化のスポークスマン」であるという Anne Fernihough の指摘を踏まえて、ロレンスとジャーナリズムとの関わりを、*Sunday Dispatch*, *The Spectator*, *The New Age*, *The New Statesman* に掲載されたロレンスのエッセイや記事を紹介しながら考察した。フェミニズム雑誌 *The Freewoman* は、女性参政権運動家であったドーラ・マーズデンが1911年11月に創刊し、モダニズム雑誌 *The Egoist* へと発展した雑誌である。エドワード朝の精神風土である「革新と解放」「新しい言葉」「性と生の意味を問う生への哲学への目覚め」「分裂しない自我の追及」が表象されているこの雑誌と、ロレンス文学との共通点を指摘して、*The Freewoman* がロレンスの生きた時代の社会・文化的環境を知る上で重要な資料であることを検証した。

#### Lawrence と *The New Statesman* —— 初期作品を中心に

講師 東京都立大学大学院後期博士課程 巴山 岳人

フェビアン協会が母体となって1913年に創刊された *The New Statesman* とロレンス作品とに共通して見られる思想上の傾向及び政治性について検証した。同誌はいくつかのロレンス作品を掲載したものの、この時期のロレンスのエッセイにはフェビアン社会主義の特徴であった科学の重視及びそれがはらむ抽象的な思考に対する批判が書かれていることから、同誌とロレンスとは一見対立関係にあるようにみえる。その一方で同誌の記事を実際に読んでいくと、科学を生物学的な進化の帰結としての精神発達の発現とみなす傾向を読み取ることができ、それはロレンス作品に見られる人間の進化についての思想と共通したものだといえる。本発表ではさらに、生物学的な退化の途上にあるとされる大衆への不安が両者に存在していることを指摘し、それを両者を結ぶ点ともいえ

る同誌に掲載されたロレンスの2つの短編において確認した。

### *The Adelphi* のなかのエリオットとロレンス

講師 西南学院大学准教授 加藤 洋介

1923年にJ・M・マリが雑誌 *The Adelphi* を創刊。キャスリン・マンスフィールドの未発表原稿の出版とロレンスの思想の紹介を主な目的とした。マリはこの雑誌を通してイギリス文学は本質的にロマン主義だという彼の主張をくり返し、論敵T・S・エリオットの古典主義に対してロマン主義美学を称揚した。*The Adelphi* には、マリとエリオットの論争に発生しロレンスを巻き込んだ関係の力学、アヴァンギャルドを装ったマリの政治思想、そしてロレンスの思想を利用したマリのイギリス再生の文化戦略などを見ることができる。これらの考察はロレンス文学のコンテクストの理解に資する。*The Adelphi* からいくつかの引用を提示しながらこれらを明らかにし、雑誌研究の一つの意義と可能性を示した。

### D. H. ロレンスと *Laughing Horse*

講師 同志社大学嘱託講師 川田 伸道

*Laughing Horse* はカリフォルニア大学の学生であった Willard Johnson と Roy Chanslor らが編集した、発行部数の少ない小雑誌である。創刊は1922年であった。この雑誌には、Mable Dodge Luhan や Witter Bynner などが寄稿しているが、この雑誌が辛うじて現在その名を留めているのは、D. H. ロレンスが寄稿していることが大きいかもしれない。興味深いのは、ロレンスとこの雑誌とのかかわりによって雑誌の内容が大きく変化したことである。はじめ大学批判を主旨としていたが、8号以降はサウスウェストやメキシコについてのエッセイや作品が誌面を占めるようになった。ワークショップでは、創刊号から最終21号までの中で重要と思われる幾つかの号について触れ、ロレンスが *Laughing Horse* に与えた影響について考察した。

## 掲載論文講評

今号には4編の投稿があり、3編が採用された。

三宅論文は、ドゥルーズもしくはドゥルーズ＝ガタリの著作を参照しながら、ロレンスのテキストをジャンル横断的に読み、両者を「動物」の視座から接続しようとする意欲的な試みである。難解な専門用語を使い、作品論という形をとっていないにもかかわらず、テキストに即してなされる分析が具体的かつ論の展開も明晰である点が高く評価され、論文タイトルと内容の整合性や結論のつけ方等を微修正してもらい掲載に至った。ただし、概ね好評である一方、内容が予想できてしまい驚きがないとの声もあった。単に「ドゥルーズ」を「ロレンス」に当てはめるのではなく、両者を支配従属関係ぬきに「と」で結びつけるという著者自身が掲げる困難な課題に、今後も立ち向かうことが期待される。

巴山論文は、「科学」をキーワードに *The New Statesman* とこの雑誌に掲載された短編を含むロレンスのテキストを比較検討することにより、ロレンスと科学の関係の再考を迫ろうとする野心作である。当然この大きなテーマには錯綜性が付随する。それを解き明かすには用語の使い方に難がある、ロレンスを単純化しすぎている、等の意見があり大幅な修正をお願いした。その結果、ロレンスと *The New Statesman* の近似性（「精神の生物学的進化」や「大衆への不安」）に至る論点が整理され、読みやすさは格段に増した。今回切り捨てざるをえなかった他の論点に関しては、論者自身あるいは読者がこの論考を基に展開することが望まれる。

川田論文は、極めて紹介価値が高いと思われる小雑誌 *Laughing Horse* とロレンスとの関わりを実直に記述している点が評価された。実は当初、論文末尾にはこの雑誌を1920年代アメリカの文化的コンテキストに置き、論の展開を試みる記述が存在していた。しかし、その部分が弱い感は否めず、限られた紙幅でその主題を不十分に展開するよりは、雑誌ならびに雑誌とロレンスの関係の紹介に徹してもらおう方向での修正を依頼した。修正版は、たしかに、主題の発

展や調べまとめた事実に基づく自分なりの見解の提示という点では物足りなさがあるかもしれない。しかし、それは上述した事情にもよっており、次の段階の論考が近いうちに発表されることが待たれる。

残念ながら1編は掲載に至らなかった。選ばれた主題が十分に論じられていないことが主な理由である。短い書き直し期間でこじんまりとまとめることが難しい大きなテーマであるゆえ、ゆっくりと時間をかけて練り直していただきたいというのが編集委員会の希望である。発奮を期待したい。

今号は期せずして、イギリス（巴山論文）からアメリカ（川田論文）への横断（三宅論文）という内容構成になった。次号でも多くの論考が幅広い視野を開示してくれることを願っている。

（編集委員会）

## 編 集 後 記

これまでロレンス協会に数多の貢献をされ、最近では昨年6月に開催された日本ロレンス協会第38回大会の準備・運営で大変な尽力をされた神戸女学院大学の平井雅子評議員が、昨年10月に急逝された。先生には本誌今号の書評を依頼していたところであったため、編集委員会にも衝撃が走った。同大会懇親会の席で大会運営に欠かせない協力者である大学院生の皆さんを目を細めて紹介しておられたお姿や、大会終了後役目を終えた壇上の花を愛おしむように会場から運んでおられたお姿が鮮明に目に焼きついている。それだけに、にわかには信じがたい出来事であり、杉山先生（編集委員）の言をお借りすれば、平井先生は団塊世代の悲哀を背負いつつ蟬のごとくその気配も見せず世を去ってしまわれた。平井先生の教えを受けた若いロレンス研究者が本誌の論文・書評で活躍していることを改めてご報告しつつ、心よりご冥福をお祈り申し上げる。

今号は、まさにその神戸女学院大学における第38回大会を色濃く反映している。平井雅子氏司会で韓国ロレンス協会招待講師としてご発表いただいた Eunyoung Oh 氏がその内容を特別に寄稿して下さったのはじめ、3編の論文も大会での研究発表ならびにワークショップでの発表が基になっている。実は、ワークショップ「ロレンスと雑誌メディア」の内容が興味深いものだったため、個人的に講師の皆さんに投稿の依頼をさせていただいた。当初頭に描いた小特集とまではいかなかったものの、2論文を投稿していただき掲載できたことは幸いであった。大会の発表内容を加筆修正し『D. H. ロレンス研究』に投稿という流れが重要なのは、若手研究者に論文発表の場を提供できるからであることは言うまでもなく、それ以外の本誌への投稿ルートが事実上ほぼ消滅しているからでもある。今後は組織的に、つまり編集委員会として、ワークショップさらにはシンポジウムの発表・報告を本誌に小特集、場合によっては総特集で掲載することを検討していかかもしれない。協会大会に参加できなかった会員も当日の内容を詳しくかつ迅速に共有できるようになり、全体の研究活動の活性化に多少なりとも寄与するのではと思われるからである。また、書き手のヴァリエーションを広げる方法としては、ゲスト編集者も考えられる。ある号のある特集の編集をその方（たち）にお任せするという、珍しくはないが

本誌にとっては新しい、機軸である。こうしたことも含め会員の皆さまから『ロレンス研究』の今後の方向性についてご意見を頂戴できれば幸いである。多忙化が進む中、書評依頼時期も再考する必要があるだろう。今回、極めて限られた時間で書評を書き上げていただいた皆さまに、この場をお借りして深く感謝申し上げる次第である。

前号をもって、任期満了のため杉山泰氏、浅井雅志氏、武藤浩史氏が編集委員の役を退かれた。多大な労力を注いでこられた3名の方々に感謝の意を表したい。有為楠泉氏と新井は留任し、新たに田部井世志子氏、石原浩澄氏、木下誠氏をお迎えし新編集委員会が構成された。ただし、今年度は有為楠氏が海外出張のため、杉山氏に特別にもう1年編集委員会に加わっていただいた。杉山氏が2005年に海外出張され編集作業に携われなかったという事実を目をつけたのが武藤前編集委員長であったか私であったかは定かではない。いずれにせよ、引き受けていただいた杉山氏に厚く御礼申し上げたい。編集委員となった木下氏の代わりには糸多郁子氏に編集事務の重役をお願いすることになり、副会長に就任した武藤氏に代わり新井が編集委員長を担当することになった。

(新井 英永)



---

---

D. H. ロレンス研究 第18号

2008年3月24日印刷 2008年3月31日発行

発行者 日本ロレンス協会 学会番号(10988)

代表者 鈴木 俊次

編集代表者 新井 英永

印刷所 (株)国書刊行会

〒174-0056 東京都板橋区志村1-13-15

電話03(5970)7421(代)

発行所 日本ロレンス協会

〒174-0056 東京都板橋区志村1-13-15

(株)国書刊行会内

Tel. 03(5970)7426

Fax.03(5970)7428

e-mail : lawrence@kokusho.co.jp

郵便振替口座番号01300-5-44587

(口座名：日本ロレンス協会)

---

---

# Japan D. H. Lawrence Studies

No.18 2008

## Articles

- Lawrence “and” Deleuze: Strategy of Becoming in Lawrence’s Writing of Animals  
.....Michiyo MIYAKE 3
- Ideology in Science and Evolution: D. H. Lawrence and *The New Statesman*  
.....Gakuto HAYAMA 18
- The Southwest *Horse* That Lawrence Had Ridden: D. H. Lawrence and the Little  
Magazine, *Laughing Horse* .....Nobumichi KAWADA 33

## Special Contribution

- Reading D. H. Lawrence’s “Leadership” Novel *Kangaroo* from a Postcolonial  
Perspective .....Eunyoung OH 47
- 

## Book Reviews

- Saburo Kuramochi, *The Trials of Lady Chatterley in Japan, the United States and  
England: A Comparative Study* .....Kenichi HAYA 66
- Yosuke Kato, *D. H. Lawrence and the Ideas of Degeneration: From the Fin de Siècle  
to Modernism*.....Hiroe MONGUCHI 70
- Masakazu Koga, *A Meaning of Lawrence in Twenty First Century*  
.....Akiko KAMADA 74
- Jiro Yoshimura, *Lawrence’s Literature and Idea: Starting with the Sun*  
.....Yasuko USAMI 78
- Antonio Traficante, *D. H. Lawrence’s Italian Travel Literature and Translations of  
Giovanni Verga: A Bakhtinian Reading*.....Yasuhiro KONDO 82
- Carl Krockel, *D. H. Lawrence and Germany: The Politics of Influence*  
.....Akira OHIRA 87
-